IS〈インフィニット・ストラトス〉～GEARを使いし者～

フュージョニスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉～ＧＥＡＲを使いし者～

【Ｎコード】
Ｎ４６７０Ｗ

【作者名】
フュージョニスト

【あらすじ】
高校帰りに中古のビデオ店に行き懐かしいアニメのＤＶＤを買った少年と
その幼馴染の少女は、電車事故に巻き込まれ死んでしまう。
しかし、神と名乗る少年に転生させられた。ＩＳの世界へと。
……という感じの、主人公転生モノです。
読み始め、見始めたばかりで足らない知識が多いです。
それでも読んで楽しんで頂ければ、と思っています。

プロローグ～転生（前書き）

どうも、フュージョニストです。

この間新しいのを投稿したばかりなのに、また新しく書いてしまいました。

まだ見始め、読み始めたばかりなので至らない点が多いと思いますが、

お付き合いいただけると嬉しく思います。

それでは、どうぞ。

プロローグ～転生

あれ、ここは、どこだ？

ただただ白くて、広い空間だな、ここ。

確かオレは、学校帰りに中古のゲーム・ビデオ店に幼馴染と行って、

懐かしいロボットアニメのＤＶＤを見つけたからそれを買って帰る途中に……。

と、そこまで考えたところで。

「不運な事に、幼馴染の子と共に電車の脱線事故に巻き込まれたんだよ。」

後ろから声を掛けられた。

今気付いた。

幼馴染のこいつも一緒だな。

ん、誰？

オレの目の前に、白衣を着た１０歳くらいの少年が居るんだが。

「え、あぁ、ボク？こんな姿で言って信じてもらえるかは分からないけど、神だよ？」

へぇ～、神様か。

で、神様が、何の用？

「あれ、あんまり驚かないんだね。」

まぁ、いきなりこんなところに居たからな。
驚きを通り越して呆然としてるんだ。

「そう……。で、あぁボクの用だったね。君は、転生する気は無いかい？」

転生って、別の世界で生きろってことか？

「うん、そうなる。そこの彼女も一緒に。」

こいつも、一緒にか。
それなら、オレはかまわない。

「私も、それならいい。」

ん、起きたのか。
だそうだ。オレたち二人一緒ならいいぞ。

「ありがとう。」

そういや、何で転生させてくれるんだ？

「実は、あの電車事故は本来ならあの時には起こらないはずだったんだ。
でも、ごく稀に現れる不確定要素のせいで起こらないはずの時に事故が発生してしまったんだよ。」

そうなのか？

「そうなんだよ。しかも、そのイレギュラーに巻き込まれて本来死ぬ事のない人が死んでしまった。」

……オレら二人は、その本来死ぬ事のない人に入ってたって訳か。

「うん。言い方は悪いけど、あの事故で本来死ぬ人は決まってた。だけど、そこに違う人が二人も巻き込まれた。それは、完全に神側の対応不足なんだ。」

まぁ、過ぎた事を言っても始まらないな。

物事は、前向きに考えないとな。

「そうだね、そう言ってもらえると助かるよ。で、君達に行ってもらう世界は、『ＩＳ　インフィニット・ストラトス』の世界だよ。」

そういやぁ、最近少しだけ読んだな。

「うん。その世界だよ。それで、君達にその世界で乗る機体を決めて欲しいんだ。」

そうか……。

オレは、あれに決める。

「あれ、とは？」

小学生のときに見てたロボットアニメの機体――ＧＥＡＲ（ギア）戦士（ファイター）電童（でんどう）で。

出来れば、騎士ＧＥＡＲ（ナイトギア）　凰牙（おうが）も一緒に。

「それくらい、お安い御用だ。ただ、データウェポンは初めからは使えないようにしておくから。」

それでなんら問題ないな。

特に、あれの能力が最初から使えたら無双しそうだし。

お前はどうする？

「電童に出てた、セルブースター・ヴァルハラ。あれがいい。」

だそうだ。

「二人とも同じ作品からか。うん、楽で良いや。」

神として、その発言はどうよ？

「気にしない気にしない。

あ、それと、君らの機体の補助に人工ＡＩを付けておくから、目が覚めたら確認してみて。」

何から何まで悪いな。

あ、向こうでの家とかお金とかは？

「それについてもこっちで何とかさせてもらうよ。」

それだったら、前の家で使ってたものを置く事ってできるか？

「うん、全く問題なくできるよ。」

……本当に、何から何までありがとな。

「いいんだ。こっちの不手際なんだからさ。じゃあ、これから送るよ？」

ああ。

「うん。」

……手、つなぐか？

「……ん、ありがと。」

じゃ、いいぞ。

「うん。どうか、君達のこれからの生活が幸せでありますように……。」

そう神が言った後、オレたちは、さっきの空間から飛ばされた。

プロローグ～転生（後書き）

というわけで、プロローグでした。

次回から、本編に入ります。

まだまだ分からないところが多々あるので、もし何かあれば、感想などで
行って頂ければと思います。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘など、お待ちしています。

では、また。

第1話～ＩＳ学園へ、そして（前書き）

どうも、フュージョニストです。

勢いで、２話一気に書いてしまいました。

おかしい点、結構あるだろうと思います。

ですが、楽しんでもらえれば嬉しいです。

では、どうぞ。

第1話～ＩＳ学園へ、そして

オレたちがこの世界――ＩＳの世界に来てから1週間がたった。
オレ――如月北斗と幼馴染のアイツは、ＩＳ学園の入試を受け、見事合格した。

……まぁ、転生したんだから、ＩＳ学園に行けないと始まらないんだが。

そして今日は、ＩＳ学園に入学する日の朝。

目覚ましが鳴っている。
時刻は、朝６時半。

「ん、ふあぁ。」

オレは目覚ましを止め、大きくあくびをして起きた。

隣の部屋のアイツは……っと。

「もう起きてるのか……。あぁ、今日の朝飯の当番、深音だったか。」

そう呟きながら、一階に下りる。

「深音、おはよう～。」

台所に居る幼馴染の哀元深音（あいもと みね）に挨拶をする。

「あ、北斗。おはよ。」

そう言って返事をする深音は、既にＩＳ学園の制服を着て、その上から
ピンクのエプロンをしている。

綺麗に手入れされた背中まである黒髪にやや釣り目の黒い瞳。
身長は少し低いが体の線は、そこらの女子よりいい。（特に胸が。）

「早く食べなよ～。ここからだと結構時間掛かるからね。」

「おう。じゃ、頂きます！」

そう言ってテーブルに置かれた料理を食べる。
今日は、焼き魚に浅漬け、ご飯に味噌汁という和食メニュー。

深音は、転生する前の世界でも幼馴染だった。
お互い、早くに親が居なくなったから何か感じたんだろう。

それから中学、高校と同じところへ行き……事故に巻き込まれた。

それで、前の世界から神によってこの世界に転生させて貰った。

＜北斗、深音。早く出ないと時間に遅れるわよ？＞

そう言ったのは深音の首に掛かっているドッグタグ。
神が付けてくれた人工ＡＩの一つ――人格名”ベガ”。

電童に出てきた副指令の女性と同名だ。

＜そうだな。初日から遅刻ではみっともないからな。＞

後から喋ったのは、オレの腰のベルトについたケースに入っている青と白、赤と黒の
２つのゲーム機みたいなもの――ギアコマンダーの人口ＡＩ”アルテア”。

同じく電童に出てきた男性で、ベガの兄。

「分かったよ。丁度食べ終わったしな。」

それから食器を洗って片付けていたら、出発時刻になった。

「「じゃ、行ってきます！」」

誰も居ない、だけどまた帰ってくる家にそう言ってオレたちはＩＳ学園に向かった。

そして、しばらく電車やらモノレールやらに揺られ、ようやく着いた。

……ＩＳ学園に。

オレらが校門に行くと、校門に一人の教師が立っている。
黒のスーツにタイトスカート、狼のような鋭いつり目。

――織斑(おりむら)千冬(ちふゆ)。

何か、色々伝説の人がそこに居た。

「ん？お前達か、如月北斗と哀元深音は？」

そう聞いてきた。

「「はい、そうです。織斑先生。」」

二人同時にそう返す。

何年幼馴染やってると思う？

これくらい、造作も無いぞ？

「うむ、いい返事だ。付いて来い。入学式の後、クラスへ案内する。」

「「はい！」」

そう返事をして、織斑先生の後を付いて行き、入学式の会場へ行って式に出る。

その後、また織斑先生に呼ばれ、今度は教室に向かう。

「あぁ、二人はここで待て。私が入れといったら入って来い。」

「はい。」「わかりました。」

そういい残して、教室に入っていく織斑先生。

なかには、副担任の山田真耶先生も居た。
服と身長がなんとなくあってない気がするのは、気のせい、なのか？

そのせいで、かなり幼く見えてますよ？

……途中、『きゃあああぁぁっ！』という黄色い声と、『スパアァァン！』という
何かを固いもので勢い良く叩いた音がした。

その後に。

「黙れ、馬鹿者共が！
ここに居る面々の自己紹介は済んだようだが、まだ紹介していないものが居る。
如月、哀元、入って来い。」

そう言われたので。

「「失礼します。」」

と言って入る。
そして。

「初めまして、如月北斗といいます。えぇと、まぁ、よろしく！」

「同じく、初めまして。哀元深音です。どうぞよろしく。」

そう自己紹介をして、お辞儀をする。

すると。

『き』

「「き？」」

嫌な予感がしたから、深音と共に耳をふさぐ。

と同時に。

『きゃあああぁぁっ！』

と、本日2回目のクラスからの黄色い声が。

「入学初日から、二人も男の子が居るなんて！」

「体つきがとっても良さげ～！」

「あんな人に、守ってもらいた～い！」

とまぁ、色々聞こえた。

でも、あんまり騒ぐと……。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。

それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

あ、出席簿で叩かれはしなかったけど呆れてるな。

そして。

「さぁ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。
その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。
いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

そう言い放って、授業の準備に入る。

とりあえず、言われた席について思ったのは。

「「（織斑先生、容赦ねぇ（ない）……。）」」

ということだった。
ちなみに、これを思った直後、二人揃って出席簿アタック喰らいました。
……かなり、痛い……。

そんなことがあり、１時間目の休み時間。

このクラス――いや、この学校でオレ以外に１人しか居ない男子が話しかけてきた。

「えっと、如月で合ってるか？」

「ああ、如月北斗だ。北斗って呼んでくれ。苗字は落ち着かないからな。」

と返すと。

「じゃあ、俺も。織斑一夏だ。一夏でいいぜ。」

そう返ってきた。

「わかった。やっぱり、クラス、いや、学校生徒が女性ばっかりってのは……。」

「あぁ、きついもんがあるな……。」

「「はぁ……。」」

と一夏と同時にため息をつく。

おいそこ。

「織斑x如月……行けるわ！」

「どっちが受けかしら……？」

とか、変な話をするな。

そう思っていると。

「……ちょっといいか？」

と、一人の女子が話しかけてきた。

身長は、オレや一夏と同じか少し低いくらい。

長い黒髪をポニーテールに纏めている。

若干不機嫌そうな顔なのは、元々なのか、性格なのか。
なにか、日本刀のような雰囲気の女子がそこに居た。

「……箒か？」

「……。」

どうやら、一夏の知り合いらしい。

「一夏、行ってきていいぞ。話なら、次の休み時間でもいいだろう？」

「おう、悪いな。じゃ、行ってくる。」

そう言って、話しかけてきた知り合いと一緒に廊下に出た一夏。

で、オレの幼馴染は、っと。

「でさ、――――。」

「へぇ。」

「それで、――――。」

「ふぅん。」

と、話しかけられているのを適当に流している。
まぁ、アイツはあんまり人と話すのは好きじゃないから仕方ないんだよなぁ……。

自分が認めた、というか心を開いてもいいと思った奴にしか素直に話さないからな。

そう言った時間が過ぎて、休み時間が終わった。

授業直前、また一夏が織斑先生の出席簿アタック喰らってたな。

……合掌。

そして、2時間目。

ＩＳについての授業。

副担任の山田先生が教科書を読み、クラスメイトがそれをノートに書いていく。

それは、オレも例外じゃない。

だが、オレの横にはその例外が居た。

――そう、一夏だ。

「何か質問のある人はいますか？」

と山田先生が言った時、

「はい！」

と言って手を上げた一夏。

……まさか、お前……。

「なんでしょう、織斑君！」
「ほとんど全部わかりません。」
……マジで言ってんのか？
その後、一夏は本日何度目になるかわからない出席簿アタックを喰らい、撃沈しましたとさ。

そんなことのあった2時間目の休み時間。
オレは一夏に頼まれて、勉強を教えている。
教えているのは、無論、ＩＳについての事だ。
深音は、隣で本を読んでいる。
「あれ？ここの理論て、これで……こうか？」
「惜しいな。ここを、こっちに持っていってから、こうやるんだ。それについては、テキストの――」
「……、ふわぁ。」
このページ、と言おうとしたら。
「ちょっと、よろしくて？」
と声を掛けられた。

「ん？」

「へ？」

「……、？」

声の聞こえたほうを向くと、いかにもお嬢様って感じの女子がそこにいた。

欧州の方の人か？

腰まである金髪、青い瞳だから、多分そうだ。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、あぁ、訊いてるけど。どういう用件だ？」

と聞き返す一夏。

まぁ、いきなり名前も覚えてない女子に話しかけられたら、そんな返答になるわな。

「まぁ！何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、

それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

う～ん、こういう奴は、苦手だな。

一夏も、多分同じことを考えてるんだろうな。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし。」

一夏はそう言った。
それには、俺もうなづいておく。
だって、いちいち言うの面倒だからな。
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？
イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」
この女子、セシリア・オルコットっていうのか。
だって、自己紹介のとき教室内にいなかったから分からなくて当然だろう？
「あ、質問いいか？」
なんだろうな。
一夏の訊こうとしてる事が、なんとなく分かった。
「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」
これ訊かれたら、多分オルコットは怒るか呆れるかだな。
「代表候補生って、なに？」
……やっぱりか。
がたたっ！
オルコットだけじゃなくて、クラスの女子も数人ずっこけてる。

「あ、あ、あ…」

「『あ』？」

あ、オルコットが、震えてる。
なんだ？

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん」

なんかもう、一夏の馬鹿さ加減には呆れたな。

「一夏。簡単に最大限ぶっちゃけると、エリートだってことだ。」

「そう！　エリートなのですわ！」

オレがそう言うと、オルコットが跳ね起きた。
上がったり下がったり、忙しい奴だな。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。
その現実をもう少し理解していただける？」

うん、ここは一夏とあわせておこう。
というか、これしか言えないだろうよ。

「「そうか、それはラッキーだ（棒読み）」」

な？

「お二人とも……馬鹿にしていますの？」
「「だって、お前が幸運だって言ったんじゃないか」」
言ってたよな？
「あっ、あなたねぇ……大体、あなた方はＩＳについてなにも知らないくせに、
よくこの学園に入れましたわね。
あなた達二人だけが唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、
少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」
「俺に何かを期待されても困るんだが…」
「それに同意だ。」
一夏の言った事はもっともだ。
別に、期待してほしくてここに居るんじゃないからな。
「っ――――人の気に障るようなことばかり……ふん。まあでも？
わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ」
「いや、別にお前に優しくしてもらわなくても。」
怒りのボルテージ上昇って所か？　さらに震えてるんだが。

「まあ、わたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから？
ＩＳについて分からないところがあれば、泣いて頼まれたら教えてあげてもよくってよ？」

こんな奴のところへは、正直行きたくはない。

「……一夏、言ってくれれば、勉強なら教えるぞ？」

「おう、サンキュー。でも入試ってあれか？ＩＳ動かして戦うやつ？」

そう言えば、と言った風に話し出す一夏。

「それ以外に入試などありませんわ」

「あ、それ俺も倒したぞ教官」

なんでも、山田先生が試験官らしく、あっちが自爆しただけらしい。

まぁ、倒したと言えば倒したんだな。

俺は、普通に普通の試験官を倒したが？

「俺もだな。でも、割と普通に倒せたぞ？」

「は……？」

オレと一夏の言った事が信じられないらしいな。

ようやく、意識が戻ってきたようで、

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
と訊いてきた。
「女子ではっつーオチだろ？」
「だよな」
多分、普通にそうだと思う。
「つ、つまり、わたくしだけではないと…？」
「いや、知らないけど」
「そうなんじゃないのか？」
「あなた！　あなたも教官を倒したっていうの！？」
なんかもう、鬱陶しく思えてきた。
あぁ、休み時間、早く終われ……。
「うん、まあ、たぶん」
「倒したな、割と普通に。」
「多分！？それに、割と普通にって、どういうことですか！？」
いや、そんな剣幕で捲くし立てられても……。

「えーと、落ち着けよ。な？」

一夏がそう言ってなだめようとする。

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン

お、授業の予鈴のチャイムだ。

「残念、時間切れだぞ、オルコット。」

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

「「（逃げはしないが、来なくていいぞ。）」」

オレも一夏もそう思っていた。

そして、３時間目。

担当は……、織斑先生だ。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。

……あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

クラス対抗戦？

ってことは、ＩＳでの実戦か……。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席
……まぁ、クラス長だな。
ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力の推移を測るものだ。
今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。
一度決まると一年間変更は無いからそのつもりで。」

ふ～ん、ちょっと面倒そうだけどＩＳでの実戦はしたいな。

「はい、織斑君がいいと思います！」

「私も、それがいいと思います！」

あ、一夏が推されてる。

ん？って事は……。

「あたしは、如月君を推薦します！」

「私も如月君で！」

……やっぱりな。

まぁ、一夏は否定する――ってかしてるな。現在進行形で。

オレは、まぁ、楽しそうだからいいと思う。

言ったら一夏が押し付けてきそうだから、言わないがな。

と、そう思ってたら。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

机を思いっきり叩いてオルコットが立ち上がった。

まぁ、言おうとする事はわかりたくない位わかるから。

たぶん、男子が代表なんて恥さらしだ、とか。

自分はそんな屈辱に耐えられない、とか。

自分の実力からすれば、自分が代表になるのは当然、とか。

……ってか、思ってたこと全部あってたわ。

現に、現在進行形で言ってるし。

「――大体、文化としても後進的な国で暮らさなければならない事自体、

わたくしにとって耐え難い苦痛で――」

……いい加減、イライラしてきた。

「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

「全くだ。大して日本の事も知らんくせに、日本を馬鹿にすんじゃねぇよ。」

あぁ、言っちまったな。

だが、後悔はしていないな。

「あっ、あなたたちねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

そう言って突っかかってくる。

「あぁ、何言ってる？先にオレらの祖国を侮辱したのはお前だろうが、セシリア・オルコット！」

もう、黙ってる必要も無いか。

なので、マジで切れさせてもらおうか？

「決闘ですわ！」

思いっきり机を叩いてそう宣言するオルコット。

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「上等じゃねぇかよ。」

そう言う、オレと一夏。

しばらくにらみ合って、一夏が言う。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

多分、いや、絶対に違うな。

それに、それはオレも言おうと思ってたし。

「「いや、俺（オレ）がどのくらいつけたら（つけりゃ）いいのかなーっと。

」」

そう言った瞬間、クラス中の女子が爆笑しだした。

「織斑君、如月君、本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

「二人は確かにＩＳを使えるかも知れないけど、それは言いすぎだよ。」

と言った事が理由らしい。

あ～、くだらね。

「何が、くだらないんですの？」

あ、声に出してたか。

ま、いいや。

「女だから強い、偉い。確かに、そうだろうよ。

今の世の中がそうだし、”本当”に強い人ならいくらでもいるだろうな。

だがな、自分が女だからってだけで自慢をしている馬鹿に、負ける気なんてしないし、

負けるつもりも無い。」

そう思うぜ、ほんとに。

「それは、わたくしが弱いとでもおっしゃいますの？」

「お前”だけ”じゃねぇな。お前も、一夏も、オレも。クラスのみんなもだ。
少なくとも、オレはそう思うぜ」

そう言って織斑先生のほうを向く。

「と言う訳なんですけど、どこか使える場所って無いですか？」

オレがそう言うと。

……スパアァァン！

と、出席簿で思いっきりはたかれた。
ヤバ、軽く脳震盪起こしそうだ……。

「何が、『と言う訳なんですけど』だ、馬鹿者。
……まぁいい。話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第３アリーナで行う。織斑とオルコット、それに如月はそれぞれ用意しておくように。」

そう言って、授業を始める織斑先生。

こうして来週、オレ、一夏、オルコットで模擬戦を行う事になった。

さてと、そろそろ、起こすかな。

……電童を。

第1話～ＩＳ学園へ、そして（後書き）

というわけで、セシリアとの決闘に持っていくところまでです。

というわけで、次回はセシリア戦になります。

……戦闘描写、まともに書けるかなぁ。

ちょっと、心配です。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などありましたらよろしくお願いします。

では、また次回で。

第2話〜クラス代表決定戦（前書き）

こんにちは、フュージョニストです。

今回は、サブタイトルどおりです。

では、どうぞ

第2話〜クラス代表決定戦

オルコットとのクラス代表を賭けて模擬戦をする事が決まった日の放課後。

オレは教室で一夏に今日習ったところの復習を兼ねて勉強を教えていた。

「で、これがこうなるんだ。解ったか？」

「な、なんとか……。」

「……一夏って、ばか？」

そう言ったのは、オレの隣で文庫本を片手に宿題をする深音の姿がある。

ちなみにオレは、授業後の休み時間を４割ずつ使ってもう終わらせた。

だって、帰ってからやるのは面倒だしなぁ。

「ぷっ！」

「ぐっ……。何も言い返せん……。」

ちなみに、深音は一夏のことを名前で呼んでる。

休み時間、オレと一夏で話してるところに来て自己紹介して、直後に普通に呼んでた。

一夏も気にして無さそうだから、いいか。
少し人見知りのあるこいつが、早くなじめるのはいいことだ。
そう思っていると。
「あ、織斑君、如月君、哀元さん、まだいたんですね。よかったぁ〜。」
と言って入ってきた、我らが副担任の山田先生。
「あ、はい。丁度、一夏の勉強見ながら宿題してまして。終わったから帰ろうと思ってたところです。」
「そうですか……。実は、寮の3人の部屋が決まりました。」
と言って、オレと深音に同じ部屋の、一夏に違う部屋の鍵を渡す山田先生。
「あれ、オレと一夏が同室じゃないんですか？」
そう。
このままだと一夏は他の女子と、オレは深音と一緒の部屋になってしまう。
「そうしたいのは山々なんですけど、決定事項なので、ごめんなさい！」
そう言って思いっきり頭を下げる山田先生。
でも、勢いが良すぎて……

ゴンッ！

といい音を立てて、机に頭突きした。

「はぁうっ！」

と声を上げて頭を押さえる我らが副担任。

大丈夫なのか？

「と、というわけで、よろしくお願いしますね……。」

目に涙を浮かべてそう言う先生。

トドメに。

「山田先生って……、おっちょこちょい？」

「うっ……。」

深音の一言が突き刺さったようだ。

「じゃあ、行ってみるか。深音」

「うん。」

そう言って教室を出た。

一夏は、織斑先生となんか話してるみたいだ。

というか、いつの間に居たんだ？

「えっと、１０２６室は……。」

「ここ。」

部屋を探して寮内を歩く事数分。
ようやく部屋を見つけて、鍵を開ける。

「ん？お前達は……。」

「え？その声は、篠ノ之？」

後ろから声を掛けられたから振り向くと、制服に剣道道具を持った篠ノ之がいた。

「こんなところでどうした？」

「いや、ここがオレらの部屋だから、確認に。篠ノ之は、部活帰りか？」

剣道道具を持ってるから、多分そうだろう。

「ああ。では、また明日だな。如月、哀元。」

「おう、じゃな。」

「おやすみなさい、箒さん。」

そういって、お互い部屋に入った。

そして、部屋に入って一言。

「「これ、ほんとに寮？」」

そう言えるほど、綺麗に整理された部屋だった。

パソコンは備え付けてあるし、シャワールームもある。

キッチンまで完備か。

「とりあえず、送っておいた荷物、整理するか？」

「そうだね、そうしよう。」

と言っても、オレはダンボール２つ、深音はダンボール３つと結構少ないと思う。

基本、衣類とかそんなもんだ。

そう思っていると、廊下から大きな音が聞こえた。

というか、隣から。

隣って、篠ノ之だったよな？

そう思って、ドアを開ける。

「……何があった、一夏？」

そこには、おそらく篠ノ之に部屋を追い出されたであろう一夏がいた。

「あれ、北斗。お前、隣なのか。」

「ということは、篠ノ之と一緒か。
大方、篠ノ之がシャワーから出てきたとこでも見て、木刀か竹刀で追い出されたか？」

「何でそんなピンポイントで分かるんだ！？」

おぉ、ホントに合ってたか。

「まぁ、謝り倒して入れてもらえ。じゃな。」

「ちょっ！」

という一夏を残して、ドアを閉めた。

「……何やってるんだろ、一夏。
この学園の事なんだから最初から一人部屋は無理だと思うのは普通だよ。」

というのは深音。
キッチンから声がした。

「あれ、食材あったか？」

「少し、荷物と一緒に送っておいたから。」

そう言う深音の足元には、ダンボール。
ほんとに、送ってたのか……。
「今日は、時間も過ぎちゃったし、私が作るけど？」
「え？あ、ほんとだ。」
時計を見ると、午後7時半。
食堂は確か、7時までだったな。
確かに、時間過ぎてるな。
「じゃ、頼むわ。」
「うん、分かった。先にシャワーでも浴びてきて。その頃には出来てるから。」
「おう。」
そんなやり取りをして、お言葉に甘えて先にシャワーに入る。
そして、２０分くらいしてシャワーから出ると。
「丁度出来た。早速食べよ？」
テーブルに綺麗に盛られたスパゲッティのミートソースが置いてある。
オレは深音の向かいに座ると。

「んじゃ、頂きます！」
「どうぞ、召し上がれ。」
そう言って二人で食べ始める。
しばらくして食べ終わり、食器を片付けるともう9時を回っていた。
「9時か……丁度いいか。アルテア、プログラム立ち上げて。」
＜了解した。＞
という声がすると同時にウィンドウが4，5画面開く。
「ここ2，3ヶ月動かしてなかったからな、少し調整しとかないとな。
あ、電童のデータを凰牙にフィードバックしないと。
いきなり乗ることになって動きませんじゃ話にならないからな……」
そう呟きながら、調整を始める。
と同時に。
「まだ、ブラックボックスは開かず、か。」
＜このブラックボックスが、この機体の武器なのだろう？＞
「あぁ、そう訊いてる。」
神に、とは言わない。

「まぁ、試験官の人も武器無しで行けたから、何とかなるだろ。」

＜そうか。なら、何も言わぬさ。＞

そう言って、ウィンドウを閉じる。

「うわ、１１時か。結構集中してたんだな。……さて、寝るか。」

深音は……、もう寝てるし。

「おやすみ、深音。」

そう呟いて、もう一つのベッドに入った。

そして、そんな感じに一週間が過ぎた。

何かあったかといえば、一夏が篠ノ之さんに『鍛えなおす！』と言われて放課後剣道場に
連れて行かれたり、一夏に学園から専用機が支給されるとか言われたり、
一夏が織斑先生に度々事ある毎に出席簿アタックを喰らってたくらいで、それ以外は至って平和だ。

そんなわけで月曜の放課後、第３アリーナ。

ピットには、オレ、深音、一夏、篠ノ之の４人がいる。

なんか、一夏と篠ノ之が言いあってる。

「仕方ないだろう、お前のＩＳも無かったのだから。」

「まぁ、そうだけど――じゃない！知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

「……。」

「目　を　そ　ら　す　な　っ　。」

つまり、一夏は篠ノ之から訓練を受けた、……剣道の。

だが、それしかしてなかったらしい。

それに、一夏のＩＳもまだ来てない。

これは、一夏より先にオレか？

と思ったところで。

「お、織斑君織斑君織斑君！」

山田先生と織斑先生がピットに入ってきた。

ということは、ようやく一夏のＩＳが来たのか。

「来ました！織斑君の専用ＩＳ！」

そう言って山田先生が指差す先には、『白』のＩＳがあった。

――『白式（びゃくしき）』。

それが一夏専用ＩＳの名前だ。

それを装着し、一夏がアリーナに向かう。

その直前。

「箒。」

「な、なんだ？」

「行ってくる。」

「あ……あぁ、勝って来い。」

そんな短いやり取りを篠ノ之として、一夏はピットからアリーナへと飛び出していった。

―２７分経過―

現在、一夏の劣勢。

被弾によって白式のエネルギーも減ってきてるし、オルコットもビット兵器

『ブルー・ティアーズ』を使い一夏を追い詰めていく。

だが、一夏も負けじとビットを落とし、オルコットに向かっていく。

その途中。

ピットでモニタを見てたオレは、一夏の左手が目に付いた。

それは。

「一夏の奴、何で左手をグーパーしてんだ？」

「ん？よく気付いたな、如月。

……あれは、アイツの昔からの癖だ。あれが出ると、大抵簡単なミスをする。」

なるほど。

さすが姉弟だなぁ……

「流石ご姉弟（きょうだい）ですねぇ。そんな細かいところまで分かるなんて。」

「……ま、まぁ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな。」

と言ってからかっていた山田先生は、次の瞬間、織斑先生にヘッドロックされていた。

……ちょ、ちょっと、ミシミシいってますよ！？

そんなやり取りがあった直後、残っていたセシリアのビットから放たれたミサイルが一夏に直撃、

その瞬間に白式が一次移行（ファーストシフト）を終え、真に一夏専用機体となる。

「俺は、世界で最高の姉さんを持ったよ。」

そんな一夏の呟きが聞こえる。

「俺も、俺の家族を守る。」

「は？あなた、何を言って――。」

何を言っているかわからないようだな、オルコットは。

まぁ、オレもそこまで知らん。

「取り敢えずは、千冬姉の名前を守るさ！」

そう言って、その手にあるＩＳ用の太刀――雪片弐型を握り締め、

一夏はセシリアへとつっ込んでいく。

「おおおぉっ！」

そして、その斬撃が当たる直前。

『試合終了――勝者、セシリア・オルコット』

とブザーと共にそう宣言され……。

「あれ……？」

「なんで……？」

と、呆然としている一夏とオルコットがいた。

「さてと、次はオレか。」

そう呟いて、ピットに向かう。

すると、一夏が戻ってきた。

「なんかよく分からんけど、負けちまったな。」

本当に分かって無さそうだ。

「なんでかは、オレも戻ってきてから織斑先生にでも訊け。オレは、これから行ってくる。」

「おう、負けんなよ。」

「ああ。」

そう言い、オレと一夏は拳をぶつけた。

―アリーナ内―

「さて、と。行くか、”電童”！」

そう言ってオレは、ベルトにつけたケースから青と白の、片手持ちの
ゲーム機のようなものを取り出す。

――ギアコマンダー。

これがオレのＩＳである電童の待機状態。

そして。

拳銃の撃鉄を引くように、ボタンを押す。

「電童、起動！」

オレのその声と同時に、ギアコマンダーが光る。

肩や上腕、腰には青い装甲が。

前腕、脛部には黒い、車輪にも見えるタービンが。

胸部には白い胸当て、背部には放熱機構の付いたバックパック。

顔には、顔全体を覆うようなバイザーが装着される。

そして両手足のタービンが高速回転し、準備完了すると、顔を覆うバイザーが上に開く。

その下にあるのは顔の上半分を覆う赤いマスクにライトグリーンのカメラアイ。

これが、オレのＩＳ――ＧＥＡＲ（ギア）戦士（ファイター）電童だ。

それを展開し終えて、アリーナの地面に立つ。

「なっ！？全身装甲（フル・スキン）タイプですって！？」

その姿を見て、一瞬驚くオルコット。

だが、すぐに切り替え、いつもの口調で言う。

「逃げずに来た事は、褒めて差し上げますわ。

ですが、勝つのはこのわたくし、セシリア・オルコットですわ！」

「そうかい。……一夏の奴があれだけやったんだ。オレも負けらんねぇなぁ……。」

そう呟き、オルコットのほうを見る。

『両者、開始位置へ。……それでは、試合開始してください。』

そうアナウンスが流れると同時に、手にしたライフルをオレに向けて撃ってくる。

オレはそれを。

「”疾風、激走脚”！」

地面に膝立ちになり、両足の脛部のタービンでアリーナを走破する。

「なっ！地面を走るですって！？」

う～ん、驚いてるな。

確かに、基本ＩＳは空戦メインだからな。

飛ばずに戦うなんて、いい的にしかならないからな。

＜北斗よ、策はあるのか？＞

そう訊いてきたのは、補助ＡＩのアルテアだ。

「（ん、一応は。とりあえず、避けまくって、焦らせる。

閃光雷刃撃と、飛翔烈風波のプログラムを指示したらインストールしてくれ。）」

＜了解した。＞

デンチ残量はまだまだある。

さてと、どこまで避けきれるかな？

―ピット内―

「すごいですすごいです！如月君、今のところ被弾なしで全部避けてます！？」

山田先生がそう言って北斗を見てはしゃぐ。

「それにしても、彼のＩＳって不思議ですねー？武器って無いんでしょうか？」

確かに、さっきから地面を滑るようにタービンで走ってて、オルコットの攻撃が全く当たってない。

だけど、北斗の方から仕掛けることは無く、何かを狙ってるような感じがするんだが……。

「あいつのＩＳは、武器は無いぞ。あいつ自身の出してきたスペックシートで確認した。あいつはその状態で、試験官の教諭の乗ったラファール・リヴァイ

ブを退けている。」

なっ！？

武器無しの無手で勝ったってのか！？

「その後聞いてみたが、あいつは『この電童の武器はコレ（タービン）です』って言っていたな。」

……一体、どんな作戦で倒したんだ？

それが気になって、俺はモニターを食い入るように見ていた。

箒の隣にいた哀元は。

「……なるほど。そうするつもりなんだ。」

って呟いてた。

俺が見てる事に気付いたのか、哀元はみんなの方を向き。

「もうすぐ、北斗が動く。」

と一言だけ言って、またモニターに視線を戻した。

一体、どう動くんだ？

哀元と千冬姉以外は、それを疑問に感じながら。

―アリーナ内―

「くっ、何で当たらないんですの！？」

今、オルコットはとても焦ってきてるな。

そりゃあ、ビットを使って攻撃しても全部避けてるからな。

それに。

大分、アリーナの地面も削れたしな。

「（……行くか。アルテア、飛翔烈風波インストールだ！）」

＜承知！ドライブ、インストール！＞

そして、インストールされると同時に、両腕のタービンが高速回転しだす。

それを、地面に叩きつける！

「飛翔、烈風波！」

すると、削られた地面の粉が舞い上がり視界を隠す。

そこにさらに。

「＜（閃光雷刃撃、インストール！）＞」

その竜巻に中心に入り込み、両腕脚のタービンを超高速回転させる。

すると、タービンが青白い電気を帯びる。

それを、自分も回転する事で全方位に向け放電する！

「閃光、雷刃撃！」

その電気は刃のようにも見える。
それが竜巻に纏わりつき、オルコットの動きを制限する。

おそらくビットは、オルコットからの指示を何らかの通信で行っているはず。
なら、それを高圧電流から出る電磁波で邪魔してしまえばいい。

そのための竜巻に電撃だ。

当然、竜巻の被害が無いのはその真上の無風地帯。
そこに向かってくるのを……。

「なっ！」

飛んで、叩き落せばいい！
オルコットが竜巻から抜けるのに意識の向いている隙を突く。

コレが、オレの作戦。

「旋風、回転脚！」

飛び上がってすれ違いざま、叩きつけるようにタービンを回転させた脚での蹴りを叩き込む。
それが直撃して、オルコットのシールド・エナジーが削られる。

「くぅっ！」

蹴りでの衝撃で、ライフルを取り落としたオルコット。

……これで、トドメだ！

「爆砕、重落下！」

今度は、下向きに加速。両足のタービンを高速回転させる。
そして、自身での加速＋重力を利用し落下、タービンを高速回転させた脚での膝蹴りを叩きつける。

「きゃあぁぁっ！」

竜巻に捕らわれているから、身動きが取れない。
そこに叩きつけられた、重力をも利用した落下の蹴り技。

……体勢の整っていないオルコットに防ぐ手段は無く。

「う～ん……。」

直撃し、気絶していた。
もちろん、地面に叩きつけられる前に、受けとめたぞ？

『試合終了――勝者、如月北斗』

というアナウンスと共に、地面に降りた。

「さて、と。」

とりあえず、オルコットをオレらと別のピットに運ぶか？

「う……、えぁ……？」

「お。気が付いたか？」

運んでいる途中で目が覚めたみたいだ。

「し、試合は……。」

「一応、オレの勝ち。でも、まぁ無効じゃねぇか？
オルコット、万全じゃないだろ？一夏と戦った後なんだし。」

そう。
試合では、オレが勝った。
それはいいんだが、やっぱり一夏とやった後だから少しばかり集中力欠いてたみたいだし。

それで勝ったことに、なんとなく納得できないオレだった。

「えと、お前が入ってきたのは、こっちのピットでいいのか？」

オルコットを抱え、飛んでいるオレ。
抱いている体勢は、俗に言う『お姫様抱っこ』だ。

それに気付いたオルコットは、少し顔が赤くなっていた。

「あ、は、はい。ここで構いませんわ。」

「そうか。じゃ、降ろすな。」

そう言ってピットに下り、オルコットを降ろす。

「っと、体、大丈夫か？結構思いっきり蹴っちまったから、痣とか

になってたら悪いからな。」
「あ、いえ、特に問題ありませんわ。」
そうか、なら俺も戻るか。
「じゃな、オルコット。また明日な。」
「え、あ、はい。」
そう言って、オレは一夏たちのいる方のピットに戻った。
そのときのオルコットの視線が、なんか熱っぽく見えたのは気のせいか？
「……。」
そして。
一夏たちのいるピットに戻った時、深音が無言な上に俺に向ける視線が
かなり険しかったんだが、なんかあったのか？
オレ、何かした……？

第2話～クラス代表決定戦（後書き）

というわけで、勝っちゃいました。

次は、鈴が出せるかな？

そんなくらいかと思います。

誤字・脱字の指摘、ご意見・ご感想などお待ちしています。

では、また。

キャラ設定（第2話現在）（前書き）

こんにちは、フュージョニストです。

今回は、第2話現在でのキャラ設定です。

では、どうぞ。

キャラ設定（第2話現在）

・如月　北斗　（きさらぎ　ほくと）

年齢　１５歳

身長　１６９ｃｍ

体重　５６ｋｇ

外見　ガンダムXのガロード・ラン見たいな感じ

性格　自分の言いたい事は結構はっきり言う。それと同時に、思ってることをつい言ってしまう。

趣味　家事、アニメ見たり漫画読んだり。

嫌いなこと・物　高慢な奴（出会った当初のセシリアなど）、千冬（嫌いよりは苦手の部類）

備考　事故に遭い、幼馴染と共に死に幼馴染と共に神に転生させられた。

その際、ＩＳの世界に転生させられると聞き、好きだったアニメの機体である電童、凰牙を

自身のＩＳにしたいと頼み、それを使用する。

性格は、一夏に近い。朴念仁な所も。

物事ははっきり言うが、考えてる事がつい口から出てしまうから、よく千冬に叩かれる。

早くに親がなくなったため、ほぼ1人暮らし状態だった為家事

は完璧。
幼馴染とは家が隣、同じような境遇だった為、仲良くなる。

使用ＩＳ　零距離格闘戦用ＩＳ（クロスレンジ）　『ＧＥＡＲ戦士（ギアファイター）　電童（でんどう）』
零距離格闘戦用ＩＳ（クロスレンジ）　『騎士ＧＥＡＲ（ナイトギア）　凰牙（おうが）』

単一使用能力　「不明」

武装　両腕・両脚部タービン　「ハイパー・プラズマドライブ」

備考　全身装甲（フル・スキン）タイプのＩＳ。
両腕、両足に取り付けられているタービンが最大の特徴。
攻撃をはじく、脚部タービンで走行するなど使用法は色々。
現在の武装はコレしかないが、それで試験官の先生を倒している。

・哀元　深音　（あいもと　みね）

年齢　１５歳

身長　１５６ｃｍ

体重　――ｋｇ

外見　ガンダムＸのティファ・アディールのような感じ

性格　おとなしい。だが、仲良くなった人とは明るく話す。怒ると怖い。

趣味　家事、散歩、読書

嫌いなこと・物　騒がしいところ（嫌いではなく苦手に近い）、朴念仁

備考　北斗の幼馴染の女子。北斗と共に事故に遭い、共に神に転生させられた。
北斗とは、小さい頃からの幼馴染で、彼のことを少なからず好いている。
ただ、北斗は一夏には劣るが朴念仁なために気付いていない。
彼と同じように両親が早くに亡くなっているため、そして家が隣なのでよく遊んでいた。
前世で死ぬ前、そして転生し学園に行く前、学園での寮とほぼ同棲状態。
怒らせると、しばらく手が付けられなくなる。

使用ＩＳ　支援射砲撃用ＩＳ　『ヴァルハラ』

単一使用能力　「不明」

武装　「不明」

キャラ設定（第2話現在）（後書き）

はい、こんな感じのキャラたちです。

たぶん、これからもう少しキャラ増えるかもしれないです。
そして、書いていく内に増えてきたらまたやると思います。

というかやります。

では、今回はこれで失礼します。

第3話〜クラス代表、決定（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回は、前回までに比べると短いです。

では、どうぞ。

第3話～クラス代表、決定

―セシリアとの戦闘後、ピット―

～北斗　ＳＩＤＥ～

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

オレがオルコットをピットに運んできた後で、一夏たちの居るところの戻ってくると、
一夏が織斑先生になんか言われてるところだった。

その後。

山田先生に『ＩＳ起動におけるルールブック』って分厚い本を渡されてげんなりしていた。

入学前に読んでたから、ああなるのはまぁ、うなづけるな。

「さてと、終わったことだし寮に帰るか。深音、一夏、篠ノ之。」

「うん。」

「そうだな。」

「おう。」

そう言って、ピットを出て、寮に向かう道を行くオレたち４人。

途中、一夏と篠ノ之がなにか話をしてて、一夏が竹刀で思いっきり叩かれてた。

「一体、何言ったんだ？一夏？」

「……いや、なんか話してるときに箒がそわそわしてるから、『トイレにでも行きたいのか？』って聞いたら、竹刀で思いっきり殴られた。」

「……。」

こいつ、馬鹿だ。
それも、筋金入りの。

「な、なんだよ……？」

「……なんでもない。一夏。女性関係、気をつけろよ？」

「お前まで一体なんなんだ！？」

これ以上は、何も言うまい。

そう思った俺は、一夏より歩く速度を少し上げて置き去りにする。

「ちょ、待てよ！」

そう言って付いてくる一夏。

昨日は行きそびれたから、今日は食堂でメシ食いてぇなぁ。

―セシリア　自室―

～セシリア　ＳＩＤＥ～

自室でシャワーを浴びながら、わたくしはさっきのことを考える。

今日の試合……。

わたくしが勝ったのに……。

「何で、こんなにすっきりしないのでしょう？」

今日戦った、二人の男性。

「織斑一夏……。如月北斗……。」

クラス代表を決める為に行ったさっきの試合。

織斑一夏には勝ったけれど、如月北斗には負けた。

ただ、彼―織斑一夏―は、初期設定の状態でブルーティアーズを追い詰めて、

最後に起こった一次移行での斬撃が決まっていたら、落とされていたかもしれない。

そして、もう一人の彼―如月北斗―はわたくしの戦法と性格を先の戦いで見た上で

策を仕掛けて、武器も使わずにわたくしを堕としましたわね。

その二人は違うけど、どこか似てるものがある。

それが……。

「あの、瞳。自分の意思の篭った、強い瞳……。」

わたくしの父は、母の顔色ばかり伺う人だった……。

名家に婿に来た父。

それに対しての引け目なのか何かは知らない。

でも、だから。

小さい頃からそんな父を見てきたから、いつしかわたくしは『将来情けない男とは結婚しない』

という考えを持つようになった。

その両親は、３年前に列車事故で死んでしまった。

それから、様々な事を勉強してＩＳの適正試験で偶然Ａ＋を出して、

政府から出された条件を飲んで第三世代機のテストパイロットになって、ＩＳ学園に来て……。

そんな中で出会った二人の男性。

「織斑一夏……。如月北斗……。」

もう一度、二人の名前を呟く。

なぜ、こんなに切ない？

なぜ、こんなに苦しい？

そして。

……知りたい。

彼らのことを。

「織斑一夏……。如月北斗……。」

わたくしは、もう一度だけ二人に名前を呟いて、シャワーから出た。

―翌日　教室―

～北斗　ＳＩＤＥ～

「では、１年１組のクラス代表は織斑一夏君、副代表は如月北斗君に決定です。」

教壇では山田先生がそう言い、席ではクラスメイトの女子達が盛り上がっている。

「先生、質問です。俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス

代表になってるんでしょうか？
それだったら、俺じゃなくてあの二人でもいいんじゃないでしょうか？」

手を上げてそう聞く一夏。

それに答えたのは、

「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

オルコットだった。

「まぁ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。
なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ。」

ん、何か一夏がへこんでるな。
あぁ、負けたこと、まだショックなのか？

「それで、まぁ、わたくしも大人気なく怒った事を反省しまして……。」

しまして？

「”一夏さん”にクラス代表を譲る事にしましたわ。やはりＩＳ操縦には実践が何よりの糧。
クラス代表ともなれば、戦いには事欠きませんもの。」

オルコットがそこまで言って、「あれ？」といった風に一夏が首

を傾げる。

「じゃあ、北斗は？お前、アイツに勝っただろ？」

そう言って聞いてくる一夏。

「まぁ、勝ったっちゃ勝ったがオルコットはお前と試合した直後。それにかなり消耗してたからな。だから、どっちかって言ったら俺に有利すぎた。お互いが万全じゃない状態だっただから、あれは無効。それで辞退しようとしたんだが、お前が居た手前、副代表という形にさせてもらった。」

そう言って、一夏に説明を終える。

そう説明している横で、箒　（昨日の帰りに、名前で言いといわれた）とオルコットが
にらみ合って、何か口論をしていた。

ランクがどうのとか言ってるな。

ってか、箒にオルコット。あんまり騒ぐと……

バシンバシン！

「座れ、馬鹿ども。」

そう言って二人を出席簿アタックで沈めて織斑先生は言い放つ。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこ

だ。
まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな。」
そう言った後、何かへんなことを考えたような一夏に3回くらい出席簿アタックを放った後。
「クラス代表は織斑一夏、副代表は如月北斗。異存はないな？」
クラスメイトの女子達は、異存なし。
どうせ、他のクラスにオレや一夏の情報だの写真だの売るんだろうな……。
一夏は……嫌そうな顔してんな。
こればっかりは、どうしようもないな。
オルコット言う事もあながち間違ってはいないからな。
『ＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。』
まぁ、副代表になったからには、代表の特訓にでも付き合ってやるか。
オルコットや箒と一緒に、な。

第3話～クラス代表、決定（後書き）

というわけで、今回は、セシリアを少しだけ書いてみました。
お嬢様キャラ、難しいです……。

そして、鈴は次回出します。
前回出せるような事言って、すいませんでした！

区切りが良かったので、ここで切らせてもらいました。

次は、クラス対抗戦の直前までいければいいかなぁ、
と考えてます。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などお待ちしています。
では、また次回で。

第４話～転校生はセカンド幼馴染（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回も、サブタイどおりです。

最後に、ちょびっとオリジナル展開入ります。

では、どうぞ。

第４話～転校生はセカンド幼馴染

「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、如月、哀元。試しに飛んで見せろ。」

四月も下旬の入ったとある日の授業中。

「「「はい。」」」

「わかりましたわ。」

そう返事をして、オレ、深音、一夏、セシリア（少し前に名前で呼んでと言われた）が自分のＩＳを展開する。

オレは変わらず全身装甲（フル・スキン）タイプの青と白のＩＳ―電童を。

セシリアは鮮やかな青の機体――ブルーティアーズ。

一夏は白の近接特化のＩＳ――白式。

そして、深音はライトグリーンのＩＳスーツの上から赤い装甲をまとう。

その装甲は、どこか戦闘機を思わせる形状になっていて、頭には顔の上半分を覆うようなバイザーをつけている。

装備はまだ呼び出していないが、両手持ちのロングレンジビームカノン、ミサイルポットなどセシリアと同じような射撃系統の装備が主体のＩＳ。

支援射砲撃用高機動ＩＳ――ヴァルハラ。
それが深音のＩＳの名前だ。
それぞれがＩＳを展開し終えて、準備ができる。
ちなみに、展開が一番早かったのは深音、遅かったのはもちろん一夏だ。
展開しようとしてる時に色々言われてたな。
「よし、飛べ。」
そう指示され、オレたち４人は空へ上がる。
今度は、一番早かったのはセシリアだ。遅かったのは、やっぱり一夏だ。
「何をやっている。スペック上の出力では、白式が一番高いんだぞ。」
と、早々に織斑先生に言われる一夏。
言われた一夏は一夏で、なんかぶつぶつ言ってるし。
セシリアはそれに対して、ＩＳの飛行理論がどうのこうのって言ってるし。
しばらく飛んでいると、
「４人とも、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は、地表から

十センチだ。」

といわれたので。

「じゃ、お先。」

そう言って急下降に入った。

そして、目測で急停止。

……地面から１１．７センチか。

まぁまぁか。

と思っていると、セシリアと深音も降りてきた。

そして、一夏はというと。

……思いっきり、地面につっ込んでいた。

正直に言おう、なぜ止まれん？

そして、授業中だってのに喧嘩をするなよな、箒にセシリア。

その二人をずい、と押しのけ、一夏と深音の前に立つ織斑先生。

「織斑、武装を展開しろ。それくらい自在にできるようになっただろう。」

と言われて、雪片弐型を展開する一夏。

一夏は一週間、オレや深音、セシリアや箒が叩き込んで教えてやっと

雪片弐型を1秒近くで展開できるようになった。
だが。
「遅い。０．５秒で展開できるようになれ。」
と一蹴された。
「次。哀元、オルコット。」
「「はい！」」
と返事をして、自分の武装を呼び出す二人。
セシリアは左腕を肩の高さまで上げ、真横に突き出す。
そして、一瞬爆発的に光って狙撃銃『スターライトｍｋ－？』を呼び出す。
キチンとマガジンがセットされているし、一目見ただけでセーフティも外れる。
深音も、同じように右腕を斜め下に突き出す。
そこに、セシリアのものと同じ位の大きさで銃身の細いロングレンジビームカノンを持っている。
こちらも、エネルギーカートリッジのマガジンは挿入済み、一瞬見ただけでロックが外れる。
「流石は代表候補生に専用機持ちだな。ただしオルコット。そのポーズは止めろ。
横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ。

そのあたりは哀元を見習え。
逆に哀元は、オルコットぐらいの速さで展開できるようにしろ。それ以外はいい。」

「はい、ありがとうございます。」

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏める為に必要な――」

「直せ。いいな？」

「――、……はい。」

そう言われ、深音は褒められた事にはお礼をいい、指摘されたところは直そうとする。
逆に、セシリアは反論したけども織斑先生の一言で撃沈。

え、オレ？

オレの機体の武器は、手足のタービンだからな。
常時展開状態なんでな。
だから、パスだ。

「次だ。近接格闘用の武装を展開しろ。」

「え、あ、はい。」

「はい。」

そう言われたので一旦武器を収納し、近接格闘用の武器を呼び出す二人。

深音の方は、両腕に肘までを覆うくらいの装甲つきのカタールを呼び出す。
これは、深音が自分で組んだもので、バリア無効化攻撃を行う事もできる。
無論、白式の雪片弐型より持続時間も威力も低いが、一応分類は双剣になるから取り回しが利く。

ただ、作ったは良いけど実際使ってみると少し重かったから、普段はあんまり使わないそうだ。
たしかに、いつもは近接戦でもビームピストル使ってるからなぁ。
（形状は、ケルディムガンダムのビームピストルを想像して下さい　ｂｙ作者）

と思っていたら、セシリアはうまく展開できずに武器名を叫んでいた。

織斑先生にも展開が遅いと突っ込まれ、反論を返されて一夏に八つ当たりしてるな。
織斑先生に口で勝つのは無理なんじゃないか？
……とりあえず、ドンマイ、一夏。

そんなことがあり。

「……ふむ、時間か。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ。」

そういい残して去っていく織斑先生。
不覚にも、カッコいいと思った。

何か一夏がこっちを見てるけど、無視して帰るか。
手伝うの面倒だしな。

さて、部屋に戻ってシャワーでも浴びるか。

そんなわけで、その日の夜。

「というわけで、織斑君クラス代表決定おめでと～！」

「おめでと～！」

という声と共に、一夏に向けてクラッカーが発射される。

今は、夕食後の自由時間で、場所は寮の食堂。

壁には、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』って書いた紙が掛けられてある。

主役の一夏は……、滅茶苦茶沈んでるな。
まぁ、ずぶの素人がいきなり代表にされたんじゃ、そりゃ沈むか。

そういえば、人数多くないか？
あ、あれは二組の人じゃないか？

まぁ、ただ騒ぎたいだけか。

そう思って周りを見る。

「いや～、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ～。」

「ほんとほんと。」

なんて言ってるし。

ほんと、騒ぎたいだけなんだな。

ちなみに、オレは一人で居る。

深音は誘われてどこかにいるはずなんだが……。

あぁ、いた。

端のほうで箒と一緒になんか話してるな。

まぁ、仲良くなれたんならそれでいいか。

アイツの人見知りも、ここで少しはよくなれば良いけどな。

と思ってると。

「はいは～い、新聞部でーす！

話題の新入生、織斑一夏君と如月北斗君にインタビューに来ました～！」

そう言って、やけにテンション高い人が入ってきた。

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺。」

と名刺を渡してくる。

「はあ、ご丁寧にどうも。」

そう言って、名刺を受け取った。

……名前画数多っ！

「ではではまずは織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

ボイスレコーダーを一夏に向けて無邪気な笑顔で迫る黛先輩。

それに一夏は。

「えーと。まぁ、なんと言うか、頑張ります。」

「えー。もっといいコメント頂戴よ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか。」

「自分、不器用ですから。」

「うわ、前時代的！」

先輩、人の事言えませんからね？

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして、次は如月君！クラス副代表なんでしょ？」

そう言って、オレにもボイスレコーダーを近づけてくる。

「そうっすね……。まぁ、もし俺に回ってくるようなことがあったら、そん時は全力でやりますよ。

出る機会が無い事を祈りますけど。」
「う～ん、まぁいいか。こっちも適当に追加しとこうか。」
いや、ダメでしょ。
「じゃあ――」
と言って、セシリアにインタビューを始めた先輩。
でも、セシリアの話が長くてめんどくさくなったのか、
「ああ、長そうだからいいや。写真だけ頂戴」
「さ、最後まで聞きなさい！」
「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう。」
「なっ――」
って言って、適当に締めてしまった。
「それとも、如月君のほうがいい？」
「「ぶっ……」」
思わぬ一言に噴き出してしまった。
オレとセシリアが。

「あ、あなたは――」

そうセシリアが言おうとしたところで、

「はいはいとりあえず3人並んでね写真撮るから。」

「えっ？」

さっきまで怒ってたセシリアが一瞬ぽかんとしてた。

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショット貰うよー。あ、握手してるといいかもね。」

「そ、そうですか。……そうですわね。」

といったが最後、黛先輩は行動が早かった。

セシリアが中央、左右をオレと一夏と言う様に強引に持っていき、握手の形をとらせる。

そして。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え？……２？」

「えっと、７０くらい？」

と言うオレと一夏。

「如月君惜しい！正解は７４．３７５でした～！」

そして、シャッターが切られる。
そこには、クラス全員が恐るべき団結力でオレたちの周りにいた。
何気にオレの隣に深音、一夏の隣に箒がいるのはあの一瞬でと考えるとちょっと恐ろしい。
「あ、あなたたちねえっ！」
セシリアは少々ご立腹のようだ。
……クラス全員に丸め込まれたが。
そんなこんなで『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は夜１０時くらいまで続いた。
……女子の体力って、こういうときはすごいよなぁ。

―翌日　教室―

「「転校生？」」
朝、教室でクラスメイトの女子（と言っても女子しかいないが）が、
その事が噂になっているらしく話しかけてきた。
「そう。何でも、中国の代表候補生なんだってさ。」

「ふーん。」

「へぇ〜。」

代表候補生……セシリアとかと同じか。

……性格があれだったら嫌だが。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどの事でもあるまい。」

と言って会話に入ってきたのは、セシリアと箒だ。

それとなく、深音も左斜め後ろに居るし。

「どんな奴かな……。」

オレがそう呟くと。

「……転校生、気になるの？」

と深音が聞いてきた。

周りでは、セシリアが専用機持ちは今のところこのクラスのわたくしたちだけ、

とか何とか言ってるし。

「まぁ、気になるといえば気になるかな？

……もしかしたら、戦う事があるかもしれないしな。」

「……そう。」

深音にそう答え、

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ。」

他のクラスメイトがそう言ったとき。

「――その情報、古いよ。二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

という声が聞こえた。

「あれ、この声。昨日聞いたような……。」

そのオレの呟きは。

「鈴……？お前、鈴か？」

という一夏の声に消された。

一夏の視線の先には、ツインテールの小柄な、だけど強気そうな少女がいた。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファンリンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ。」

そう言って、二組の転校生は得意げに鼻を鳴らした。

少し一夏と雑談したところで、織斑先生が現れ出席簿アタックを喰らい、転校生は撤退した。
『ち、千冬さん……。』って言ってたから、一夏の昔の知り合いか？

去り際に、

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！それと、そこの男子、昨日はありがと！」

そう叫んでクラスに戻って行った。

気になったクラスメイトがオレと一夏の席の周りに群がる。
セシリア、箒、深音の三人から浴びせられる視線がもの凄く怖いです。

と思っていたら。

バシンバシンバシンバシンッ！

「席に着け、馬鹿ども。」

織斑先生の出席簿アタックを喰らって、オレらの周りにいたクラスメイトはしぶしぶ席に着いた。

―昼休み―

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「……北斗……？」

「「何でだよ……。」」

オレと一夏は箒、セシリア、深音から昼休みになって開口一番に文句を言われた。

この３人、午前の授業だけで山田先生に注意５回、織斑先生に３回出席簿アタックを貰っている。

「とりあえず、文句は食堂で聞く。いい加減メシ食いたい。」

「だな。食いながらでも話はできるだろ。」

そう言って席を立つオレと一夏。

「む。……ま、まぁ、お前がそう言うのならいいだろう。」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ。」

「……、わかった。」

そう言ってすぐ後ろを付いてくる３人。

その後ろを付いてくるクラスメイト数人。

なんか、もういつもの光景だ。

そんな大所帯で食堂に行ったオレたちの前にいたのは。

「待ってたわよ、一夏！」

手にラーメンを載せたお盆を持った、二組の転校生だった。

オレたちが食券を買ってランチセットを受け取って席に着くと、一夏の向かいに転校生が座る。

その横にセシリアと箒、向かいにオレと深音だ。

そして、一夏と転校生は懐かしそうに昔話をしている。

聞いた会話によると、彼女の名前は凰鈴音（ファンゼンイン）。

一夏の小学校五年から中学校二年までの同級生で幼馴染だそうな。

一夏曰く、箒が『ファースト幼馴染』、凰さんが『セカンド幼馴染』だと。

そんなこんなで、箒が凰さんに自己紹介して、セシリアが突っかかって、また騒いで。

というやり取りがあった後、凰さんがオレのほうを向く。

「っと、アンタにはお礼を言わなきゃね。昨日はありがと。おかげで助かったわ。

あ、自己紹介まだだったわね。中国代表候補生、凰鈴音（ファンゼンイン）よ。よろしく。」

「ん？いや、たまたま通りかかっただけだし、そんなに気にしなくてもいいぞ？

そう言われればそうだな。如月北斗。まぁ、一夏と同じく、男でＩＳが動かせる。よろしく。」

オレは今日の日替わりランチの鯖の塩焼きをつつきながら、凰さんはラーメンを食べながら言う。
……ん、なんか寒気が……
そう思って振り向くと。
「昨日……？何があったか、話してもらえるかな……？」
深音がそう呟いてこっちを向く。
……あの、深音さん？
……なんで、ハイライトが消えた眼差しでこちらを睨んでいらっしゃるのでしょうか？
「あ、ああ。一夏の特訓が終わって、少し遅れて出たら凰さんが受付が分かんなかったみたいで、彼女をそこまで案内したんだよ。それだけ。」
「……、そう、ですか……。」
「？」
あ、深音の目に光が戻った。
と、とりあえず、深音の機嫌は戻ったみたいで良かった。
そして、一夏たちに視線を向けると。
「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし。」
「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに、一夏は何度もうち

で食事をしている間柄だ。
付き合いはそれなりに深い。」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

なんていう傍からみたら、『何この痴話喧嘩？』って感じだな。

そう思っているうちに凰さんは食べ終わったみたいで、

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

そう言ってトレーを返して走り去っていった。

……一夏は修羅場だなぁ……。

そんなことを考えて、味噌汁をするオレだった。

あ～、うま。

―放課後―

第３アリーナで、一夏の特訓中。

オレと深音も一緒に居るが、ぶっちゃけやる事がない。

主に中距離戦闘はセシリアが近距離戦闘は箒が教えていて、

オレや深音はそれを見て一夏にアドバイスを出す、という方向性で行っている。

深音はたまにセシリアと交代で中距離戦闘をしてるけど、

オレは武器が無いしＩＳは全身装甲（フル・スキン）だから教えられることが少なす

ぎる為に、
何もすることが無い。

今日は、箒が訓練機のＩＳ『打鉄』を借りてきた為、ＩＳでの近接格闘訓練――のはずが、
セシリアが乱入し、一夏ｖｓセシリア＆箒の戦闘になっていた。

――そして、一時間ほどが過ぎて。

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう。」

「お、おう……。」

セシリアのその一言で、今日の特訓は終わった。
一夏は、大の字になって倒れている。

セシリア、箒、一夏の３人で二言三言話しているところへ、

「４人とも、疲れただろうし先に戻っていいぞ。オレが片づけしとくから。
それに、少しは電童（コイツ）を動かしときたいからな。」

そう言いながらオレは、腰にあるギアコマンダーに触る。

「そ、そうか。た、頼んでもいいか……？」

倒れたまま聞いてくる一夏。

「おう。早く帰って休め。」

「サンキューな。ってか、もうあいつらは帰ったのか。」
そう言うと何とか立ち上がって、歩いていく一夏。
セシリア、箒、深音はオレたちの会話の間で早くも立ち去ったみたいだ。

さて、と。

オレも少し体を動かしますかね。
そう思って、電童を起動させる。

そして、順々に戦闘で使う攻撃用ノーマルプログラムとスペシャルプログラムを試す。
……流石に、飛翔烈風波や閃光雷刃撃は威力を最弱に抑えてあるが。

このとき、オレは誰かが覗いているのに気付いた。
アリーナの端の方で、誰かが座っているな。

電童のハイパーセンサーで確認してみる。

水色の髪に、赤い瞳。四角い眼鏡を掛けた、小柄な女の子。
手元には、ディスプレイが浮いている。

オレはその子に近づいて、声を掛けた。

「こんな時間に、こんなとこで、何してるの？」

「……。」

その子は、オレが話しかけるとジッと見つめてきた。
オレも、電童を展開したまま見返す。

やがて。

「――を、――――――い」

「え……？」

その子が何か呟いたのを聞き取れなかった。
一回俯いて、もう一度こっちを見た女の子。

「……あなたの名前、教えてください……。」

「……へっ？」

言われた一言は、意外なものだった。
とりあえず、電童を待機状態に戻して、女の子の前に立つ。

そして。

「オレは、如月北斗。男でＩＳを使える人でＩＳ学園に入学した。君は？」

とりあえず、自己紹介をした。

「……更識（さらしき）、……簪（かんざし）。」

「更識さん、でいいか？」

「（フルフルッ）……簪でいい。」

そう言って、オレを見る更しk……簪。

リボンの色からすると、同級生。でも、なんでオレを？

そう思っていたのが顔に出てたのか、

「前に、オルコットさんと模擬戦やっていたときに見た、如月君のＩＳ。

アニメのロボットみたいで、カッコよかったから。

……それで、もっと見てたくなった、……から。」

と話してくれた。

「それで、隠れて？」

そう言うと頷いた簪。

顔が赤くなってる。風邪か？

セシリアとの模擬戦……？

……。

あ～！

あれか、今度の学年別のクラス代表決定戦のときの。

「ん、まぁ、間違ってはいないかな。

オレの機体は、ずっと昔に見てたロボットアニメの機体が元だからな。」

オレがそう答えると、簪の目が少し輝いたように見えた。

多分、その元になった作品の名前を聞きたいんだろうな。

……でもな、これはこっちの世界には無いんだよ。

オレが以前生きていた世界のものだからな……。

「……悪いな。この機体の元になった奴の名前は、あんまり覚えてないから、教えられない。」

「っ、……そう。」

そう言うと、かなり落ち込んだ簪。

……マ、マズイ。

「ま、まぁ、この時間なら一人でＩＳ使っているから、たまに見に来るといいさ。」

「！！……本当！？」

うおぅ、さっき以上に目が輝いてるな……。

「あ、あぁ。やるときには言うから、アドレスか番号を教えてくれ。」

「（コクコクコクッ！）」

こうしてオレは更識簪に出会って、お互いにまた会う約束をして部屋に戻った。

……部屋に入ると、戻ってくるのが遅いと、深音に大目玉を食らったのは余談だ。

こうして、いろいろあった一日がようやく終わりを迎えた。

第４話～転校生はセカンド幼馴染（後書き）

というわけで、次で原作１巻最後にできればいいなぁ。

と思っております。

とりあえず、一通り原作は読み終えました。

とりあえず。

箒と楯無さんですかね、好きなキャラは。

まぁ、書いていくうち読み直していくうちに変わってくると思いますが。

というわけで次回はクラス対抗戦になります。

誤字・脱字の指摘、ご意見・ご感想などお待ちしています。

第5話〜対抗戦、開始前（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回、北斗が誰かに建てます（多分）。

では、どうぞ。

第5話〜対抗戦、開始前

一夏の特訓が終わった後、簪と会った日の翌日。

生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があり、表題には『クラス対抗戦日程表』。

「あ、組み合わせ発表は今日だったか。」

深音と一緒に玄関に入ってその日程表を見る。

「一組の相手は、っと……。……え？」

「……一夏、ご愁傷様。」

オレは目を疑い、深音は終わった、という感じに一夏に冥福を祈っている。

一組の対戦相手。

それは、二組の凰鈴音だった。

「幼馴染と対決、ねぇ……。」

そんなことを呟きながら、深音と共に教室に向かった。

―昼休み―

……なんだ、これ？

昨日、オレが一夏たちと別れてから何があったんだ？

凰さんが、露骨に一夏を避けている。

教室に会いに来る事はまず無いし、食堂や廊下で会ったときも一夏から顔を背けるし。

いかにも『わたし怒ってます』的なオーラが見える。

「で、何があったかの説明を要求する。」

「……それはいいが、なぜ、私なのだ？」

そう言って話しかけたのは一夏ではなく箒。

箒は鮭の塩焼きの身をほぐしながら答える。

「いや、一夏に聞くのはありえないだろ。だって、アイツだぞ？絶対に、なんで避けられてるのかの見当も付いてないだろ？」

「まぁ、確かにな。……そういえば、深音はどうした？」

そう聞いてくる箒。

確か、今日は……。

「ん？深音なら、今日は購買でパン買って図書室に行くって言ってたぞ？」

「あぁ、なるほど。彼女の読書量は、すごいものだな……。」

深音は、１週間に結構な量の本を読んでいる。
この前も、２日で１０冊くらいハードカバーの本を読んでたし。
「って、話がそれたな。それで昨日、何があった？」
「……あの転校生、凰が部屋に押しかけてきて、私に部屋を代われと言ってきた。」
……はい？
今何と？
部屋を、代われ、と？
「は？なんでだ？」
「知らん！ただ、『幼馴染だから、部屋代わって？』と言っていきなり入ってきたのだ。」
「……あぁ、なるほど。」
なんとなく、理解できた。
要は、一緒に居たい訳か。
「で、お前は拒否した、と？」
「……あ、あぁ。わ、私だって、い、一夏と一緒にいたいのだ。」
何で、それを素直に言ってやらないかなぁ……？
女子はよく分からん。

「で、その後に何かあったのか？」

「！　……なぜ、そうだと分かる？いや、分かった？」

そう言い、箸を止める箒。

嘘は言えないなぁ……。

「凰さんの態度。明らかに怒って一夏を避けてるから。
さっきの部屋がどうのこうのだけじゃ、なんとなく説明が付かないからな。」

「……なるほどな。北斗、お前意外と鋭い時があるんだな。」

そう言って箒は味噌汁を一口啜った後、口を開く。

「……一夏が、彼女と昔していた約束を忘れていたらしいのだ。」

「約束……？」

箒によると。
一夏と凰さんは小学校くらいのときにした約束があったらしい。
それを一夏は勘違いして覚えていたらしく、彼女の怒りに触れ、
今の状況になっているらしい。

しかも、泣かせたらしい。

「……なんと言うか、まぁ。一夏だな……。」

「あぁ……。」

「「はぁっ……。」」

そんなことを箒と話しながら、昼休みは終わった。

「……お前は、その一夏に対して何と？」

「馬に蹴られて死ね。」

「……オレもそう思う。」

そんな呟きと共に、教室に戻った。

―――――――――――――――

という感じのやり取りがあったのが、2，3週間ほど前。

今は、クラス対抗戦の一週間前。

放課後の第三アリーナに向かう道。

向かう面子はいつもの一夏、箒、セシリア、オレ、深音の5人。

来る前にメールを出しておいたから、遅くならないうちに簪も来るだろうな。

……まぁ、目立たない場所で見てるんだろうけどな。

「いよいよ、来週からはクラス対抗戦だ。

アリーナも今日で使えるのは最後、明日からは対抗戦用に調整されるらしいからな。

特訓は、実質今日が最後だ。」

「……おう。」

……なんだ？

妙に一夏の反応が悪いな。

「どうした、一夏？調子でも悪いのか？」

「……いや、少し考え事してただけだ。問題ないさ。」

「そうか？まぁ、無理はするなよ？」

「おう。悪いな。」

「なぁに、友達（ダチ）だろ？」

そう言って、小さく笑いあった。

そして、アリーナに入ると……。

「待ってたわよ、一夏！」

凰さんが、仁王立ちして待っていた。

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

入った、と箒が言おうとしてセシリアに台詞を取られた。

ここに来るときにしていた会話のときも、そんな感じだったな。
ＩＳを使用しない訓練がどうのこうのとセシリアが言って、
箒が反論してる最中に今日の訓練はどうすると言う会話を一夏に向けてしていた。
当然、話を聞いていない（と箒は思っていた）一夏に怒りの矛先が向けられた。
一夏は聞いていると反論していたけど。
そんなことを回想していると、一夏と凰さんが口論になっていた。
何が原因かは、聞き逃した。
約束がなんとか、って聞こえた気がする。
「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」
「何でだよ馬鹿！」
「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」
「うるさい、貧乳。」
なんか、今禁止ワードが聞こえたような……。
そう思った瞬間。
ドガアアァァァン！

と爆発音がして、部屋がゆれた。
あ、凰さんが右腕だけＩＳ部分展開してるな。
「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん。」
それに対して一夏は謝るが、今の凰さんじゃあ、逆に逆撫でするだけだろう。
案の定、
「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」
と理屈も何もない怒り方をしている。
まぁ、聞いている限り、一夏が悪いのは事実だな。
「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。
いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で、叩きのめしてあげる。」
そう言って一夏を一瞥して、アリーナから去っていった。
ふと見回すと、彼女のいたところの近くの壁が、３０ｃｍくらいへこんでいるのが見えた。
「……パワータイプですわね。それも一夏さんや北斗さんと同じ、近接格闘型……。」
そんなセシリアの呟きなど聞いている風もなく、一夏は真剣に悩んで、後悔していた。

「……よりにもよって、胸のことを言っちまうとはなぁ……。」
「お前は、ほんとに馬鹿だな。……凰さんの言うとおりだな。反論の余地が見当たらん。」
オレの一言がトドメになったらしく、ｏｒｚとなる一夏だった。

そのやり取りから４日後。
つまり、クラス対抗戦の３日前。

それは突然だった。

朝、深音と共に食堂に向かおうとしたとき、隣の部屋で何かが倒れるような音がした。
隣の部屋……、あぁ、箒と一夏か。

そんなことを考えて部屋を出たとき。

「い、一夏ぁーー！」

と叫ぶ箒の声が聞こえた。

「「！？」」

廊下にまで響く声で響く声で叫んだ箒……。
何事だ？

そう思っていると、ドアが開いた。

「「「あっ……。」」」

オレ、深音、箒、ばったり遭遇。

……じゃなくて！

「箒、さっきの叫び声、何があった！？」

「そ、そうだった！い、一夏が、一夏が倒れたんだ！」

オレは耳を疑った。

一夏が、倒れた？

……嫌な感じがした。

「箒、部屋入るぞ！」

「あ、あぁ。」

そう言って部屋に入った。

「っ、一夏！？」

確かに箒の言ったとおりに一夏が倒れていた。

慌てて駆け寄って、額に手を当てる。

「ひどい熱だな……っ。箒、深音！オレは一夏を保健室に運んで来るから、

織斑先生に授業に遅れるって言っておいてくれ！遅れた罰だったら

何でも受けるから！」

そう言って、一夏を背負って走り出す。

「うん、わかった。」

「あ、あぁ……。」

心配そうな箒の眼差しが、とても印象的だった。

―教室―

箒と一緒に教室に入る。

そのとき、一夏と北斗がいないからどうしたのかとセシリアが突っかかってきた。

クラスのみんなも『そういえば……』見たいな顔で私と箒を見てくる。

だから、理由を説明すると。

「一夏さんが倒れたですって！？」

みんなを代表して、そう叫ぶセシリア。

朝から元気だね、セシリア。

でも、今の箒には関係ないみたい……。

「あぁ……。共に起きて、食堂に向かおうとしたときだったんだ……。」

一緒の部屋で生活してるのに、どうして気付けなかった？

そんな後悔が、あるんだと思う。

「とにかく、一夏さんのところへ――」

「あぁ――」

「行ってやれと言いたいが、残念ながらもう授業だ。」

そう言って入って来たのは、織斑先生。

いつもいるはずの山田先生は、今日はいなかった。

「織斑が朝倒れたらしく今、如月が付き添っている。山田先生は織斑の経過観察のため、今日は来ない。

……行くのなら、放課後にでも行ってやれ。」

前半は連絡として全員に聞こえるように、後半はセシリア、箒、私に聞こえるようにだけ言って

教壇に立つ織斑先生。

「では、ＳＨＲを始める。」

そして、今日の授業が始まる。

――――授業中、ずっとセシリアと箒は沈んでいた。

―放課後　保健室―

朝運び込んでから、一夏はずっと眠ったままだ。
時折、苦しそうにうめき声を上げるのが痛ましい。

「それで、一夏の倒れた原因って分かったんですか？」

一緒にいた山田先生にそう聞くと。

「多分、ストレスと過労なんじゃないでしょうか？」

と答えが返ってきた。
それを聞いて思い浮かべると、原因になりそうなものは……。

「……確かに、ありそうですね。ＩＳ学園にいきなりの入学で、周りは女子ばかり。
いきなりの幼馴染との再会に、ＩＳについて右も左も分からない状態での最初の模擬戦。
それに加えてクラス代表になって、放課後のオレらとのＩＳの特訓と箒との剣の特訓。
寧ろ、ここまでいろいろ遭って倒れないほうがおかしいだろ……。」

そこまで言って、オレも少し考えた。
多分、朝の箒と同じことを考えてるだろうな。

――――なんで、気付けなかった！

思えば、数日前から一夏の反応が鈍いときが多々あった。
その時に、もっと聞いておけば避けられた事態なんじゃないか？
そう自己嫌悪に陥っていた。
しばらく、無言でいた俺に。
「……どうぞ。」
そう言って、山田先生がコーヒーの入ったカップを渡してくれた。
「あ、ありがとうございます……。」
オレはそれを受け取って、一口飲む。
それは仄かに甘く、山田先生の優しさが体に沁みた。
「……自分を、責めてましたか？」
ふと、山田先生が聞いてきた。
「っ！……はい。もっと早く、気付いてやれば、良かったと。」
「でも、織斑君は平気だからって言って気にしないんじゃないですか？」
「……それでも、です。」
そう言ったきり、また会話がなくなってしまう。
なんとなく、気まずい。
「如月君も、優しいんですね。そんな風に友達を大事にできるのっ

て。」

そう言って笑いかけてくれる山田先生。

オレは……。

「オレは、ただ、……目の前で、いなくなって欲しくないだけです。」

前の世界で、オレは親を目の前で事故でなくした。

だから、だろう。

深音や一夏、箒にセシリア達のことが放っておけないのは。

「……ご両親みたい、に？」

教師と言う職業柄、生徒の身の回りのことは多少調べてあるだろうから、

山田先生がそう聞いてきても、別段驚かなかった。

オレはそれに、

「……はい。」

とそれだけ言って、コーヒーをまた一口飲む。

それから飲み終わったコップを置いて、一夏を見る。

まだ、少し苦しそうだ。

そうしていると。

不意に、体が傾いた。

「……えっ？」

オレは驚いた。
何故って……。

「如月君も織斑君に似てて、自分のことに鈍感ですね？」

そう言われ、山田先生に抱きしめられているからだ。

「や、山田先生！？な、何してるんですか！？」

オレは慌てて山田先生のホールドから逃げようとするけど、思いのほか先生の力が強い……。
それに、む、胸が、顔に……。

「少しは、周りだけじゃなくて自分のことも大事にして下さいね？」

「わ、わかりました、わかりましたから、離してください！」

「ふふっ、ごめんなさい。」

そう微笑んで解放してくれた。
うぅ……、顔にまだ胸の感触が……。

「（ほんとに、自分に向いている女の子の好意に気付いてないんですね……。）」

なんでか、山田先生は苦笑していた。
オレは、からかわれたのだろうか？

っと、そんなことより。

「一夏がこの様子じゃ、クラス対抗戦に出せませんよね……。」

そう言ってはいるけど、もう覚悟は決まってる。

「そうですね……。って、その顔だと、如月君が出るつもりみたいですね？」

「はい。そのために、クラス『副』代表になったんですから。」

山田先生の言ったことに頷くオレ。

元々、一夏に何かあったときのためのバックアップとして待機してるつもりだったんだが、
まさかいきなり一夏の代役で出場する事になるとはな。

治ったら、一夏にしばらく昼飯おごらせるか。

そう考えて、寮に戻る為に立つ。

「……如月君。くれぐれも、本番ではくれぐれも無茶しないでくださいね？
オルコットさんや篠ノ之さん、哀元さんもみんな心配しますから。
……もちろん、私も。」

と立ったときに言う山田先生。
最後のほうは、よく聞き取れなかったけど。

「ありがとうございます、……姉さん。」
「ほぇっ！？」
ん、オレ、なんか変なこと言ったか？
「ね、姉さんって、な、なな、何でですか！？」
「え、あ、え？お、オレ、そんなこと言いましたか！？」
そう聞くとコクコクコクッと高速で首を縦に振る山田先生。
「あ、う～ん、えっと。
た、多分、さっき話を聞いてくれたときに、『もし姉がいたら、もしかしたらこんな感じなのかな』と思ってたんで、つい口に出てしまったと言うか、なんと言うか……。」
お、オレの悪い癖だ、思ったことをつい口走ってしまうのは……。
「い、いえ、べ、別にイヤというわけじゃないんです。ただ、驚いてしまって……」
「お、驚かすようなこと言ったオレも悪いですし……。
と、とにかく！お、オレは今日はこれで！明日また様子見に来ます！」
これ以上恥ずかしくなる前にオレは保健室から出た。
……明日の朝、代理出場の事を織斑先生に言わないと……。

そう考え、寮に戻った。

―保健室―

「姉さん、か……。」

さっき、如月君が言ってくれた言葉を呟く。
私は、結構年下に見られることが多いから、如月君に言われた事は嬉しいような気がする……。

「姉さん、か……。」

また同じことを呟いて、織斑君の様子を見る。

まだ、少し苦しげな表情をしているけど、朝よりはだいぶ顔色もよくなってる。
ただこの様子だと、クラス対抗戦には出せないですね。

「あ、とりあえず、職員室に戻ってクラス対抗戦対戦表、一組の代表を織斑君から如月君に変更しておかないと……。」

そう呟いて私は保健室を出る。

保健室の扉を出る前に織斑君のほうを見て、

「いい友達を待ちましたね、織斑君？」

と一声掛けて、職員室に向かう。

「姉さん、か……。」

如月君が言ってくれた言葉を、職員室に着くまで、何度も呟きながら。

そう言ってくれた如月君に答えられるように、頑張らないと！

―翌日　教室―

次の日の朝のＳＨＲ前、一組の教室は騒がしかった。

クラス代表の一夏が倒れた為に代わりに副代表であった北斗が代理出場する事になり、
女子に『絶対勝ってよね！』とか『デザートのフリーパスが賭かってるんだから！』などと
色々言われて改めて『必ず勝とう。』と決意する北斗の姿があった。

その様子を、織斑先生はいつものような鋭い、だけどどこか期待するような眼差しで、
山田先生はとても優しい、まるで姉が大事な弟を見るような視線で見守っていた。

――クラス対抗戦が、まもなく始まる。

第5話～対抗戦、開始前（後書き）

というわけで、次回は鈴音ｖｓ北斗になります。
そのまま、原作1巻終わらせられればと思います。

さて、うまく戦闘が書けるか心配です。
そして、山田先生可愛いです！

オドオドしてるとことか、最高です！

そんなわけで、ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などありましたら
よろしくお願いします。

では、また。

第６話～クラス対抗戦（前編）（前書き）

どうも、フュージョニストです。

これを書いているときに、ＰＶが２２０００を超えてました。
投稿して２週間足らずでこんなにとは驚きました。

改めて、ＩＳの人気の高さを知りました。

では、どうぞ。

第6話～クラス対抗戦（前編）

クラス対抗戦前日――

一夏が目を覚ましたと山田先生から連絡があり、放課後になってから、
オレ、深音、箒、セシリアの4人で保健室に向かう。

保健室に着くと……。

「あ、4人とも。どうした？」

点滴を刺した一夏がいつものように話しかけてきた。
回復はしてるようだが、まだ少しばかり顔が青いな。

「お、お前というやつは、一体どれだけ私達に心配をかけるのだ！？」

「全くですわ！せっかく、クラス代表を譲って差し上げたのに……。」

一夏がいつも通りなことに安心した箒とセシリアは小言を漏らす。
確かに、クラスみんなが心配してたが、この二人が一番心配してたからな。

「それはほんとに悪かったって！
その所為で、北斗に今回のクラス代表を無理やりやってもらう事になっちまったし……。」

「それが悪いと思うなら、次からは倒れないように調整しろよ。
そして、完全に治ったら昼飯おごれ。
……まぁ、今回一夏が倒れたのについては、こっちにも非はあるんだがな。」

そう言って、箒とセシリアの方を見る。
この二人、何かと言い争って一夏を巻き込んでるからな。

二人もそれについては反省しているんだろう。
申し訳無さそうにしていた。

「ま、起こっちまった事は仕方ないしな。代わりは任せとけよ、一夏。」

「ああ、頼んだ。」

「おう、頼まれた。」

そう言って、拳をぶつけ合った。

それから30分ほど一夏と話をして、明日の朝誰が迎えに来るかでまたセシリアと箒がもめたから、深音に頼む事にした。

深音には悪いが、二人に朝から喧嘩されたんじゃ、今の一夏はかなり参るだろうと思ったからな。
それを言ったら、二人は「「ぐっ……」」と言って渋々納得した。

そして、辺りが暗くなってきたので、オレたちは寮に戻る事にし、入れ替わりに保険医の人が来て、一夏は『明日の朝くらいまでは保健室で休んでに居るように』、

と言われたらしい。
オレと一夏と話していたその時、腰のケースに仕舞ってあるギアコマンダーの画面が
一瞬淡く光ったのに、この場に居た誰も気付いていなかった。

―クラス対抗戦　当日―
―第二アリーナ　ピット―

「見物人多いなぁ……。」

アリーナに入るなりその目に入って来たのは、アリーナの観客席に居る人たち。
全席満員で入りきれなくて、通路での立ち見なんて事にもなっているらしい。
アリーナに入れなかった生徒や先生なんかは、リアルタイムモニターで見るらしい。

そんなに、オレと凰さんの試合が見たいのか？
というか、何でだ？

「……如月君が、学園で二人しか居ない男子の一人だから、だと思う。」

「……簪、いつの間に来たんだ？」

「ん、ついさっき。」

オレの独り言に答えたのは、この間知り合った四組の更識簪。
確か、彼女も専用機持ちだったはず……。
「簪は、試合には出ないのか？」
「……機体が、無いから。」
「……そうか。すまない。」
そう言って黙ってしまって、あんまり会話が続かない。
簪は、日本代表候補生で専用機持ちだが専用機がない。
何でも、一夏の『白式』と同じところが製造元らしく、そちらに人員が割かれたおかげで
簪の専用機である『打鉄弐式』の開発・製造が詰まっているらしい。
気に障ること言っちまったかぁ、と考えていると。
「北斗。ハイパーデンドーデンチ、予備1組持ってきたよ。
これで、試合後の電童のエネルギーの補給、すぐに出来るよ。」
「あぁ、サンキュ。」
深音が少し大きめのトランクみたいなものを持ってピットに入って来た。
それをピットの端に置いて、
「？　北斗、彼女は？」
そう言って、オレの傍に居る簪に目を向ける。

「あぁ、彼女は四組の更識簪。ちょっと前に練習してるときに知り合った。
簪、彼女は哀元深音。オレの幼馴染でクラスメイトだ。」
簪もオレの幼馴染に顔を向ける。
「「……。」」
しばらく、無言。
そして。
「……更識、簪。よろしく。」
「……哀元深音。こちらこそ。」
短いけれど、自己紹介。
うん、何とかなった。
深音は少し人見知りがあるし、簪は話すのが苦手そうだし。
そんな二人なら、少しは仲良くできるんじゃないか？
そう思って丁度良かったから紹介したけど、後は二人次第か。
そんな風に考えていると。
「よう、北斗。応援に来たぞ。」
「機体とおまえ自身の調子はどうだ？」

「まさか、わたくしが見ている前で負けたりなんてしませんわよね？」

そう言って一夏、箒、セシリアの3人がピットに入ってきた。

「お、3人とも来てくれたのか。けど、悪い。そろそろ開始時間になるから、オレは出るぞ。」

「あ、そうか。もう少し早く来れればよかったな。頑張れよ！」

「ま、負けるなよ！」

「負けたら許しません事よ！」

タイミングが少し悪くて一夏たちとはそんなに話せなかった。

まぁ、一夏が病み上がりだから仕方ないと言えばそうなんだけどな。

けど、ピット・ゲートに向かう前に一夏たちが軽く励ましてくれた。

セシリアは、若干脅しっぽかったけどさ。

ピットからピット・ゲートに出る直前。

最後に簪が、

「……如月君、がんばれ。」

そう言って送り出してくれた。

さて、と。

そう言ってくれた簪、ピットに来てくれた一夏たちのためにも、負けるわけにはいかないな。

そして、ピット・ゲートから出る前に、機体の状態の最終確認をする。

――デンチ残量、ＭＡＸ。

――両脚部ハイパープラズマドライブ、駆動問題なし。

――両腕部ハイパープラズマドライブ、駆動問題なし。

――ＰＩＣ稼動良好。

――システム、オールグリーン。

よし、万全だ。

「――――電童、発進！」

そう叫び、アリーナへ飛び出す。

そこには、凰さんの駆る赤いＩＳ――甲龍（シェンロン）が静かに佇んでいた。

両肩には、スパイクの付いた非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が浮いている。

やっぱり、専用機ってのは一種の威圧感みたいのがあるな。

そう考えていると、

「えぇっ！？　なんでアンタなの！？　クラス代表、一夏じゃなかったの！？」

と開放回線（オープン・チャンネル）で叫んでくる凰さん。

「一夏なら、３日前に倒れた。とりあえず治ったが、まだＩＳを使えるような状態じゃないんでな。
一夏の代理で今回だけはオレがクラス代表だ。」

そう返す。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』

アナウンスが流れ、それに促されるように移動する。
さっき言ったことに対して、凰さんは、

「……そ、そう。ならいいわ。一夏の代わりに、アンタを叩き潰すから。」

と言ってきた。
一夏じゃないのが、かなり残念だったらしい。

「できるなら、な。少なくともオレは、今の一夏よりは強いぞ？」

「へぇ、楽しめそうじゃない。」

戦う前の、小競り合い。
それも、終わり。

静かに、オレと凰さんはいつでも飛び出せるように構える。
そして。
『それでは両者、試合を開始してください。』
ダンッ、ガギャギャギャギャッ！
そのアナウンスと共に鳴ったブザーの音が静まる前に、お互いに飛び出し、
オレの両腕の高速回転するタービンと凰さんの持つ異形の青龍刀がぶつかり合い、火花を散らす。
何度か撃ち合い、離れ、また撃ち合う。
「へぇ。初撃を防いでここまで突っ込んで来れるなんて。アンタ、やるじゃない、のっ！」
一度大きく青龍刀が振られ、少し距離を離される。
オレはすぐに立て直して近接格闘（インファイト）戦に持ち込む。
その時に。
「そいつぁ、どうも、っとぉ！」
タービンを高速回転させたままの右ストレートを繰り出す。
案の定、青龍刀で防がれるけど……。

……少しでも動きを止められれば、連撃が入れられる！

「はぁぁぁっ！」

逸らされた勢いのまま、右足を軸にするように半回転。
そのまま、左足での後ろ回し蹴りを喰らわせる。

「っ！」

それが当たり、青龍刀が手から弾き飛ばされる。
さらにその勢いのまま半回転。

「うおぉぉっ！疾風、三連撃！」

フルスイングで遠心力と速度を付けた右足での全力の蹴り。

「くうぅぅっっ！」

それが入り、凰さんが大きく飛ばされる。
今の直撃で、それなりにS・E（シールド・エナジー）は減らせたはず。

「ふうぅぅぅっ。」

一度、息を整える為に深く息を吐く。
そして、凰さんを見る。

今の一撃が確実に入ったのか、左腕のアーマーが凹んでいた。

「ははっ、ほんとにやるじゃない。中国代表候補生のあたしと、ここまでやれるなんてね。

でも、戦いはこれから、よっ！」

凰さんがそう言った瞬間、何かが飛んできた。

センサーがわずかな空間の歪みを感じ取ったから飛んできたと分かったが、

不意打ちに放たれたそれをオレは防ぐ事ができず。

「ぐっ、がぁっ！」

もろに受けて、地面に叩きつけられる。

「ごほっ、がふっ……。」

叩きつけられた衝撃で一瞬息が詰まる。

それを見た凰さんは、

「今のはジャブよ？」

にやり、と笑って言った。

さっきのが牽制（ジャブ）って事は……！

その後に待っているのは……本命（ストレート）。

「！　マズッ……。」

そう言った瞬間、見えない無数の弾丸がオレを襲った。

―ピット内―

「なんだ、あれは……。」

隣で一緒にモニターを見ていた箒が声を漏らす。

「『衝撃砲』、ですわね。」

「「『衝撃砲』？」」

声を揃えて、俺と箒がセシリアの方を向く。

深音と水色の髪の子も視線をセシリアに向ける。

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、

――『ブルー・ティアーズ』と同じ、第三世代型兵器ですわ。」

その説明を聞いて、俺と箒はモニターに視線を戻す。

苦しい戦いになると思って、北斗の戦いを見る。

「如月君……。」

「北斗……。」

水色の髪の子と深音が同時に北斗の名前を呟き、心配そうにモニターを見続けていた。

―第二アリーナ内―

「ええいっ、ちょこまかと逃げるなっ！」
そう言って、凰さんが見えない弾丸を放ってくる。
それを、両足のタービンをフル回転させて地面を走り回る事で回避していく。
「んなモン、避けるに決まってるだろ！」
そう叫びながら。
「けれど、よくかわすじゃない。衝撃砲≪龍咆（りゅうほう）≫は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに。」
確かに、砲身も砲弾も見えない。
おまけに、全方位死角なしと来た。
龍咆の斜線自体は真っ直ぐなんだろうけど、そこに凰さんの操縦技術が混ざる事で、
上下左右前後に関係なく撃ってくる。
正直、これほど厄介な武器はないと思う。
回避しながら策を練る
さてと、どうするか――。
そう思ったときだった。

ヒヒイィィン！
シャアァァッ！
ガオォォォッ！

という、雄たけびのようなものが頭の中に聞こえた。

「！？」

目の前に、センサーのモニターが出る。
そこに書いてあったのは……。

『第二形態移行（セカンド・シフト）開始、……完了。
専用武装≪データウェポン≫、開放。
ユニコーンドリル、バイパーウィップ、ドラゴンフレア、使用可能。
』

一瞬、理解が追いつかなかった。
第二形態移行（セカンド・シフト）……？
データウェポンが、使用可能……？

凰さんに狙われてるこの状況じゃ、四の五の言ってられないかな。
それに、使えるんだったら、なんだって使うさ。

「行くぞ、電童！バイパードライブ、ユニコーンドライブ、インストール！」

そう叫ぶ。

すると、右腕には青いユニコーンの首から頭部にかけてが手甲（ガントレット）の

ように装着される。
腕を覆った手甲の先のユニコーンの頭部にある角は、タービンの回転に同調するドリルだ。

一方、左腕には紫のコブラの首から頭部にかけてが、同じように手甲見たく装着されている。
コブラの頭部の部分は、ワイヤーによって射出・操作が可能だ。

さらに、電童（凰牙にも）にはデータウェポンをインストールした状態でのみ使える特殊機能があり、
その機能はデータウェポンによって異なる。

ユニコーンドリルの場合は、防御結界『ファイアーウォール』。
その能力は、自機を中心に半径数メートル程の強固なエネルギーシールドを発生させる事ができる。
その為、データウェポンの中では、かなり安定した戦いを行う事ができる。

バイパーウィップの場合は、高速起動・分身『イリュージョンフラッシュ』。
これは高速起動によって残像・分身を作り出し、相手を惑わす事ができる。
データウェポンの中で、一番トリッキーな戦い方が出来るのが特徴だ。

「やっぱり、電童にはこれが無くちゃな。
これからよろしく頼むぜ。ユニコーン、バイパー、ドラゴン。」

両腕にインストールした2体、それとまだインストールしていない1体にそう声を掛ける。

頭の中に、３体の嬉しそうな鳴き声が響く。

「な、何よそれ……。そんな武器、見たこと無いわよ！？」

「そりゃあ、たった今使えるようになったばっかりだしな。」

いきなりセカンドシフトって出たのは、驚いたしな。

「だが、面白くなってきただろ？」

「……それもそうね。」

オレが不適に笑って言うと、凰さんもそうだといわんばかりに笑う。

「さてと……。」

「それじゃあ……。」

そう言ってお互いに構え。

「「第二ラウンド、開始だ（よ）！」」

そう叫んでお互いに飛び出し、凰さんの青龍刀とオレのドリルホーンがぶつかる瞬間。

ズドオオォォン！

と、大きな衝撃が起こった。

第6話～クラス対抗戦（前編）（後書き）

というわけで、前半終了です。

続きは、後半で。

いよいよ、データウェポンも本領発揮できるか？

第7話〜クラス対抗戦（後編）（前書き）

どうも、フュージョニストです。

前編と後編は書いてて区切りが良かったんできりました。

なので、若干後編のほうが長いです。

では、どうぞ。

第7話～クラス対抗戦（後編）

オレと凰さんが戦っているときに、突如起こった衝撃。

甲龍の衝撃砲？――いや、そんな訳ない。

それよりも桁外れに大きい衝撃だ。

上を見ると、バリアが一箇所大きな穴が開いたように割れていた。

どうやら何かが、アリーナ上空のバリアを突き破って落ちてきたらしい。

「何だ、いきなり！？」

「知らないわよ！？」

オレたちも少し慌てるが、すぐに冷静になって行動を起こす。

「とりあえず、一度ピットに――」

「え、えぇ、そうね――」

そう言い合ったとき。

『ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。』

いきなりセンサーの画面に警告が出る。

――ロックされている？

そう思った瞬間に。

――――凰さんに向けて熱線が放たれた。

「――えっ？」

ロックされていたのはオレのはず。

「クソッ、間に合え！」

オレは全力で飛んで、凰さんを射線上から掻っ攫う。

「あぶねーな、凰さん大丈夫か？」

「え、えぇ、なんとかね。」

とりあえず凰さんを抱えて一時離脱。敵機から離れる。

さっき落ちてきたときに巻き上がった煙が晴れ、オレたちを狙ってきた奴の姿が露になる。

オレはその姿を見て、呟いた。

「全身装甲（フル・スキン）タイプ……！」

そのＩＳは、一言で言えば『異形』だった。

二メートルを越えるその機体は、手が異様に長くつま先よりも下まで伸びている。

さらには全身にあるスラスター、頭部に不規則に並んだむき出しのセンサーレンズ。
腕には、先ほど凰さんを狙ったであろうビーム砲口が左右あわせて合計４つあった。

「お前は、誰だ？」

そう問い掛けてみるけど、返ってきたのは沈黙だった。
しばらくにらみ合っていると、

『如月君！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

山田先生からプライベート・チャネルで通信が飛んできた。
すぐに脱出、ね……。

「出来ればすぐに脱出したいんですけど、正体不明（アンノウン）機にロックオンされてるし、
まだ先生たちが来るまで時間が掛かりそうなんで、オレたちで何とか足止めします。」

山田先生にそう返事をする。
あの機体は、アリーナのシールドを破ってきた。

ってことは、誰かが止めないと観客に被害が出る可能性がある。

そう考えての返事だった。

「……勝手に言っちまって悪い。付き合ってくれるか？」

山田先生への返答の後に、凰さんへ謝っておく。
本人の了解無くオレ”たち”って言っちまったし。
「誰に言ってんのよ。こんな状況なんだし、付き合ってあげるわよ。」
そう自信たっぷりに返してくる。
さすが、代表候補生。
味方なら心強い。
「で、でさ……。そ、そろそろ離してくんないかな？動けないんだけど？」
「あ、悪い。」
さっきあの機体の攻撃から助けたときのまま抱えていたから、動くに動けなかったらしい。
『ふ、二人とも！？ダメです！生徒さんにもしもの事があったら――――』
山田先生の悲鳴とも取れる注意の言葉は、最後まで聞けなかった。
なぜなら。
正体不明（アンノウン）機が突っ込んできたからだ。
「なぁろっ！」
それをなんとかかわす。

「チッ、向こうはやる気満々って感じか？」
「みたいね。如月、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。アンタの武器、格闘系武装しかないんでしょ？」
「ああ、その通り。っつー訳で、そうさせてもらう！」
そう言って、視線を交わし軽く武器を打ちつける。
そして、オレはアンノウンに突っ込んだ。

―ピット内―

「もしもし！？如月君聞いてます！？凰さんも、聞いてますー！？」
今の声は、山田先生だ。
北斗と鈴は、戦闘に入ったから返事をする余裕が無いんだろう。
「本人達がやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう。」
「お、お、織斑先生！何をのんきな事を言ってるんですか！？」
千冬姉が北斗たちにやらせてみるって言ったら、余計に慌てだした山田先生。
こういうときでも、変わんないなぁ……。

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ。」

そう言って、コーヒーに白い粒子を入れようとする千冬姉。
それを見て、一言。

「……千冬姉。それ……、塩。」

「……。」

入れようとしていた塩を容器に戻し、しばし無言。
そして。

「……何故、塩があるんだ？」

「さ、さあ……？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……。」

うん。
そう書いてあったから、俺も一応注意できたわけだし。

「あっ！やっぱりあの二人の事が心配なんですね！？だからそんなミス、を――――」

あ、千冬姉が少し怒ったかな？

「山田先生、コーヒーをどうぞ。」

「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……。」

「どうぞ。」

そう言って、ずいっと山田先生にコーヒー（塩入）を押し付ける千冬姉。

かてて加えて、

「い、いただきます……」

そう言って山田先生が涙目で受け取った後に、

「熱いので一気に飲むと言い。」

と言い放った。

鬼、いや悪魔がいる！

と思っていたら。

スパアァァァン！

と出席簿で殴られた。

っていうか、いつの間に出したんだ千冬姉……。

そんなやり取りを見ていると。

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

とセシリアが言い出した。

「なら、俺もだ。俺にも行かせてくれ、千冬姉！」

俺も、出来る事ならすぐに加勢したい。
だけど、現実はそれを許してくれないわけで。
「そうしたい所だが、これを見ろ。」
そう言って千冬姉は手元のブック型端末の画面を数回叩き、表示を変えた。
「遮断シールドがレベル４に設定……？しかも扉が全てロックされて――――あのＩＳの仕業ですの！？」
そう言うことらしい。
扉が開かないせいで増援に向かえない、って事か？
「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かう事も出来ないな。」
とりあえず合ってるみたいだ。
その後もセシリアは何か言っていたけど、千冬姉がイライラしてきたのを見て諦めたらしく。
「はあぁ……結局、待っていることしか出来ないのですね……。」
とため息をついていた。
とそこへ、
「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ。一夏、お前もだ。」

「「な、なんだって（なんですって）！？」」

千冬姉の容赦ない一言が突き刺さる。

「オルコットのＩＳは一対多向きだ。多対一では邪魔になる。」

「そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと――――」

と喰らいつくセシリア。

だけど、

「では連携訓練はしたか？そのときのお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間――――」

という何を言ってるのか分からん言葉の容赦ない連射にセシリアは降参のようで、

「わ、わかりました！もう結構です！」

と言いながら両手を揺らしていた。

「ふん、分かればいい。それと織斑。お前が出れないのは、ＩＳでの実戦経験が全く無いのと病み上がりのお前が手を出したところで他のメンバーの足を引っ張るだけだからだ。」

「ぐっ……。」

やばい、何も言い返せない……。

そう思い、ため息をついた。

「はあぁ、何も言い返せない自分が悔しいですわ……。」

あ、セシリアも同じ事を考えてたのか。

そう思って視線を上げ、辺りを見回して気付いた。

「あれ、箒？」

そう。

箒の姿がどこにも見当たらなかった。

……トイレか？

―アリーナ内―

オレは右腕にユニコーン、左腕にバイパーウィップをインストールしたままアンノウンに突っ込む。

そのままの勢いでドリルホーンをたたきつけようとする。

だが、当たる寸前に避けられてしまう。

「クソッ、当たりゃしねぇ！」

「ちゃんと狙って！」

「狙ってる！あいつの機動性がおかしいんだって！」

さっきから、凰さんの援護の下タービンをフル回転させて敵ＩＳに突っ込んで攻撃をしようとしても、

「如月、回避！」

「うおおぉっ！」

それを全身にあるスラスターを使って回避し、でたらめに長い腕をぶん回して近づいてきて、
腕をぶん回したままビームを打ってくるから尚性質が悪い。

それに向けて、

「ああもう、めんどくさいわねコイツ！」

凰さんが衝撃砲を展開・発射する。
けれど、あのＩＳはそれを腕で叩き落す。

何度も同じ事をやっていたから、もう数えるのもやめた。

このままこの状況が続くと、こっちのエネルギーの方が早く尽きる。

ちなみに。

「凰さん、残りエネルギーは？」

「……１８０って所ね。」

「こっちも、あと２００って所だ。」

お互い、エネルギーは半分以下。

これでどうするか……。

「ちょっと厳しいわね……。今の火力でアイツのシールドを突破して機能停止（ダウン）させるのは、確率的に一桁台ってとこじゃない？」

「確かに、な。今は、確率が全く無いよりはマシと思うしかないな。」

「……如月って、なんとなく一夏に似てるわね。さっきの台詞もそうだけど。」

「確率云々のことか？」

「そうよ、きっと一夏もさっきの会話だったら同じ様なこと言ってるわね。」

こんなときに思い出話か？

……、あれ？

「なぁ、凰さん。」

「ん、なによ？」

「あいつの動き、なんだか機械じみてないか？」
「は？ＩＳは機械でしょ？」
そう返される。
でも、そう意味じゃない。
「なんて言えばいいか……。もし人が乗ってるなら、こんな風に話す時間はくれないよな？
そう言う意味で機械じみてないか、って言ったんだ。」
「言われてみれば、あいつってあたしたちが話してるときってあんまり攻撃してこないわね。」
言いたい事が分かってくれて何よりだ。
そこまで言って凰さんは「でも、」といい、
「ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。そう言うものなのよ？」
そう言ってきた。
それは、オレも思った。
「もしかしたら、そんな技術が作られてるかもしれない。可能性としては、ゼロじゃない。」
「何？あれに人が乗ってなければ勝てるわけ？」
そう聞いてくる凰さん。

それに対してオレは、
「ああ、勝てる。」
そうはっきりと返した。
根拠は、まだ使っていないデータウェポンの特殊能力。
使って無かったのは、エネルギーが残り少ない為。
そして、人に向けるとすると威力が高い為。
その辺は、一夏の『零落白夜』と似てるところだ。
「へぇ、やけに自信があるのね。で、あたしはどうすればいいわけ？」
「アイツをしばらく引き付けて欲しい。出来れば、アリーナの壁まで誘い込んでくれ。
それまでに、準備を終わらす。合図をしたら、衝撃砲を最大出力で奴のいる地面に撃ってくれ。」
「分かったわ。」
「頼んだ。」
と作戦会議を終え、オレは一度その場から下がる。
それと入れ替わるように凰さんがアンノウンに向かって青龍刀を振りかざす。
さすが凰さん。
オレよりも被弾が少ない。

さて、凰さんが時間を稼いでくれている間に……。

「クラッシャーファング、ドリルホーン、最大出力！」

オレがそう言うと同時に、両腕のタービンが最大出力で回転する。

１０数秒経ち、ドリルホーンは青白く、クラッシャーファングは明るい紫のエネルギーを纏う。

残りエネルギーは、１６０。

タイミングは、今！

そう思った瞬間だった。

『北斗ぉっ！男なら、その程度の敵に勝てなくてなんとする！一夏なら、一夏ならすぐに戻ってくるぞ！』

箒が、中継室にいてそこから叫んでいた。

「何やってんだ、あいつ……。っ！」

マズイ、今ので敵ＩＳの注意が凰さんから箒の方に向いている！あのままじゃ、箒が！

そう思ったオレは、

「凰さん、今！」

「わ、わかったわよ！」

凰さんに指示を出し、凰さんは敵ＩＳの地面に向けて衝撃砲をぶっ放した。

その衝撃で、敵ＩＳの周りには煙が巻き上がり、突然足元が崩れたのでバランスを崩す。

そしてその右腕に、紫のエネルギーを纏いワイヤーによって射出された

バイパーウィップのクラッシャーファングが喰らい着いた。

さらに、そのワイヤーを巻き取る勢いを利用して、敵ＩＳに突っ込む！

「はあぁぁっ！」

そのまま、青白いエネルギーを纏った右腕のドリルホーンを突き刺す！

だがその攻撃を敵ＩＳはぎりぎりでかわし、ドリルホーンはわずかに左腕の装甲を削って、

アリーナの遮断シールドを一部壊しただけに終わった。

そのまま左腕で殴り飛ばされた。

「ぐっ……、んなろぉっ！」

それでも、クラッシャーファングによる右腕への一撃は効いたようで、

殴られて飛ばされる勢いのまま思い切り引っ張ると。

ゴキャアァァッ！

と音がして、奴の右腕をもぎ取った。
と同時に、俺も地面にたたきつけられる。

「ぐはっ！」

「「如月（北斗）！」」

凰さんと箒が叫んでる、な。

そこへ敵ＩＳがオレに向けて右腕を向けてくる。
どうやら、ゼロ距離でビームでも撃つつもりみたいだ。

でもな。

今回はお前が機械だからこそ。
人間が、裏をかけるんだよ？

「狙いは？」

『完璧ですわ！』

『問題ないよ。』

そう言った次の瞬間、セシリアのブルーティアーズ４機と
深音のロングレンジビームライフルによる狙撃が直撃する。

そのまま敵ＩＳは地面に落下し、動かなくなった。

『ギリギリのタイミングでしたわ。』

『後1、2秒でも遅かったら、あそこを狙えなかった。』

『なに、二人なら出来ると思ったさ。
だから、凰さんに時間稼ぎとあそこへの誘導を頼んだんだから。』

ユニコーン、バイパーのインストール状態で、
最大出力のタービンと連動させた一撃はバリア無効化攻撃になる。

それに気付いたオレは凰さんに時間稼ぎを頼み、
セシリアと深音には何とか破壊予定のシールドのところまで向かってもらった。

『そ、そうですの……。……。とっ、当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット。
イギリス代表候補生なのですから！』

『……そ、そう。』

そう言って、いつもの調子で話し始めるセシリア。
深音は、なんか顔を赤くして照れてるし。

まぁ、何にせよこれで終わったか……。

そう思っていたときだった。

――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

「なっ！」

残った左腕、それを最大出力形態（バースト・モード）にして。
ロックされていたのは、オレ。
だが、避けたら斜線上にいる箒を巻き込んじまう！
それだけは、絶対に！
と、そのとき。
『単一仕様機能（ワンオフ・アビリティ）≪Ｆ・Ａ（ファイナル・アタック）≫開放。
対象を選択してください。』
と表示された。
考えている暇は無い！
そう思い、すぐに決める。
その瞬間、右腕のタービンが高速回転し、バリア無効化攻撃の時
とは段違いに強い、
青白いエネルギーがドリルホーンに集中する。
さらに、背にあるバックパックの上部が稼動してデンチから出る
熱を放出する。
そして。
「ユニコーンドリル！ファイナル・アタック！」
タービンの高速回転によって生み出された渦状のエネルギーが放

たれ、
敵ＩＳの放った最大出力のビームとぶつかり合う。
威力は、互角。
そして、お互いに押し切れずに相殺し、爆発。
敵ＩＳはそれっきり動かなくなり、オレは余波で吹き飛ばされ、気を失った。

―放課後　保健室―

「ぐっ……。」
寝ていたオレは、痛みに起こされた。
まだ起き切っていない頭で辺りを見回し、保健室だろうとあたりをつける。
「あ、起きてましたか？」
そう言って声を掛けてきたのは、我らが副担任の山田先生。
ただ、身体が痛むし頭もまだボーっとしているので、まともに話せはしないが。
「症状は全身打撲に、軽いやけどですね。数日はつらいでしょうけど頑張ってください。」
そう言って笑ってくれる山田先生。
なんか、こういうときだとすごい癒される……。

「それと、今日のあの敵ＩＳについては、誰にも話さないようにお願いしますね。」

「あ、はい……。」

何とか、それにだけ返事をしてまた目を瞑る。

そのまま、オレはまた眠った。

「心配、ありがとう……。姉、さん……。」

その直前に、無意識に何か呟いていた。

またしばらくして目が覚めた。

辺りがかなり暗くなってきているから、もう夜も近いのか。

そう思っていると、

「……起きた？」

そう言いながらディスプレイを見つめていた簪と、

「……大丈夫？」

と言って文庫本を読んでいた深音が居た。

「簪に、深音？ゴメン、今何時？」

「「夜６時４０分。」」

俺がそう聞くと、見事にハモって返してくれたよ。
なんとなく食堂に行きたいと思ってたら、そんな時間になってたのか。

「二人とも、メシ食った？」

「「（フルフルフルッ）」」

もう一度聞いたら、今度は同時に首の横振り。
なんだろう、この二人、かなり似たもの同士？

「じゃあ、一緒に食堂行くか？」

「「（コクコクコクッ！）」」

３度目は、ものすごい勢いでの首の縦振り。
……、もしかして。

「二人とも、オレが起きるの待っててくれたのか？」

「「（……、コクッ）」」

短い沈黙の後、一度だけ首を縦に振る二人。
なぜだろう、二人の頬が赤いのは？

「心配、かけたみたいだな。じゃ、食堂に行くか！今日は、心配かけたし何か驕るわ。
二人は、何がいい？」

そんな会話をしながら、俺、深音、簪は保健室を出た。

途中で、食事を終えた一夏たちと会い、身体は平気かとか聞かれたけど
打撲と軽いやけどだから心配ないって言ったら、お大事にって言われた。

そして食堂で今日の戦いのことを少しだけ簪に話して、部屋に戻って休む事にした。

色々ありすぎて、なんか疲れた……。

とりあえず、情報整理を後でしないと、な。

そう思って、部屋のベッドで眠りに着いた。

第7話～クラス対抗戦（後編）（後書き）

というわけで、これで原作1巻も終わるかなぁ？
引っ張っても、次回の前半くらいで終わるようにします。

というわけで、次回から2巻に少しでも入れたらと思います。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などお待ちしています。

それでは！

第8話～とある6月の休日。（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回から、原作2巻に入ります。

それではどうぞ。

第8話～とある6月の休日。

先月のクラス対抗戦が終わって、数週間。
今は六月の頭のとある日曜日。

オレは、学園の整備室を借りて電童の調整をするつもりだった。
深音は、凰さん・セシリアの二人に誘われて買い物に行っている。
ここの所、深音の人見知りも大分無くなってきてるし、いい傾向だな。

一夏は一度自分の家に帰っているらしい。
何でも、中学時代の友人に会うそうだ。

特に予定の無かったオレは、日ごろの無茶に付き合ってくれてる電童を整備しようと思ったわけだ。

思ったわけなんだが……。

「……何でいるんだ、布仏さん？」

「ん～？ん～とね～、暇だったから～。」

なぜか、整備室の中にクラスメイトの布仏本音（のほとけ ほんね）さんがいた。
いつもどおりの眠そうな顔だ。

「暇って……。」

「何もすることが無かったからフラフラしてたら～、きーくんがど

っか行くのが見えたから～。」

「それで、付いて来て先回りしていた、って？」

「そうなのだよ～。」

どうやら、そう言うことらしい。

ちなみに、きーくんというのは、布仏さんがオレを呼ぶ時のあだ名だ。

ちなみに、一夏は”おりむー”と呼ばれている。

「オレは、ここの設備使って少し電童――あぁオレのＩＳの名前な。アレの整備をしようと思ってな。」

「だったら～、私も手伝う～。」

え？

この子、今何と？

「……大丈夫なのか？」

普段の移動速度の遅さを見てるからな……。

少し、心配だぜ……。

「大丈夫～。あ、それならかんちゃんも……。あ、いた。お～い、か～んちゃ～ん！」

「……？”かんちゃん”？」

そう布仏さんに呼ばれて来たのは、

「……どうしたの、本音……？っ！……き、如月君……。」

「あ、簪。」

いつもみたいに空間ディスプレイを見ていた、更識簪だった。

「……今日は、何でここに？」

少し赤くなった顔で俺に聞いてくる。

顔が赤いのは、熱でもあるのか？

「あぁ、電童の調整をしようと思ってな。」

そう言ったら、

「……！あの、機体の！？」

って言って、すごく輝いた目で俺を見る簪。

「あ、あぁ。その話をしたら、布仏が手伝うとか言い出してな。」

「……も、もし良かったら、私にも、……手伝わせて欲しい。」

と、上目遣い＋涙目（小）で言ってきた。

こ、これじゃあ、断るに断れない……。

結局、

「わ、分かった。じゃあ、オレはハイパープラズマドライブの調整をやるから、
布仏さんは装甲のチェック、簪は各部のエネルギー回路のチェック、頼めるか？」

「りょ～か～い！」

「分かった……！」

そう言って、電童を起動してオレに装着せずに台座に固定する。
それから、検査用のケーブルとかを繋いで、機材を用意して、っと。

「さて、始めるか！」

それから3時間近く、オレたちは作業していた。

意外だったのは、布仏さんの整備スキルだ。
普段はアレだけ動きが遅くて眠そうなのに、整備のときはそれとは別人みたいに見えた。

……まぁ、作業は正確だけど動きはいつも通りだったのは何も言わないでおこう。

簪は、時折電童をポ～っとした表情で見てる時があったけど、作業はほんとに早くて正確だった。

それに、チェックをしながらちょこちょこ改良を入れてくれたみたいで、
後で見てみたらエネルギー効率が5パーセント前後上昇してた。

オレのやってたハイパープラズマドライブの調整も済んだ。
特に、この間やった単一使用機能（ワンオフアビリティ）≪Ｆ・Ａ（ファイナル・アタック）≫の影響で、
右腕のタービンの回路・動作に不具合が出てないかが心配だったが、
それは杞憂で終わった。

「ふぅ……。」

最後に、電童の背部パックに外しておいたハイパーデンドーデンチを入れて、っと。

「これで、よし、と。」

ようやく、電童の整備が終わった。

「布仏さん、簪、手伝ってくれてありがとな。」

そう二人にお礼を言う。

「き、気にしないで……。……無理に言ったのは、こっちだから。」

「ど～いたしまして～。」

簪と布仏さんはそう言ってくれた。
でも、何かお礼したいな……。

そう思って、ひらめいた。

「二人とも、空いてるアリーナに行くぞ。」

「「……？」」

そう言って、使った機材を片付けて、空いていた第三アリーナに向かう。

その後、オレは電童を展開してピットから中に入る。

二人には観客席に行ってもらった。

「じゃ、見てろよ。」

オレが言うと、二人はこっちを向く。

オレはギアコマンダー（青）を銃を打つように構え、

「ファイルロード！ユニコーンドリル、バイパーウィップ、ドラゴンフレア！」

３体のデータウェポンを、実体化させた。

ユニコーンドリルは、頭までの高さが２．５メートルくらいの青いユニコーンの姿。

バイパーウィップは、全長が３メートルくらいの紫の蛇の姿。

ドラゴンフレアは、頭までの高さが２メートルくらいの翼を持った西洋龍の姿。

やっと外に出て自由に動けるのが嬉しいのか、３体はアリーナの中を飛び回っている。

「……！」

「すご～い！」

と、簪と布仏さんが3体が飛ぶ様子を見ていた。
で、見てたら、簪がプルプル震えてる。
なんだ？と思ってたら、
「……如月君。私、あの子達、……触ってみたい！」
と、普段の簪とは思えないような大きな声を出して、そう言ってきた。
「あ、きーくん、私も～。」
布仏さんも、なんだかんだで触ってみたいんだ。
「わかった。……みんな、戻って来ーい！」
オレがそう叫ぶとユニコーンは走って、バイパーは這って、ドラゴンは飛んできた。
（もちろん、みんな空中を）
ヒヒィン。シャアァァ。グゥゥゥ。
そう鳴きながらオレに寄って来る3体。
後ろに居た二人を見て、『ねぇ、あの子達誰？』的に首を傾げてた。
……器用だな、お前ら。
「こっちの二人。眼鏡の子は、更識簪。眠そうな子は、布仏本音。

二人とも、オレの友達だ。」

そう紹介して、二人の前からちょっと移動する。

丁度、二人と三体が対面するような感じの位置に。

そして。

ユニコーンが簪にゆっくりと近づいて、顔を摺り寄せた。

「……！……ふふっ。」

ユニコーンが簪に懐いたみたいだ。

ユニコーンは人懐っこいからな、簪みたいに優しい子ならすぐに仲良くなれると思ったさ。

バイパーも簪が気になったみたいで、チラチラ簪のほうを見ている。

簪はそれに気付いて、

「！　……あなたも、おいで。」

そう言った。

それが嬉しかったのか、バイパーは簪に近づいていく。

そして、赤い球体のついた尻尾を簪に向けた。

「……？」

どうすればいい？

と簪から困った眼差しが飛んでくる。

「それは、バイパーなりの挨拶だよ。握手、見たいなものだから、そっと触ってあげてくれ。」

それに頷いた簪は、恐る恐るバイパーの尻尾の赤い球体に触る。

すると、バイパーが彼女の近くでとぐろを巻いておとなしくなった。

多分、もっと触って欲しいんだろう。

「……クスッ。」

それが分かった簪は、優しく頭を撫でていた。

どうもバイパーは、若干ツンデレなのか素直じゃないときがあるんだよな。

今だって、簪に顔を向けてないし。

一方で。

「（じ～～～～～。）」

『グ～～～～～。』

布仏さんとドラゴンがにらめっこしていた。

「……何やってるんだ？」

ドラゴンが首を傾げると、鏡みたいに布仏さんも動くし。

本当に、何をやっているんだろう……。

そう思っていると、布仏さんがいきなり猫だましをかました。

『（ビクッ）』

びっくりしたドラゴンは、何があったのか、とキョロキョロ辺りを見回す。

「えへへ～、びっくりした～？」

『（コクコクッ！）』

「ごめんごめん～。じゃあ、おいでおいで～。」

『（？）』

そういわれて近づくドラゴン。

そして。

「なでなで～。」

『（！）』

布仏さんはドラゴンの頭を撫でだした。
気持ちいいのか、ドラゴンは彼女の隣に降りた。

それを機に、布仏さんはドラゴンに抱きついたり一緒にピョンピョン跳ねたりしていた。

ドラゴンは好奇心旺盛で子供っぽいからな～。
布仏さんは、一緒にて飽きないんだろうな。

そんなことを思いながら、彼女たちとデータウェポンたちの触れ合いを眺めていた。

しばらく眺めたあと、オレはアリーナの中央で電童の調子を確かめていた。

両脚部のタービンで外周を2，3週走ったり、瞬時加速をしてみたり、
三連撃の型を何度か試してみたりと色々やった。

結構時間が経っていたらしく、簪と布仏さんに呼ばれるまで気付かなかった。
もうすぐ、デンチも終わりそうだったから丁度よかった。

……となると、1時間半くらい動いてたわけか。
まぁ、残量3分の1のデンチじゃそれくらい持てばいい方か。

とりあえず、また充電しないとだな。

そんなことを考えて、ピットに戻る。
そこには既に、簪と布仏さんの二人とデータウェポンたちがいた。
「……お疲れさま、如月君。」
そう言って、スポーツドリンクとタオルを渡してくれる簪。
「おう、サンキューな。」
お礼を言って、それらを受け取る。
うん、適度にぬるい。
冷たいのを一気に飲むと身体によくないからな。
その辺も考えてくれたんだな。
「ぷはぁっ。二人は、これからどうする？
整備始めたのが昼過ぎくらいだったし、もうそろそろここも閉まるだろ？」
そう聞く。
二人はどうしようか、といった表情で考えてる。
ふと、簪が何かを思いついたような顔をして、ちょっとだけ顔が赤くなった。
そして、
「……も、もし良かったら。……如月君の、部屋に行きたい……。」
と小さいけどはっきり聞こえる声でそう言った。

「別に構わないぜ？」

「……本当？」

「ああ。ただ、こいつらをこのままの大きさにするのはちょっとまずいから……。」

簪に返事をして、データウェポンたちのほうを向く。

そして。

「データウェポン、ホログラムモード」

とコマンドを入れる。

すると、データウェポンたちが半透明になって、尚且つ手のひらサイズの大きさになった。

ちなみに、ホログラムモードとは言えちゃんと触れるぞ？

現に、今ユニコーンが簪の手のひら、ドラゴンが簪の頭の上、バイパーがオレの左肩に載っている。

「オレは更衣室で着替えてから行くから。

待ち合わせは……、ここのアリーナの入り口でもいいか？」

少し汗をかいているから、早く着替えたかった。

正直、ちょっと気持ち悪い。

「……うん、大丈夫。」

「ねーねー、きーくん。私も行っていいかなー？」

「ん？もちろん。簪も、それでもいいか？」

「……、わかった。」

……なんだろう、今、もの凄く簪が不機嫌になった様に見えたんだが、気のせいか？

「じゃーじゃー、後でね、きーくん。」

そう言って、ドラゴンを頭に載せたまま簪の手掴んで引っ張っていく布仏さん。

ユニコーンは慌てて空中に飛んだぞ。

あの二人も、色々言いながら仲良いんだな。

さて、と。

早く着替えて、二人のところに行きますか。

そう思って歩き出した。

更衣室に向かう途中。

「……バイパー、腕締めるのやめてくれ。」

落ちない様ににしてるのはいいが、少し左腕の感覚がなくなってきたぞ……。

―アリーナ入り口―

私は、アリーナの入り口で本音と一緒に如月君が来るのを待っている。

その間、私はさっきのことを考えてた。
うぅ、あぁ、言っちゃった……。

「如月君の部屋に行きたい」って……。

変な風には思われてない、……よね？

最初は、彼のクラスの代表を決める戦いで、だったと思う。
放課後、少しだけ興味があって観に行って。

彼のＩＳがロボットアニメのものみたいで、とてもかっこよくて。
武器も無しで、あの代表候補生を倒してしまって。

そんな彼が気になって、放課後にもう一人のクラス代表の織斑一夏の特訓をしてるところを
覗きに行った事がある。

彼は、片づけを引き受けた後、自分の青いＩＳを起動して一時間近く動いていた。

その中で、私に気付いてくれた。
暗かったし、ＩＳのセンサーにも見つかりにくいところにいた筈なのに。
その私に、話しかけてくれた。
その日から、だと思う。
どうして如月君の前だと、あんなに緊張するの？
もっと、話をしてたい。
でも、彼と向かって話せない。
もっと、彼を見ていたい。
でも、まっすぐ彼を見れない。
この気持ちの矛盾はなんなんだろう……？
もしかしたら。
私は。
彼の、如月君のことが。
す――――

「悪い、待たせたか？」

「！！！！」

その一言で、思考に入っていた状態から、現実に引き戻される。
そこにいたのは、さっきまで考えていた意中の人。

――――如月、北斗君、だった。

―アリーナ通路―

ちょっと、時間食った。

着替えて荷物を整理してたら、バイパーがかまって欲しそうに腕に巻きついてくるから、
うまく出来ないし。

今は、離れてくれてオレの傍を飛んでいる。

「さて、簪たちは、っと。」

そう考えながら通路を入り口方面に進む。

しばらく行くと、

「あ、きーくん。」

「布仏さん、何でここに？」

布仏さんと出くわした。

ドラゴンが頭に載っているのは、布仏さんに懐いてる証拠か？

「ん～？ん～とね～、お手洗い～。」

「あ、そっか。トイレってここよりも向こうなんだっけ。」

「そ～いうこと～。じゃあ、ちょっと行って来る～。

あ、かんちゃんと先に行っててていいよ～。きーくんの部屋は、１０２６だよね～？」

そう言って、いつものゆっくりした動きで奥に行った布仏さん。

毎回思うけど、よくアレで授業に間に合うよなぁ……。

そして、ようやく簪がいる玄関に着いた。

「悪い、待たせたか？」

そう言って話しかけると、

「！！！！」

もの凄く驚かれた。

ん、あぁ、なんだ。考え事でもしてたのか？
「ゴメンゴメン、驚かせたか？」
「……大丈夫、考え事。してただけだから。」
やっぱり、そうだったか。
ちょっと、悪い事したな。
「そうか。それじゃ、いこうぜ。」
そう言ってオレは歩き出す。
簪は、何も言わずに付いてきた。
途中で布仏さんがいない事に気付いたのか、
「……如月君、本音は？」
そう聞いてきたから、
「ん？あぁ、トイレだってさ。途中で会って、先に行っててていいとさ。」
「……そ、そう。」
って答えた。
嘘は言っていない。
でも、俺がそう言ったら簪の顔が少し赤くなってたけど、何でだ？

その後も、ＩＳについての事とか授業についての事を話していたら、オレの部屋の前まで来ていた。

「っと、鍵は、……閉まってる。深音、まだ帰ってないのか。」

それとも、買い物行ったまま凰さんかセシリアの部屋にでも行ってるのか？

まぁ、いいや。

オレは鍵を開けて、簪に入るように言った。

その後簡易テーブルとイスを出して、簪に座るように言った。

ユニコーンは簪の膝の上、バイパーは机の上に乗っている。

テーブルを出した後、

「コーヒーと紅茶、それとココアがあるけど、何がいい？」

と簪に聞いた。

「……えと、ココアで。」

「了解。」

簪から飲みたいものを聞いたオレはキッチンへ入って、コップを出してココアを作る。

オレはコーヒーに角砂糖を2個入れたものを作った。

「お待ちどうさま。」

「あ、ありがと……。」

そう言ってテーブルにおいて渡す。

簪は、それを少しずつ飲む。

「……おいしい。」

「ん、ありがと。」

それからまた他愛も無い話をしていると、

「きーくん、かんちゃん、遅くなったよ～。」

そう言って布仏さんが入ってきた。

相変わらず、ドラゴンは頭に載ったままだ。

おいドラゴン、いい加減降りて自分で飛びなさい。

「いらっしゃい。コーヒー紅茶ココア、何が飲みたい？」

「じゃ～あ～、ココアがい～な～。」

「はいよ。イスは空いてるところに座ってくれ。」

「ん～、りょーかーい。」

布仏さんにも飲みたいものを聞いて、それを作りにキッチンに入る。

あ、ココアの素が終わりそうだな。

今度、買いに行くか。

そんなことを考えて、布仏さんにも

「はい、お待ちどうさま。」

「わ～、ありがときーくん。」

そう言ってココアの入ったコップを渡した。

それからまた、布仏さんも加えた3人でしばらく話をしていた。

その途中。

「ねーねーきーくん。なんで私は名前じゃ呼ばないの～？」

そう言われた。

んー、何でだろ？

あんまり考えた事も無かったからな。

「何でだろうな？というか、本人にそう呼んでいいって言われたからって言うのがあるのかな？

箒――篠ノ之にしても、セシリア――オルコットにしても。」

多分、そうだろうな。

「じゃーあー、私も名前で呼んでいいよー。それか～、あだ名でもいいよ～。」

そう答えたら、案外あっさりと名前で呼んでいいと許しが出た。

他のクラスメイトは苗字で呼んでるけど。

名前で呼んだりしたら、大変な事になるだろうしな。

「ん、分かった、のほと――本音。これでいいか？」

「うん～、おっけ～。」

そんなやり取りがあってオレは、布仏さんの事を名前の”本音”と呼ぶようになった。

その会話の間、簪がちょっと怖かったのは、何でだ？

そして、3人と3体のお茶会は、寮の夕食が始まる時間まで続いた。

第8話～とある6月の休日。（後書き）

というわけで、休日の1コマでした。

のほほんさんとドラゴンフレアは、ぴったりな気が。

だって、二人とも子供っぽいし……。

簪とユニコーンも結構あってると思う。

湖畔の淑女とそれに付き添う愛馬、みたいな？

と思ってい書いてました。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などありましたら、

よろしくお願いします。

次回も、よろしくお願いします。

次はやっと、シャルとラウラだ！

第9話～転校生ラッシュ！（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回で、シャルとラウラが登場。

ついでに、オリキャラも追加です。

それではどうぞ。

第9話～転校生ラッシュ！

簪と本音と一緒に電童を整備した次の日。
まぁ、月曜日だ。

朝食を取っていると、周りの女子からチラチラと見られる。
何だ、何かしたか、オレ？

離れた場所で、何か話してる人もいるな。
なんなんだ、一体？

そんなことを思いながら箸を進める。
ん、鯖の味噌煮うまいな。

とのんきな事を考えていた。

この後、教室であんな事があると思いもしないで……。

―教室―

教室では、クラスメイトの女子達がカタログを片手に、わいわい話し合っていた。

「やっぱり、ハヅキ社製のがいいなぁ。」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」
「私は性能的に見てミューレイのがいいなぁ。特にスムーズモデル。」
「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん。」
そんな感じだ。
確か、今日からＩＳスーツの申し込み開始日だったっけ？
「そういえば、織斑君と如月君のＩＳスーツってどこの奴なの？見たこと無い型だけど。」
と、クラスの女子から聞かれた。
結構、答えにくいな。
一応、オレ、この世界の外の人間だし。
「あー。特注品だって。男のＩＳスーツが無いからどっかのラボが作ったらしいよ。
えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる。」
「オレも似たようなもんだよ。どこのがもとなのかは忘れたけど。」
その答えに納得したのか、女子達はまた会話に戻っていった。
「なんというか、俺たちには分からないな。」
「そうだな。オレだったら、多少使いづらくても安いので済ますか

な？
生活費に回せないと困るし。」
そんな会話を一夏としていると。
「それでも、自分に合った物を見つけるのは大事ですよ、如月君？」
そう言って山田先生が入ってきた。
おっと、もうＳＨＲの時間になるのか。
オレは席に着いた。
その間、山田先生はあだ名をいくつか呼ばれて、あたふたしていた。
そして。
「諸君、おはよう。」
「お、おはようございます！」
我らが担任、織斑先生登場。
それに伴って、教室の中が一気に静まる。
これはほんとに、さすがとしか言いようが無い。
まぁ、騒いだら出席簿アタックを喰らうからなんだろうけど。
あれって、ほんとに痛いんだよなぁ……。
「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。

訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。
各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。
忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。
それもないものは、まぁ下着でも構わんだろう。」

織斑先生、いつも思うけど容赦ないです。
ＩＳスーツや指定水着の無い女子に下着で受けさせようとするとか。

しかし、水着ねぇ……。

何でかここの指定の水着ってスク水なんだよな……。
深音が入学する前に制服とかと一緒に来たときはもの凄く驚いたな。

深音も、まさか高校生になってまで着るとは思わなかったのか、顔真っ赤だったし。
そう思っていると、

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ！」

そういわれて、慌てて眼鏡を掛ける山田先生。
どうやら、話している間に眼鏡を拭いていたらいきなり自分に戻ってきたからだろうな……。

だけど、次の一言にオレは耳を疑った。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「「「「えええっ！？」」」」

さすがに、オレも声を出さずにいられなかった。
この短い間に、転校生が3人も来てるんだぞ？

あ、ちなみに3人のうち1人は凰さんな。

多分、一夏も同じようなことを考えている気がする。
そう思っていたら、教室のドアが開いた。

その瞬間、クラスが静まった。
なぜなら。

「失礼します。」

「……。」

――入ってきた二人の内、一人が男子だったからだ。

入ってきた二人の内、一人はオレや一夏と同じ制服を着ていた。
エメラルドの瞳に、濃い金髪を首の後ろで丁寧に束ねている。
男子としては、若干小柄な方だろう。

もう一人の制服は軍服みたいに改造されている。
腰近くまで伸びた銀髪、左目に付けられた眼帯。
纏っている雰囲気から、軍人だろうという事がわかる。

そして。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。
この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします。」

と挨拶をした。
全員が、呆気に取られている。

誰かが、いち早く我に帰ったのか、

「お、男……？」

と呟いた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

と説明していると。

「きゃ……。」

「はい？」

と、女子の出した声にデュノアが首をかしげた。
オレと一夏は即座に顔を見合わせ、耳をふさぐ。
何気に、深音も同じタイミングで耳をふさいでいた。

そして。

「きゃあああああぁぁーーーー！」

と、女子達の嬉しそうな叫び、いやもう、咆哮か。
それが耳をふさいでいたのに頭に響いた。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～！」

って言って嬉しそうだな。
それにしても、なんでそんなに元気かなぁ？

やっぱり、女子はよくわからねぇ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ。」

そうめんどくさそうにぼやく織斑先生。
……教師がめんどくさがっていいんですか？

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

と、山田先生必死の大声。
うん、もう一人居るのは判っています。

でも、そのもう一人の雰囲気がかなり冷たい。

まるで、氷のよう。

それも、絶対零度の。

「……挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

織斑先生にそう言われた彼女は、佇まいを直し素直に返事をする。
言われた織斑先生は、まためんどくさそうな表情をして、

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。
私のことは織斑先生と呼べ。」

「了解しました。」

そう返事をし、また軍隊調の整列みたく姿勢を整える。

ん？
一夏が何か考えてる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

「……。」

そう言って、また沈黙する。
流石に、耐え切れそうも無いな、この沈黙は。

そう思ったのか、山田先生が

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ。」

と、一言で斬捨てられた。

あそこまで行くと、もはや何て声を掛けたらいいんだろう。

……落ち込んでいる山田先生に、だが。

そう思っていると、ボーデヴィッヒが一夏に近づいていく。

オレは、通路を挟んで一夏の左隣の席だから必然的にボーデヴィッヒもオレの横を通る。

一瞬、一夏とボーデヴィッヒの目が合った。

「！　貴様が――」

そう言って、彼女が腕を振り上げ、それを一夏に振り下ろす。

が。

その腕が一夏に届く前に、俺が掴んで止めていた。

「……貴様、何のつもりだ？」

そう言って、睨みつけてくる。

眼帯に隠されていない、冷たい赤い右目がオレを映す。

オレも負けじと睨み返す。

「それは、こっちの台詞だ。初対面で人の友達(ダチ)をぶん殴ろうとするのを止めて何が悪い？
初対面の相手を殴るのが、ドイツの常識なのか？」

「……ふん。」

オレがそう言うと、オレの腕を振り払って後ろのほうの空いている席に着くと、
腕を組んで目を閉じ、全く動かなくなった。

なんなんだ、あいつは……？

「あー、……ゴホンゴホン！　では、ＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。
今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

という織斑先生の指示で、朝のＨＲは終わった。

何はともあれ、クラスメイトが二人増えたのだった。

しかし、それは一組だけではなかった。

―二組　教室―

一組の教室から、大きな黄色い咆哮が聞こえた。

でも、うちのクラスもそれなりに大きな声を出していた。

なにせ、転校生が来たんだから。

「えっと、スウェーデンから来ました、シュテル・ビアズリーです。一応、代表候補生で専用機持ってます。これから、よろしくお願いします！」

そう言ってその声の主はきっちり４５度でお辞儀をした。

サファイアのような澄んだ青い瞳に、背中に届くか届かないくらいに伸ばした亜麻色の髪を
サイドポニーにしている、活発な印象の女の子。

身長は、あたしと同じか少し彼女の方が低いと思う。
な・の・に、どうして胸が大きいのかしら？

そんなことを思っていると。

「ビアズリーさんは、凰さんの後ろの席に。
というわけで凰さん、彼女にが分からない事などは色々教えてあげてください。」

担任にそう言われた。

「じゃあ、ＳＨＲは終わり。次の授業は一組と合同ですので、着替えて移動をしてください。」

そう言って、担任は出て行った。
さて、とりあえず。

「あたしは、凰鈴音。中国代表候補生よ。よろしく、ビアズリーさん。」

「あ、はい！よろしくお願いします、凰さん！」

そう言って、改めて挨拶を交わしたあたしたちだった。

こうして、二組のクラスメイトが一人増えた。

―一組側　廊下―

現在、オレ、一夏、デュノアは廊下を全力で走っている。

理由は、次の授業はＩＳでの実戦訓練。

つまり、男子であるオレたちは空いている更衣室まで行かなければいけない。

織斑先生からも、

「おい織斑、如月。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。」

そういわれている。

まぁ、オレたちもそう思っていたわけで。

「君たちが織斑君に如月君？　初めまして。僕は――」

デュノアが改めて自己紹介をしようとしたところで、一夏がさえぎって言う。

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。行くぞ、北斗！」

「分かってる！」

とりあえず一夏が先導、オレがデュノアの手を引いてそれに続く。

その途中で、

「ＩＳの実戦の授業とかで着替える必要があるときは、男子はその日空いているアリーナ更衣室で着替えになる。これ、毎回だから早く慣れてくれな？」

「う、うん。」

デュノアに走りながらそう説明する。

そして、一夏の先導の元、デュノアの手を引いたまま階段に向かおうとする。

でも、ＨＲが終わった途端に話題の転校生のデュノアを一目見ようと、同級生・上級生問わずに廊下に殺到してきた為、今の状況に至る。

しかも、どんどん人数が増えていく。

これは、遅刻するかも。

そう思ったオレは、最終手段を使うことにした。

とりあえず……。

「デュノア、ちょっとゴメン！」

「な、何！？」

そう謝って、デュノアを抱きかかえる。

そしてそのまま、開いていた窓からジャンプ。

「「「……。えええぇぇぇぇっ！？」」」

「キャアアアアアァァァッ！？」

ちなみにここ、二階。

そんなところからいきなり飛び降りたんだ、そりゃ怖いだろうな。

……抱えられているデュノアが、だが。

そのおかげで、腕が首に回されて危うく締め落とされるところだった。

一人なら何とか平気だろうけど、デュノアを抱えたままだと最悪骨が砕ける。

普通なら、な。

オレは抱えているデュノアの悲鳴を聞きながら電童の左腕だけを部分展開し、

バイパードライブをインストール、そのままクラッシャーファングを屋上の柵めがけて射出した。

そのまま、ワイヤーを巻き取るようにしながら減速して地上に降りる。

そして、抱えていたデュノアを降ろす。

「む、無茶するんだね……。」

「そりゃ、織斑先生の出席簿アタックは喰らいたくないからな。急ごう。

今日空いているのは、第二アリーナだから。走るけど付いてきて。」

「わ、わかった。けど、彼はどうするの？」

そう言って、二階の窓を走りながら見るデュノア。

そこには、一夏がいた。

「デュノア、時に戦場では犠牲は付き物だ。

だから、一夏には潔く織斑先生の出席簿アタックを喰らって頂こう！」

「い、意外と冷たいというか、容赦ないんだね……。」

「こういう時だけだぞ？」

そんなことを話しながら第二アリーナに向かって走る。

そして更衣室に着き、着替え始める。

「強引にショートカットしたから少し余裕あるな。」

と言いながらも制服のボタンを一気に外し、一気に脱いでそのまま上半身裸になる。

いきなりデュノアが、

「わあぁっ！」

と叫び声を上げるから驚いた。

「ど、どうした？　何かあったか？というか、着替えないのか？早くしないと遅れるけど……。」

「う、うんっ？き、着替えるよ？でも、その、あっち向いてて、……ね？」

「？　まぁ、人の着替えはあんまり見る気は無いからいいが……。そう言うデュノアは、オレのこと見てないか？」

「み、見てない！別に見てないよ！？」

そう言って慌てふためくデュノア。

まぁ、見られたくない傷でもあるんだろ。

特に気にすることなく着替え始めた。

もちろん、デュノアとは反対方向を向いて。

オレが着替え終わるのと同じくらいにデュノアがＩＳスーツのジッパーを上げ終わった。

「じゃ、行くか。」

「うん、そうだね。」

そう言って更衣室から出て走り出した。

強引なショートカットをしたおかげで、オレとデュノアは間に合った。
が、置き去りにされた一夏は間に合わず、出席簿アタックを喰らっていた。
「ひでーぞ、北斗。置き去りにしやがって。」
「デュノアを転校初日から遅刻させるわけにはいかないだろ？
そのための緊急手段だ。オレは悪くない。」
「オイ！」
小声でそんなやり取りをしていると、
「随分ゆっくりでしたわね？
どうしてスーツを着るだけでこんなに時間が掛かるのかしら？」
一夏の隣のセシリアが話しかけてきた。
聞かれた一夏は。
「道が込んでたんだよ。あと、北斗に置き去りにされた。」
そう言ってオレを指差した。
「ウソおっしゃい。いつも間に合うくせに。」
「そうだぞ一夏。ウソはやめろよ。」
「お前のせいだろ！？」

セシリアの台詞に便乗して一夏をからかってみた。
……意外と、面白いな。
「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方と縁が多いようですから？
そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんよね。」
確かに、それは言えてる。
先月は凰さん、今回はボーデヴィッヒ。
まぁ、流石にボーデヴィッヒはいきなりすぎたから止めたけど。
「なに？アンタまたなんかやったの？」
いきなり会話に入って来たのは、一夏の後ろに居た凰さん。
今日は二組と合同だから、まぁ居てもおかしくないな。
こんなに近くとは思わなかったけど。
ちなみに深音は、列の先頭の方だ。
「こちらの一夏さん、今日来た転校生にはたかれかけましたの。」
「はぁ！？一夏、アンタなんでそう馬鹿なの！？」
と言って騒いでいるセシリアと凰さん。
「――安心しろ。馬鹿は私の目の前にも四人いる。」
そう言割れて振り向くと。

そこには右手に出席簿を持った織斑先生が。

四人って言ってたな……？

えぇっと、凰さん、セシリア、一夏、……オレもか！？

バシィィーーン！

と、間に合っていたのに結局出席簿アタックを喰らったオレだった。

第９話～転校生ラッシュ！（後書き）

というわけで、次回はｖｓ山田先生になります。

またバトル……うまく書けるか心配です。

すぐに続きます。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘など、お待ちしています。

第１０話～授業の模擬戦、そして思うこと。（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回は、戦闘です。

山田先生、可愛い……。

作者の戯言は置いといて、本編どうぞ！

第１０話～授業の模擬戦、そして思うこと。

二組との合同でのＩＳの授業。

「では、本日から格闘および射撃を含む実戦訓練を開始する。」

「はい！」

と、織斑先生の号令の下授業が始まる。

が、目の前ではセシリアと凰さんが頭を抑えている。

理由は、授業の開始前にオレ含む４人で話していた。

それが織斑先生に見つかり、出席簿アタックを喰らったから。

叩かれた内、セシリアと凰さんは……。

「くぅっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

とぶつぶつと言っていた。

オレは、とりあえず我慢していた。

でないと……。

「今日は戦闘を実演してもらおう。

ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！　オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ。」

……こんな事があるからだ。

オルコットは、完全にとばっちりだな。ご愁傷様。

「それから、如月！　ビアズリー！　お前達もだ。」

……。

「お、オレもですか！？」

やばいなー。

オレもとばっちりじゃん。

って、ビアズリー？

聞いたこと無い名前だな。

そう思ってキョロキョロ探していると、

「あ、あの～……。」

「？」

オレの斜め後ろ、丁度凰さんがいたところの近くに居た女子が話しかけてきた。

もしかして……。

「キミが、ビアズリーさん？」

「は、はい！　今日二組に転校してきたスウェーデン代表候補生、シュテル・ビアズリーです！」

そう言ってお辞儀をするビアズリーさん。

亜麻色の髪に澄んだ青い瞳。

身長は、女子ではかなり低い方だと思う。ボーデヴィッヒ位か？

そのせいもあって、どちらかというと、『綺麗』というよりは『可愛い』方の部類に入るな。

何か、小動物っぽいし。

「えと、よろしくお願いします！」

「おう、こちらこそ。」

そう言って握手した。

で、凰さんとセシリアはというと……。

「だからってどうしてわたくしが……。」

「一夏のせいなのになんでアタシが……。」

まだぼやいていた。

とそこへ織斑先生が何か吹き込んだみたいで、

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まぁ、実力を見せるにはいい機会よね！　専用機持ちの！」
いきなり態度が１８０度変わったんですけど！？
一体、何を吹き込んだらああも態度が変わるんだ……？
「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが。」
「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ。」
「慌てるなバカども対戦相手は――」
とそこへ。
キィーーン、という音がこっちへ近づいてくる。
「あああぁーーっ！どいてくださぁーい！」
この声は、山田先生か……。
オレは電童を起動して、突っ込んでくる山田先生の着弾地点に行く。
そして。
ドカーン！
と音がして山田先生が落ちてきた。
俺が下敷きになって、何とか山田先生が地面に直撃するのは避けられた。
まぁ、突っ込んできた勢いが良かったから、少しアリーナの地面

がへこんでいるけど。

「痛たたた……。……って、如月君！？」

「あ、はい。大丈夫ですか？」

「はい、私はなんとも……。」

それなら良かった。

ＩＳを展開してるからケガは無いだろうけど、それでも、な。

「と、ところで山田先生……。」

「え、っと、なんでしょう？」

「あの、む、胸、当たってるんです、が……。」

そう。

今のオレは、山田先生に押し倒されているような状態で、腹の辺りに山田先生の大きい胸が当たっているんだよ……。

でも、山田先生がどいてくれないから動けないわけで。

「あわわわ、ご、ごめんなさい！」

大慌てでオレの上からどく山田先生。

「いや、重くなかったからいいですけど……。」

そう言って立ち上がり、電童を解除する。

と同時に、
ドゴッ！
と後頭部に衝撃。
あ、これは多分、深音のドロップキックだ。
そう思いながらオレは2メートルほど吹っ飛ばされた。
久々に喰らったな、アレ。
「……、ふん。」
あぁ、かなり機嫌損ねたな。
後で、何かで許してもらおう。
そう思って列に戻った。
「だ、大丈夫なんですか！？」
戻るなり聞いてきたのはビアズリーさんだ。
「ああ、平気平気。」
実を言うと、無茶苦茶痛い。
だけど、彼女に心配させないように明るく言う。
「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ。
如月とビアズリーは凰とオルコットの後だ。」
「え？　あの、二対一で……？」

「いや、流石にそれは」

「安心しろ。今のお前達ならすぐに負ける。」

負けるといわれた途端、やる気が出た二人。

何というか、単純だな。

「では、はじめ！」

その号令と同時にセシリアと凰さんが飛び出し、一拍置いて山田先生が飛ぶ。

「手加減はしませんわ！」

「さっきは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

あー、アレなら確かに負けるな。

二人とも、頭に血が上りすぎ。

ちなみに、山田先生は元代表候補生だったらしい。

さっき、織斑先生が言っていた。

あ、そういえば、オレとビアズリーさんもあの二人の後でやるんだっけか。

だったら、今の内に。

「なぁ、ビアズリーさん？」

「はい、なんでしょう？」

オレが聞くと、かわいらしく首を傾げるビアズリーさん。

一瞬面食らったが、すぐに本題を切り出す。

「ビアズリーさんのＩＳって、タイプはどんな感じ？

とりあえず、近距離型か中遠距離型かでどちらかといえば、どっち？」

そう聞かれ、腕を組んで考えるビアズリーさん。

「うーん、どちらも出来るといえばできますし、出来ないといえばできないですね。

如月さんのは、どちらなんですか？」

「あぁ、オレのは近距離オンリー。だから、どうやって戦術組めばいいのかなぁ、と思って。」

そう。

山田先生に勝つ、または勝てないまでも追い詰めるにはオレたちだと経験が足りない。

じゃあ、どうするか。

そうなると、戦術面かスペック面で上回るしかない。

そして、今のセシリア・凰組対山田先生を見ていると、

機体スペックの差は技術で埋められて居るから意味が無いと思う。

そうなると、戦術を組むしかない。

しかし、どんな戦術を組めばいいのか。

そう思っていたら、凰さんとセシリアが撃墜されていた。

どうやら、山田先生の射撃がセシリア、凰さんを誘導。
二人がぶつかったところで、グレネードを投擲。
それで落ちたらしい。

当の二人は、お互いの悪いところを言い合って喧嘩している。
仲がいいのか悪いのか分からないな……。

「それでは、次！　如月、ビアズリー！」

そういわれ、オレは電童を起動。
青い全身装甲（フル・スキン）に身を包む。

ビアズリーさんも。

「行こう、サラスヴァーテイン！」

そう言ってＩＳに身を包む。
赤紫の装甲に銀色の関節。

彼女のＩＳは全体的に流線型で、特徴的なのは右腕と左腕の形が違うこと。
右腕は攻撃用なのか、手首から先が自由に使えるように腕に装着式のマシンガンが付けられている。

逆に左腕は防御用らしく、左腕を覆えるくらいの大きさの両端のとがった楕円状の装甲になっている。

傍から見れば、盾に見えるような外見だ。

そして、左手のマニピュレータは通常の五本指ではなく、親指、人差し指と中指、薬指と小指で一つになった三本指のマニピュレータになっている。

脚部は踵が無く、着地するときには補助用のクローが出るようになっている。

それにしても、他のＩＳに比べて分厚い脚部装甲だな。何か武装でも入っているのか？

そして、彼女の両肩と背中に浮かんでいる計３つの大型のバーニア。

それに取り付けられた、武器となるユニット。

それぞれ、背中のものに剣状のものが３つ、右肩のものに盾形のが４つ、左肩のものに銃型のが４つ。

このユニットを取り回して武器にするそうだ。

もちろん、分離して浮かべたままセシリアのビットみたいに使うことも出来るらしい。

……剣がひとりでに飛んでくるとか、夜だったらものすごい怖いんだけど。

そして、オレとビアズリーさん、山田先生は位置につき。

「では、はじめ！」

開始の合図と共にビアズリーさんと別れて飛ぶ。

とりあえずオレが前衛、彼女が後衛の役割だ。

「行きます！」

とりあえず、接近を試みるけど……。

「ふふっ、そう簡単にはいきませんよ？」

そう言ってアサルトライフルでの射撃で近づけさせてもらえない。

何とかビアズリーさんの援護射撃で離脱は出来たけど、それでもまだ先生の射程には入ってる。

『ねぇ、ビアズリーさん。何か、目くらましか視界を遮れるような物って無いかな？』

そうプライベートチャネルで話しかける。

そうしている間も、山田先生からの射撃は続く。

それをかわしながら作戦会議中。

ビアズリーさんも山田先生からの射撃をシールドビットで防ぎながら答えてくれる。

『は、はい。一応、脚部装甲内のミサイルポットに煙幕弾があったはずです。』

『よし、なら合図をしたらそれを先生に向かって撃って。そしたら、二人で一気に挟撃を！』

『了解です！』

そこまで言って、一回プライベートチャネルを閉じる。

そして、再び山田先生に接近する。

それでも、射線に誘導されて思うように動けないし近づけない。

そこへ、ビアズリーさんのソードビットが援護に入って先生の気を一瞬逸らす。

『今！』

『はい！』

そうビアズリーさんに指示を出してミサイルを発射させる。

それに気付いた山田先生は、自分に着弾する前にそれを全部打ち落とす。

……あの一瞬で２０発近く正確に山田先生に向けて撃ったビアズリーさんもすごいけど、

それを全弾冷静に撃ち落とした山田先生も充分すごいと思う。

さすが、現役代表候補生に元代表候補生って所か。

『さて、行くぞ！』

『はい！』

オレは無手のままタービンを回し、ビアズリーさんは右手を手刀の形にする。

すると、彼女の指先からビームが出る。なるほど、ビームクローを手刀に収束したのか。

そう思ったまま、左右から挟撃をかける。

「！！」

流石にこの煙幕の中二人同時攻撃は無いと思っていたのか、山田先生にオレたちの攻撃が直撃した。

だけど、オレたちの攻撃に弾かれた勢いでその場を離脱、すぐさま別のアサルトライフルを呼び出して反撃してくる。

それを避けながら、再びプライベートチャネルで作戦会議。

『ビアズリーさん、ビットって一度に何機迄なら動きながら操作できる？』

『う、動きながらですか！？　そうですね……。５つ、４つ、……ううん、３つが限界です。』

それを聞いてオレはまた考える。

動きながらだと３機か……。

さっきの攻撃が当たっているから、山田先生のＳ・Ｅ（シールド・エナジー）はかなり減っているはず。

それは山田先生の表情から明らか。

だとすれば、オレがすればいいのは……。

……よし、決まった。

『ビアズリーさん、オレが突っ込んで気を引くから、その間にライ

フルビットを指示する場所に！』

『わ、分かりました！』

そう言ってポイントを指示。

そして、お互いに動き出す。

なるべくビアズリーさんに意識を向けられないように接近しながら、

小刻みに動いてアサルトライフルの射線から逃げる。

そうやって動き回り、少しずつ、山田先生を誘導して行く。

そしてアリーナの中央よりややピットよりの位置に場所を移していく。

……ここだ。

そう思ったオレは突っ込んでいく。多少の銃弾はタービンの回転方向を変えて受け流す。

そのまま山田先生に零距離でタービンの回転を纏った拳を繰り出す。

「はああぁっ！」

「くっ！」

それを、近接戦闘用ブレードを呼び出して何とか逸らす山田先生。

でも、それが狙いだ！

『今！』

『はい！ライフルビット、砲身最大展開。……ファイア！』

オレが一撃を入れて逸らした隙に、事前に指示したポイントに設置したライフルビットでの三方向からの狙撃。

これなら、削りきれるはず……。

そして思ったとおり、山田先生のＩＳのＳ・Ｅはさっきの同時狙撃で削れたらしい。

つまり、オレとビアズリーさんのペアの勝ちだった。

戦闘が終わって、クラスメイトの居る場所に戻る。

すると、オレが降りた場所の近くに深音が走ってきた。

「……お疲れ様。はい、タオル。」

「お、おう。サンキュ。」

そう言ってタオルを受け取る。

「というわけで、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。

以後は敬意を持って接するように。」

そう言って織斑先生が締めた。

うん、確かにすごい実力だった。

凰さんとセシリアを機体の性能差があるのを技術でカバーして落

とし。

オレとビアズリーさんとも機体性能差があった上に連戦だったけど、

それを苦にしないでオレたちを後一歩まで追い詰めている。

そう思っていると。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、如月、哀元、凰、ビアズリーだな。

では、五人グループになって実習を行う。

各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？

では、分かれろ。」

ようやく授業の実習に入れた。

だけど、そういわれた途端に女子がオレ、一夏、デュノアの周りに集まってきた。

その後の織斑先生の一喝で静かになり、やっと授業が始まった。

その授業は、ボーデヴィッヒの班と一夏の班が若干遅れていたが、何とか授業中には終わった。

一夏の班は、なぜか女子が立ったままＩＳを解除してたけど、なんだったんだ？

と、そんなことを思って午前中のＩＳの実戦訓練が終わった。

一夏・デュノアと一緒に更衣室に行こうとしたら、デュノアに先に行ってて、

と妙な気迫で言われたけど何でだ？

そう思いながら、オレと一夏は更衣室に向かったのだった。

―昼休み―

一夏に誘われて、今日は屋上で昼食を取る事になった。

メンバーは一夏、箒、セシリア、凰さん、デュノアの５人と

オレ、深音、ビアズリーさん、本音、簪のこれまた５人。

もっとも、簪は本音が無理やり連れて来て、ビアズリーさんは凰さんに付いて来たんだけど。

一夏は箒、凰さん、セシリアに弁当を手渡されている。

無理やり押し付けられてるようにも見えるけどな。

何かもう、箒ｖｓセシリアｖｓ凰さん見たいな感じになってるな。

で、こっちはと言うと……。

「ねーねー、ビーちゃん。」

「ビーちゃん……、って私ですか！？」

「んー？そだよ～？」

本音がビアズリーさんと話していた。

どうやら、あだ名は”ビーちゃん”に決まったらしい。

その隣では、

「で、彼がここから巻き返していくの。」

「そうなんだ……。でも、私はこっちの方が好き、かも。」

簪と深音が最近やっている深夜アニメの録画を見ながら話していた。

この二人も、最近仲良くなってきたな。

よかったよかった。

で、その輪から外された感じのあるオレは、デュノアと話していた。

「みんな楽しそうだね。本当に僕が同席してもよかったのかな？」

「ん？いいんじゃないか？まだ来たばっかで慣れてないだろうし。まぁ、分からない事があったら、オレなり一夏なりに聞けばいいさ。出来る限り協力するさ。」

「ありがとう、北斗って優しいんだね。」

といきなり無防備な笑顔で言ってきた。

正直、かなりドキッとしました。

「き、気にしなくていい。多分、オレか一夏がルームメイトになるだろうし。」

「……え。そう、なの？」

と聞いてきたのは、いつから聞いていたのかは分からないが簪だ。
じっ、と無表情に見つめてくる。
その隣で、深音もそれが気になるのかチラチラとこちらを見ている。

そう。現在、オレは一人部屋となっている。
理由としては、一夏の部屋の箒と同じく、ようやく部屋の調整が終わって空きが出来たらしく、
そっちの方に昨日深音が移って行ったからだ。

昨日の夕方深音が居なかったのは、買い物の後で新しい部屋に荷物を移動していたからしい。
ちなみに、一人でやったのかと深音に聞いたら、山田先生が手伝ってくれたみたいだ。

後で山田先生にお礼を言っておかないと。
そう考えてから、

「ああ、男子はオレか一夏しか居ないんだし、必然的にそうなると思う。」

と簪に答えた。

「……そう、なんだ……。」

……なんで簪は残念そうな顔をしているんだ？
よく見ると、本音と深音も同じような表情だ。

一人だけ状況が分かっていないビアズリーさんだけが首を傾げていた。
……リスみたいで可愛かったのは、余談だ。

―夜　一年生寮―

夕食後、オレの部屋に一夏とデュノアがやってきた。
食堂では三人の男子が一緒に居るということで、やたら人が集まってきたり色々と聞いてきたりで
抜け出してくるのが大変だった。
そして、男子同士でオレの部屋に集まったと言うわけだ。

「そういえば、まだキチンと自己紹介はしてなかったね。」
とデュノアに言われて、そうだと思った。
何せ、今日は転校生を一目見ようと近寄ってくる生徒がやたら居て、
移動中もほとんどあまり話せなかったからな。

「それもそうだし、今しておくか。オレは、如月北斗。北斗って呼んでくれ。」
「俺は織斑一夏。一夏でいいぞ。」
「うん、よろしく。僕のこともシャルルって呼んで。」

「おう。」

「わかった。」

そう言って、自己紹介を終えた。
ちなみに、シャルルと同室になったのはオレだった。

そしてしばらく雑談をした後、結構遅くなっていたから一夏は部屋に戻っていった。
と言っても、隣なんだがな。

「じゃ、改めてルームメイトとしてよろしくな、シャルル。」

「うん、こちらこそ。北斗。」

そう言って握手をした。
そういえば、これだけは決めておかないと。

「なぁ、シャワーの順番とかどうする？
男子は浴場が使えないから、部屋のを使うしかないんだが……。」

「だったら、北斗が先に使っていいよ。
僕はあんまり汗かかないほうだからそこまで気にならないし。」

そう言われた。
そう言われると、使いづらい気もするけど、まぁ、いっか。

「分かった。まぁ、あくまで二人部屋に居るときの事だから、
使いたかったらいつでも好きに使っていいから。」

「うん、ありがとう。」

そう言って、また笑う。

うーん、男子でこの笑顔は反則だと思う。

なんとなく女子の気持ちが分かった気がした。

「そういえば、一夏って放課後特訓してるって聞いたんだけど。そうなの、北斗？」

「ん？　あぁ、本当だぞ。

今は箒、セシリア、凰さんの3人誰かと戦闘、オレと深音がそれを見てアドバイスって感じだな。

……ただ、どうにもあの3人の説明じゃ分かりにくいんだけどな。」

今日はシャルルの荷物の運び入れがあったから無しにしたけど。

そう思った後、3人の説明の仕方を思い出して少し笑う。

何せ箒は擬音で、凰さんは感覚で、セシリアは理詰めで、しかも同時に言ってくるからなぁ。

「じゃあ、今度から僕も参加してもいいかな？

専用機もあるから役に立てると思うし、何かお礼がしたいし。」

「ああ、いいんじゃないか？少なくとも、あの3人の説明よりは一夏が理解できそうだ。」

シャルルであれば同じ男子だからあの3人も（多分）嫉妬で喧嘩はしないだろう。

そんなことを思いながらオレはベッドに入った。
そして、シャルルも同じくベッドに入る。

「じゃ、電気消すぞ？」

「うん。おやすみ、北斗。」

「ああ。おやすみ、シャルル。」

寝る前の挨拶をした後、電気を消した。
今日は授業での模擬戦があったから疲れてたみたいで、電気を消したらすぐに睡魔がやってきた。

―夜　アリーナ―

私は、自分の中にいるもう一人と話していた。
ううん、ちがう。
彼女が出てこないよう、必死に押さえつけていた。

「やめて、出てこないで！」

『なんで？　何で私を拒むの？　わたし達は二人で一人。
あなたに友達なんてものは要らないんだよ。あなたには、わたしだけ居ればいいの。』

「やめて！！どうして私が掴もうとした大事なものを壊すの！？」

そう叫ぶ。
幸い、近くには誰も居ない。
『どうして？　決まっているわ。わたしがあなたを愛しているからよ。
そしてあなたには、わたし以外を見て欲しくないの。わたし以外と話して欲しくないの。
だ・か・らぁ……、さっさと体を貸しなさい！』
っ！
ダメ……。
彼女の意志が強すぎて、もう、抑えられない……。
「ったく、素直にはいと渡せばいいものを。てこずらせやがって……。
まぁ、いいか。さ・て・と、シュテルが大事と思った奴を、片っ端から壊してあげよう。
そうすれば、わたしだけを……、ルゥレアだけを見てくれるよね？」
私の意識は、彼女と――ルゥレアと入れ替わってしまった。
そして、瞳の色がサファイアのような青からルビーのような赤に変わる。
みんな……。
今日の朝、自己紹介から仲良くなった、凰さん。

今日の授業、一緒に組んで戦ってくれた、如月さん。

今日のお昼、話しかけてくれた、布仏さん、更識さん、哀元さん。

それを見て笑ったりしてくれた、織斑さん、オルコットさん、デュノアさん、篠ノ之さん。

今日出会った、とても大事にしたい、友達……。

みんな……、ごめんなさい……。

そして、私の意識は、深くに閉じ込められた。

……お願い！

……誰か、……助けて……！

……でも、私のその叫びは、誰にも届かなかった。

第１０話～授業の模擬戦、そして思うこと。（後書き）

やばい、今回ラウラが空気だ……。

次は、何とか出番が来るはずだ。

というか、作らないとラウラファンに申し訳ない……。

新キャラについては、２巻分が終わった頃に、

電童の詳細と共に紹介を作ります。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘がありましたら、お願いします。

ではまた次回！

第１１話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（前編）（前書き）

どうも、フュージョニストです。

今回は、１話としては結構長いです……。

では、どうぞ。

第１１話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（前編）

シャルルの転校から五日。
今日は、土曜日だ。

土曜は授業が午前中だけ。
午後は、完全に自由時間で、ＩＳアリーナも開放されている。

そのため、オレ、深音、一夏、シャルル、セシリア、凰さん、箒といつもの面々第三アリーナに居た。

さっきまでやっていた模擬戦を踏まえて、シャルルが一夏に銃火器についてレクチャーしている。
そこに、深音も加わってダメ出しをしている。

「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ。」

「……うん。ただ、知識として、頭の片隅においてあるだけ。」

と、二人から責められている。

「そ、そうなのか？一応、分かっているつもりだったんだが……。」

そう言う一夏の意見も、

「……”つもり”じゃ、これから先、ずっと負け続けるけどいいの？事実、さっきの模擬戦、シャルルに全く近づけずに終わってたけど。」

深音がばっさり斬捨てる。
深音は、こういうときは容赦なく相手の悪いところを言う。
……まぁ、後から良いところも言うからいいけど。
「それは僕も思ったかな。そう言う意味じゃ、北斗の方が動きは参考に出来ると思うよ。
彼、一夏よりもリーチが短いのに僕の射線を抜けて接近してきたからね。」
「……北斗と一夏の動きは、全く逆。一夏は直線的過ぎで、瞬時加速に頼りすぎ。
逆に北斗は相手の射線を読んで最小限でかわしたり防いだりした上で近づいてくる。
一夏も、あれ位できないとダメ。」
と二人がかりで言われて少し落ち込む一夏だけど、言われながらもどうすればいいかを
少しずつ自分で考えてる。
「直線的か……、うーん。」
「一夏、間違っても瞬時加速中は無理に方向転換とかしようとするなよ？
最悪、機体が壊れる上に骨が砕けるぞ。」
なんとなく一夏が考えている事がわかったので先に釘を刺しておいた。

「……なるほど。」

と、オレ・深音・シャルル3人の説明を聞いて頷く一夏。
後ろのほうでは、箒・セシリア・凰さんが何かぶつぶつ言いながらそれを眺めている。

ちなみに、オレたちのほかにもアリーナでは模擬戦やらISの調整が行われている。
それに、学園に3人しか居ない男子が纏めてここに居る。

それを一目見ようと殺到してきた人たちも居る。
そのため、アリーナは満員状態だ。

そう思っていると、

「一夏の白式と北斗の電童って後付装備(イコイライザ)が無いんだよね？」

シャルルがそう聞いてきた。
要は、機体に追加で装備された武器の事だ。

よくやっていたゲームで、ロボットの出てくるシュミレーションゲームがあった。
アレでは、使っていた機体にシナリオが進んで追加される装備がある。

多分、あれと似たようなものだと思う。

「ああ。何回か調べてもらったんだけど、拡張領域(パススロット)が空いてないらしい。
だから量子変換(インストール)は無理だって言われた。」

「オレも似たようなもんだ。」
オレの電童と一夏の白式は、少し特殊なＩＳだからな。
それは特に問題じゃない。
ただ、きついのは……。
「多分だけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ。」
「ワンオフ・アビリティーっていうと、……えーと、なんだっけ？」
と一夏が首をかしげ、シャルルがそれに答える。
ワンオフ・アビリティーは、機体と操縦者が一つになったとき初めて使える能力の事。
一夏の場合なら『零落白夜』、オレなら『ファイナル・アタック』だな。
「白式の場合は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事態だよ。
北斗の機体も、そんな感じなの？」
「いや、正確にはもうセカンドシフトしてる。
セカンドシフトして始めてこの機体の武器が開放されたからな」
「「それ、初めて聞いたぞ（聞いたよ）！？」」
「だって、初めて言ったし。」

そこまで言ってシャルルは冷静に戻ったのか、オレに聞いてくる。
「それで、北斗の機体のワンオフって？」
「ああ。簡単に言えば白式の零落白夜と似ている。
機体の残りエネルギーを全て攻撃に回す大技で荒業、名前は『ファイナル・アタック』。
直撃すれば、一撃で行動不能に追い込めるくらいに威力がある。」
「そんなに！？す、すごいね……。」
シャルルがものすごい驚いてる。
横では、一夏も唖然としてる。
今のは、いい所（メリット）しか言ってないからな。
「ただ機体の残りエネルギーを全て攻撃に回す上に、威力はエネルギーの残量に比例して上下する。
それに、文字通り最後の一撃だから外したが最後、エネルギー切れで墜落だ。」
「そ、それって、俺の零落白夜より酷くないか？」
やっと分かったか、一夏。
多分、シャルルは最初の説明でメリットの裏のデメリットも分かってたと思う。
「だからこそ、お前よりも出しどころを選ぶ必要があるんだよ。
エネルギー残量だって気にしないといけないし、どの武器でどのく

らいの距離から撃つとかな。」

「よ、よく分からんが、俺が悪かった……。」

そう言って落ち込んだ一夏。

「まぁ、無いものねだっても分かんない事考えても仕方ないんだ。今は、どうやって一夏に射撃武器の特性を分からせるかだな。」

「うん、そうだね。それなら、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ。」

そう言って一夏にアサルトライフルを渡すシャルル。

ＩＳの武器は、基本的に所有者しか使えない。

でも所有者が許可を出せば、許可を出された他のＩＳでも使うことが出来る。

それをシャルルが一夏に説明し、理解したようで一夏がそれを受け取る。

それを構え、シャルルがその構えを後ろから手をとって直していく。

そして、一夏が引き金を引いた。

「うおっ！？」

一夏は銃の反動に驚いたみたいだ。

「どう？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ。」

一夏にしては、いい感じだな。

シャルルもそう思ったようで、銃の特徴を挙げていく。

そして一夏は、自分が何で銃を持った相手にうまく切り込んでいけないのか、

ようやく理解して納得したみたいだ。

それを見ながら、ふと気になったので聞いてみることにした。

「なぁ、シャルル。お前のＩＳって、形的にはラファール・リヴァイブだよな？」

「うん、そうだよ。あ、一夏。腕が離れてきてるから、ちゃんと一回ごとに脇を締めて。」

それに対して一夏に注意をしながら答えるシャルル。

お前、ものすごく器用だな。

その後も、いくつか一夏にアドバイスをしてオレの質問に答えてくれる。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。

正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。

基本装備（プリセット）をいくつか外して、その上で拡張領域（パスロット）を倍にしてある。」

「倍！？そりゃまたすごいな……。少し分けて欲しいくらいだ。」

銃を撃ちながら聞いていた一夏が驚きながら言う。
シャルルは苦笑し、
「あはは。あげられたらいいんだけどね。そんなカスタム機だから、今量子変換（インストール）してある装備だけでも二十くらいあるよ。」
そう言った。
「うーん、ちょっとした火薬庫みたいだな。」
一夏が呟いた事に妙に納得した。
そして、一夏がシャルルから渡されたアサルトライフルのマガジンを使い切った。
そのとき、周りがざわめきだした。
「ねえ、ちょっとアレ……。」
「ウソッ、ドイツの第三世代型だ。」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……。」
みんなの視線の先に居たのは、黒いＩＳに身を包んだラウラ・ボーデヴィッヒ。
注目の的の本人は、一夏しか目に入っていないみたいだ。
万が一に備えて、ユニコーンドライブをインストールしておく。
「おい。」

この間の自己紹介、そして一言だけ話したときと同じように、冷たく、平坦な声だ。

「……なんだよ。」

一夏はものすごく無視したそうで、嫌々返事をしている。

当たり前だろう。

初見で、いきなり叩かれかけたんだから。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」

「嫌だ。理由がねえよ。」

「貴様には無くても私にはある。」

なんだ、これは。

言いがかりにも、程がある。

もしかしたら……。

そう思ったオレは咄嗟に、シャルルにプライベートチャネルで、

『シャルル、ボーデヴィッヒが動いたらフォロー頼む。』

『うん、了解。』

と短いやり取りをした。

さすがシャルル。

言いたい事は伝わったみたいで、いつでも動けるようにある程度

体の力を抜いている。
オレも、ボーデヴィッヒに気付かれないよういつでも動けるようにしておく。
「貴様が居なければ教官は大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。
だから私は貴様を――貴様の存在を認めない。」
シャルルとのやり取りの直後、ボーデヴィッヒの声が聞こえた。
何のことなんだ？
そう思って一夏のほうを見る。
一夏はオレの視線に気付くことなく、ボーデヴィッヒの方を見ている。
「また今度な。」
「ふん。――ならば、戦わざるを得ないようにしてやる！」
そう言った瞬間、彼女のＩＳの左肩のレールガンから弾丸が放たれる。
それを……。
「……ファイアー・ウォール！」
オレがユニコーンドライブ時のみ使うことが出来る特殊機能――ファイアー・ウォールで防ぎ。
「ふっ！」

シャルルがその上からボーデヴィッヒに向けてアサルトライフルを構え、威嚇射撃。

「……ふん。」

ボーデヴィッヒはそれを回避、少し離れた位置へ移動した。

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな。」

ボーデヴィッヒはレールカノンに次弾を装填。

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね。」

シャルルはアサルトライフルをもう一丁呼び出し、両手持ちに。

「おいおい、今はオレも居るんだぜ？」

オレは右腕のユニコーンドリルに直結しているタービンの回転を少し上げる。

そんな一触即発な空気が辺りを包む。

オレたちの周りからは、他の生徒達が逃げて離れていく。

正直、ありがたい。

ここに居られたら、多分巻き込むことになりかねないから。

にらみ合いが続いて、オレがシャルルに目配せをし、動こうとした瞬間。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

担当の教師が騒ぎを聞きつけてやってきたのか、スピーカーから声が響く。

「……ふん。今日は引こう。」

そう言ってＩＳを解除し、アリーナのゲートへと去っていった。

多分、彼女とは一度キッチリとケリをつけないといけないだろうな。

そう思って、オレとシャルルもＩＳを解除する。

「一夏、平気か？」

「ケガとか、してない？」

オレとシャルルが防いだから平気だとは思うが……。

そう思ったら案の定。

「おう、なんとも無い。ありがとな、二人とも。」

とのんきにお礼を言ってきた。

ま、これが一夏か。

そう思って時計を見た。

時刻は、午後四時。アリーナの閉館時間だ。
「……時間か。そろそろ上がるか。」
「そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった。」
「それならよかった。」
そう言って更衣室に向かうオレたち。
ただ、シャルルだけは、
「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて。」
と言って、着替えのときだけはオレたちと別行動を取る。
まぁ、人には色々あるからな。
「一夏、行くぞ。」
そう言って一夏の襟首を掴んで引きずっていく。
コイツは、ほうっておけばシャルルを無理やり連れて来そうだからな。
首が締まって一夏が落ちそうになってたのは、この際気にしない。
そして、更衣室に到着。
「北斗、何するんだよ……。」
そう言ってくるが、

「一夏。お前は無理やりシャルルを連れてこようとするなよ。
もし、誰にも見られたくない傷とかがあったらどうするんだ？
それをオレらに見られてショックを受けて、授業にも来なくなったらお前責任取れるのか？
……どうなんだ？」

とちょっと怒った風に言う。
多分、オレが一夏を止めなくても箒、セシリア、凰さんの３人が何とかするだろ。

ただ、今回だけは一夏の無理やりさにムカついただけだ。

「う……。そこまでは考えてなかった……。」

と言って落ち込む一夏。
全く、そう言うことを少しは考えて行動しろ、バカ。

そんなやり取りをして着替え終えると。

「あのー。織斑君と如月君、それからデュノア君は居ますかー？」

「あ、はい、織斑と如月だけ居ます。着替え終わっているので入っても平気ですよー。」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー。」

そう言って入って来たのは、声から分かるとおり山田先生。
わざわざここまで来たってことは、何か重要事項の連絡か？

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は織斑君たちと一緒に練習してるって聞きましたけど。」

「あ、まだアリーナの方に居ます。重要な話なら呼んできますけど。……一夏が。」

「そうですね……。って、俺かよ！？」

山田先生は一夏のノリつっこみに苦笑し、

「あ、いえ。そんなに大事な話でもありませんから、お二人から伝えておいてください。ええとですね――」

山田先生からの連絡事項は２つ。

１つは今月下旬から週二日、男子が大浴場を使うことが出来るようになるらしい。

これは一夏が山田先生の手を取って喜んでいた。

風呂好きなのか、コイツは。

２つ目は一夏に向けてだが、ＩＳの登録に関する書類作成だそうな。

オレか？

一応、転生者だから神様が何とかしてくれたらしい。

そんなやり取りをしていたら、更衣室の扉が開いて誰かが入ってきた。

振り向くと、シャルルだった。
「……二人とも？何してるの」
なんだろう。
心なしか、声が若干冷たい気がする。
「一夏は先生の手まで握って、ほんとに何してたの？」
「あっ」
言われて慌てて手を離す一夏と山田先生。
「北斗も。先に戻っててって言ったよね？」
「あ、あぁ。着替え終わったところで山田先生が来て、オレたちに連絡があるからって聞いてたんだ。」
ちょっとシャルルの雰囲気にゾクッとしながらも答える。
「そ、そうだ。喜べ、今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
「……そう。」
と一言だけ返事をして髪を拭き始めるシャルル。
なぜあんなに不機嫌なんだろう。
まぁ、いいか。
「あ、シャルル。オレ、ちょっと整備室寄ってから戻る。

だから、シャワー先に使っててくれ。」
「うん、わかった。」
そういい残して、整備室に向かった。
何で整備室に行くかって？
……ハイパーデンドーデンチの予備を充電してるからだよ。
整備室で簪と本音に捕まったのは余談だ。

―寮　自室―

「……。はぁ……。」
何で、あんな態度取っちゃったんだろ……。
きっと、一夏も北斗も面食らってるよね……。
何で、あんなにイライラしてたんだろう？
思い出したら、恥ずかしくなってきた。
……やめやめ、考えるのはよそう。
「（シャワーでも浴びて、気分変えよう……。）」
クローゼットから着替えを出して、シャワールームに行った。

服を脱いで脱衣所のかごに入れて、シャワーのハンドルを捻る。
少し熱いくらいのお湯が、気持ちよかった。
そしてシャンプーをつけて髪を洗って、泡を流してから気付いた
「あ、ボディソープ切れてたんだっけ……。」
どうしようか？
北斗、まだ戻ってきてないよね？
とりあえず、バスタオルで軽く体拭いてとりに行こう……。
そう思ってシャワールームの扉を空け脱衣所のかごに入れたバスタオルを取る。
それで軽く体を拭いて、胸を隠すように体に巻く。
大丈夫、だよね……？
そう思って、部屋に出る扉を開ける。
その瞬間、
「やっぱりデンチ重いわ……。」
そう言って、少し大きめなトランクっぽいものを持ちながら部屋に入ってきた。
当然、そこで鉢合わせる。
そして、視線が交わり。

「「あ……。」」

と二人同時に間の抜けた声を出した。

「〜〜ッ！！」

僕は、咄嗟にシャワールームに戻った。

ばれちゃった、な。

……僕が、”女”だってこと。

―数分前　廊下―

「全く、本音も簪もユニコーンやドラゴンで遊びすぎだろ……。
まぁ、あいつらも楽しそうだったからいいか。」

整備室に充電していた予備のデンチを取りに向かうと、本音と簪が
『打鉄弐式』のプログラムの調整をしていた。

それに気付いた本音がまたデータウェポンたちと遊びたいと言い
出し、
ドラゴンがホログラム体で飛び出して本音の周りを飛んで頭の上に
載ったりしてた。

ユニコーンも、簪の近くにホログラム体で飛んでいって撫でても
らってた。

十分位して、また今度遊ばせてやるからと言って整備室を出た。
右手に、デンチの入ったトランクを持って。
本音も簪も、データウェポンたちもかなり不満だったが、納得してくれた。

そして、今月末のトーナメントどうしようとか色々考えながら歩いてたら、
もう部屋の前についていた。

そういえば、シャルルは何で不機嫌だったんだ？
うーん、後で聞くのもなんだしなぁ～。

「やっぱりデンチ重いわ……」

そう呟きながら、部屋のドアを開ける。

それと同時に、シャワールームのドアが開く。
そして、出てきた人と視線が合う。

「「あ……。」」

そう言って、シャワールームから出てきた人が戻っていった。

「～～ッ！！」

バタンッ！

とシャワールームの扉が閉じた音がして、我に返った。
とりあえずデンチを置いて、ベッドに腰掛けた。

「（えっと、この部屋の鍵を持ってるのはオレとシャルルだけ。で、今のは女子だよな？
意外と、胸もあったし……。って、そうじゃなくて！）」

そんなことを考えていると。

ガチャ。

「！」

シャワールームの扉が開いて、さっき見た女子――シャルルが出てきた。

「あ、上がったよ……。」

「あ、あぁ……。」

シャルルの今の格好はジャージ。
ただ、今は胸のふくらみを隠すコルセットをしていないのか、女子特有の胸のふくらみがくっきりと浮き上がっている。

そしてシャルルが隣に腰掛ける。
それはいい、それはいいんだが……。

「……。」

「……。」

この、無言の時間がつらい。

と、とりあえず、だ。

「シャ、シャルル、何か飲むか……？」

「う、うん。お願いするよ……。」

そう聞いて、キッチンに入る。

何がいいか……。

落ち着けるよう、ココアでいいか？

そう思って、カップを二つ取り出し、ココアの粉を入れた後にお湯を注ぐ。

それをお盆に載せ、シャルルのところへ持っていく。

「はい、シャルル。」

「あ、ありがと……。」

ベッドの間に出した簡易テーブルの上にカップを置く。

それを一口飲んで、とりあえずお互いに一息ついた。

「落ち着いたか？」

「うん、ありがと。」

そう言うと、少しだけ笑って見せてくれた。

ただ、いつも見ていた明るいものではなく、どこか陰のある痛々しい笑顔だった。

「それで、聞いてもいいか？　何で、男装していたのかとか。」
「うん。実は、実家の方からそうしろって言われて」
「実家？シャルルの実家ってことは……。デュノア社……？」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
それから、シャルルの説明を聞く。
要約すると、こうだ。
シャルルは、デュノア社の社長の愛人の子供。
彼女の母が亡くなったために引き取られ、様々な検査のときにＩＳの適性が見つかったから
非公認でテストパイロットになったこと。
その後、デュノア社が経営危機に陥ったこと。
そのためにＩＳ学園に男装で送られ、広告の役割と特異データと接触を持つよう言われたこと。
つまり。
「一夏の白式、オレの電童。そのデータを盗ってこい、ってことか。」
「うん、二人の機体のデータを盗って来いって言われてるんだよ。僕は、あの人にね。」

そこまで言ってシャルルは一口ココアを飲んだ。
そして、こう言った。

「とまあ、こんなところかな。でも北斗にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。
デュノア社は、まぁ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな。」

と。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついててゴメン。」

そう言ってシャルルは深々と頭を下げていた。
それを見て、一つだけ聞きたくなってしまった。

「……お前は、どうしたいんだ？」

「どうって……、時間の問題じゃないかな。
フランス政府も事の真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生を降ろされて、
よくて牢屋とかじゃないかな。」

違う。
オレの質問の意味は、そこじゃない。

「お前自身は、何をしたいんだ？」

「……えっ？」

オレは、聞いておきたかった。
シャルルの本当の気持ちを。

だから、聞く。

「お前自身は、今、どうしたいんだ？
このまま親に言われるがままに操り人形になって、使い潰されて終わってもいいのか？」

「……そんなの！そんなの嫌に決まってる！でも、だからってどうすればいいのさ！？」

そう言って叫ぶシャルル。
オレに今出来るのは、

「どうすればいいか、か。それは、おまえ自身が決めるんだ。
お前は自身は、今、どうしたい？」

今はただ、そう問いかけるだけだ。

「……。」

その問いかけにシャルルは俯いた。

「一つだけいえるのは、親の命令だからって、逆らっちゃいけないなんて決まりは無い。
嫌ならいやと、思いっきりはっきり言ってやればいいんだ。」

オレの言ったその言葉に、シャルルの肩が震える。

それに、と言ってから暗記していたとある文章を言う。
「特記事項二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる
国家・組織・団体に帰属しない。
本人の同意が無い場合それらの外的介入は原則として許可されないものとする。」

そこまで言うと、シャルルはオレの顔を見る。

「……つまりは、ここにいる三年間はお前の親であろうと国であろうと口出しは出来ないって訳だ。
だから、納得する答えが見つかるまで、ここに居ろ。
ここにいる間なら、お前が答えを見つけるのを邪魔しようとする奴から守ってやるから。
例え、それがお前の親だろうが国であろうがな。」

オレもシャルルの顔を見て、最後の言いたい事を言う。

「……困ったなら、オレを頼れ。オレだけじゃない、深音や一夏や箒、セシリアや凰さんだっていい。
その時になったら、きっと助けてくれるからさ。」

そう言って、シャルルの頭を撫でてやる。
そうしていると、いきなりシャルルが抱きついてきて、オレの胸に顔をうずめた。

「シャ、シャルル！？」

思わず声が裏返りそうになる。

「……グスッ、ゴメン。し、しばらく、このままで居させ、て。ほく、とぉ……。
……うっ、うぅっ、うわあああぁぁぁん！」

そう言って、泣き出してしまったシャルル。
オレは、泣き止むまでずっと頭を撫でていた。

きっと、色々溜め込んでいたんだろう。
こうする事で、オレの言葉で、それが少しでも減らせるなら、いつだってこうしてやる。

しばらくして泣き止んだシャルルは、泣き疲れたのかそのまま眠ってしまった。
オレはシャルルをベッドに寝かせ、布団を掛けてやる。

一夏がセシリアと一緒に食堂に行かないかと誘ってきたが、寝ているシャルルを置いて部屋を出るわけにもいかず、そう言って今日は無理だと断った。

「そうか……。それじゃ、仕方ないか。また明日な。」

「分かりましたわ。では、行きましょうか。一夏さん。」

理由に納得したのか、そう言ってセシリアは一夏と腕を組んで食堂に向かった。
途中で、箒とも合流したみたいだな。

叫び声がここまで響く。

「さて、と。今日は食堂には行けないし、久々に何か作るか！」
今ある材料で作れるものは、っと。
それから一時間くらい料理をして、出来たものは……。
ご飯、豆腐とわかめの味噌汁、ほうれん草のおひたし、鮭の塩焼き、野菜炒め。
……これ、朝食向けのメニューな気がするが、気にしないで置こう。
そう思っていると、
「……ん、あれ？　僕、寝ちゃってたの……？」
どうやらシャルルが目を覚ましたみたいだな。
「ん、起きたか？　今、ご飯作ったけど、食べるか？」
「あ、うん、頂こうかな。」
そう返事が来たから、シャルルの分をよそってテーブルに持って行く。
「ほい、さっき出来たばっかだ。暖かいうちにどうぞ。」
「うん、ありがと。」
そう言ってシャルルは箸を取る。
それで魚の身をほぐして食べようとすると、ぽろぽろと落として

しまう。

「箸、慣れてないのか？」

「う、うん。練習はしているんだけどね。あっ……。」

そう言いながら何とか箸でほぐした魚の身を口に運ぼうとするけど、落としてしまう。

これじゃ、食べられないか……。

そう思って、キッチンに行こうとする。

「フォークとスプーン、どっちにする？」

「え、いいよ。これで何とか食べてみるから！」

そう言って何とか箸を使おうとするけど、またこぼしてしまう。

「シャルル。さっきも言ったけど、もう少し回りを頼ってもいいんだ。

自分だけで解決しようと思わなくていいんだよ。」

そう言ってまた頭を撫でてやる。

「じゃ、じゃあ、あの……。」

「うん？」

ちょっと頬を赤くして、何かを言おうとしていた。

そして。

「北斗が、食べさせて……？」

上目遣いでそう言われて、さらに追い討ちに。

「北斗が、頼ってもいいって言ったから、そうしようと思って……。」

とまで言われてしまった。

これは、オレもちょっと恥ずかしいが……。

「わ、わかった……。えっと、ご飯からでいいか？」

「う、うん。」

そう聞きながら、シャルルから箸を受け取り、箸でご飯を一口大につまみ。

「じゃ、じゃあ……、あーん。」

「あ、あーん。」

……こんな事、深音にもやった事もないし、してもらった事も無いぞ？

……滅茶苦茶、恥ずかしい……。

「つ、次は鮭がいいな……。」

「あ、あぁ……。」

それから３０分位、オレとシャルルにとって恥ずかしい時間があった。

何とかシャルルの晩御飯が終わって、食器を洗って片付けていると、

「北斗って、なんだかお兄さんみたいだ。」

何気なくシャルルが言ってきた。

「オレが？　いきなりどうしたんだ？」

食器を片付け終えて、もう寝る体勢なのでベッドに腰掛ける。

そして、さっき言っていたことを聞いてみた。

「う、うん。僕が家の事とか色々話したでしょ？」

「ああ。」

「それを、何も言わないでちゃんと話を最後まで聞いてくれて……。僕に、どうしたいかって問いかけてくれて。ここにいろ、その間だったら守ってやるって言ってくれて。

泣いて抱きついたら、頭を優しく撫でてくれて……。

僕には、そうしてくれる人がお母さん以外居なかったから、憧れたのかな？

そこから考えてみたら、北斗ってお兄さんっぽいなって思って……。

」

そうだったのか。

確かに、さっきまで聞いていたシャルルの話からすれば味方は居なかったんだよな……。

「だ、だからさっ！」

「んう？」

そう考えていたら、シャルルが何か言おうとして詰まってる。

なんだ？

「……あの、えっと。ふ、二人だけのときだけでもいいから、北斗の事を”兄さん”って呼んでもいい……？」

……予想の遥かに斜め上をぶっ飛んで行く言葉が飛んできた。

……オレを、”兄”って呼びたいって……。

オレは、少し考える。

……まぁ、いい、のかな？

うん、いいか。

聞かれたりしたら……、適当に誤魔化すとしよう。

「シャルル。」

「うぇあ、あ、はい！」

俺がいきなり声を出したのに驚いたのか、へんな悲鳴をあげるシャルル。

「お前が、オレなんかでいいと言ってくれるなら。オレは、喜んで兄って呼ばれることにするよ。」

「っ！！……ありがとう、兄さん……！　うぅっ、うわぁぁーん！」

「あぁ、もう、泣くな。全く。」

またシャルルが泣いてしまった。

でも、この涙はさっきまで流していた、今までの溜まっていたものを吐き出すものじゃなくて。

きっと嬉しくて、安心してなんだろうと、オレは思う。

今まで、自分のことを考えてくれたのは、きっと亡くなったシャルルの母親だけなんだろう。

だから。

今度は、オレが彼女を支えなきゃなんだと思う。

まずは、彼女がここで答えを見つけるまでは、守ってやらないとな。

オレは、泣いて抱きついているシャルルの頭を撫でながら、そう誓った。

――――同じクラスの”友達”であり、この時から大事な”妹”になった彼女の事を、きっと守ると。

第１１話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（前編）（後書き）

というわけでした。

シャルよ、何故こんなに長くなった……。

でも、書きたかったことが書けたのでよかったと思っています。

さて、次こそはラウラさんの本格的な登場になります。

やっと、やっとだ……。

では、次回でまた会いましょう。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などお待ちしています。

特に感想が欲しいです……。

皆様がどのように思ってくださってるのかがとても気になりますので。

よろしくお願いいたします！

第１２話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（中編）（前書き）

どうも、フュージョニストです。

これを書いている最中に、ＰＶが５９，９３３アクセス行ってました。

ＩＳの人気の高さを再確認すると共に、呼んでくれている皆さんに感謝です。

今回も、前回に引き続き一話としては長いです。

では、どうぞ。

第12話〜ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（中編）

わたしがシュテルから体のコントロールをとってから、数日。

その間は、転校してきた初日とほとんど変わらない態度で過ごしていた。

ただ、凰さんについて昼食に行くのだけは避けていた。

理由は、彼女の友人の一人。

――如月北斗。

アレに会うのを避けるためだ。

コントロールをってから最初アレを見たとき、シュテルが出てきそうになった。

それは、避けないといけない。

シュテルが大事思うもの全部壊して、シュテルにはわたしだけを見て欲しいもの。

何で彼女は、わたしが居るのに他のものを求めるの？

貴女には、わたしだけが居ればいいの。

わたしだけが、貴女の傍に居ていいの。

だから、壊す。

如月北斗。
その周りのやつらも。
絶対に。
――シュテルが、わたしだけを見てくれるように。
―月曜　朝―
オレとシャルル、ついでに一夏が廊下を歩いていると、
「そ、それは本当ですの！？」
「う、ウソついてないでしょうね！？」
というセシリアと凰さんの叫び声みたいなのが聞こえた。
「なんだ？」
「さあ？」
「知らん。」
寮から一緒に歩いてきた一夏・シャルルと一緒に首を傾げつつ教室に入る。
「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなのよ？

月末の学年別トーナメントで優勝したら、織斑君か如月君のどちらかと交際でき――」

「俺と北斗がどうしたって？」

「「「きゃあぁぁっ！」」」

一夏が普通に声を掛けただけなのに、声を掛けられたセシリアと凰さん、

それとクラスの女子が取り乱したような悲鳴を上げる。

「何の話だったんだ？　俺の名前が出ていたみたいだけど？」

「う、うん？　そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

二人とも、そんなに慌ててると何かあったって思われるぞ。

それとも、オレたちが聞いたら何かまずいのか？

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！　私も自分の席に着きませんと。」

そう言ってそそくさと逃げるセシリアと凰さん。

同じように、あの二人の近くに居たクラスの女子も自分の席に着く。

本当に、なんだったんだ？

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「……知らん。」

一夏の呟きにそう返した。

……窓際の深音の席で、深音と箒が頭を抱えてたのは何でだ？

―教室　数分前―

私は、深音と共に頭を抱えていた。

理由は、今学校に流れている噂。

その内容は、

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏か如月北斗のどちらかと付き合える』

というものだ。

おそらく原因は、クラス対抗戦の終わった日、一夏に向けて付き合ってもらうと言った事だろう。

確かに、声が大きかった気もするし、それは深音も言っていた。

（北斗はあの時の無人ＩＳとの戦闘の疲れですぐに眠ってしまっ

て、聞いていなかったらしい。）

ただ、問題なのはそれを誰がこんな形で言いふらしてくれたのか、だ。

おかげで、私も深音もあまりほかの事に気が回らない。

私は一夏のことが、深音は北斗のことを少なからず好いているのだから。

「……ねえ、箒。」

「……む、なんだ？」

そう考えていたら、文庫本を開き目を通している深音が話しかけてきた。

彼女はあまり表情を顔に出さないみたいだが、先週のＩＳの実戦の授業のときに怒ったのか
北斗に喰らわせたドロップキックは相当な威力だった。

それだけ彼を好いていて、話していた彼女に嫉妬する程、彼のことを思っていたのだろう。

それは、私も同じかもしれん。

「もし、私達が当たったとしたら。その時は、こんな事関係なく、戦ってくれる？」

こんな事、とはさっきの優勝者云々の事だろう。

確かに、試合中にこんな事を考えている余裕は無いだろうし、彼

女とは全力で戦ってみたいしな。

「……、ああ。そのときには、全力で相手をする。」

「……ん、なら、いい。

……これが、タッグだったら。箒と組んで二人で行けば私達が独占で付き合えるのに。」

「……ははっ、それもそうだな。」

そんなことを、ＳＨＲが始まるまで二人で話していた。

私は、中学の剣道の大会で優勝した事があった。

だがそれは、姉のせいで一夏と離れ離れになった事への、ただの憂さ晴らしでしかなかった。

『誰かを叩きのめしたい』

表彰式でそれを自覚したとき、酷く自分が惨めに思え、激しく自己嫌悪に陥った。

私はただ、暴力を振るっていただけだった。

そんなもの、強さでもなんでもない。

それは分かっていた、はずだった。

だから。

今度こそは。

「私は、強さを見誤らずに、勝てるだろうか……。」

誰にも聞こえないようにそっと、私は小さく呟いた。

―休み時間　廊下―

オレと一夏は、教室に向けて廊下を走っていた。

理由は、トイレに行っていたからだ。

ＩＳ学園は、オレら以外は全員女子。

つまり、使えるトイレが教室から遠い。

だから、休み時間が始まったらダッシュで行って、終わったらダッシュで戻る。

そうしないと授業の時間に間に合わないからな。

だけど、そう考えたらシャルルが一番大変なのか。

女子なのに男子トイレまで行かないといけないし……。

と、そこまで考えたところで一夏が足を止めた。

「どうした、一夏？」

「いや、千冬姉とラウラが言い合いしてるような声が聞こえたから。」

「ふぅん？」

そう言う一夏の後ろから曲がり角を覗く。
確かに、織斑先生とボーデヴィッヒだ。
一夏は言い合っているって言ったけど、あれはボーデヴィッヒが織斑先生に
一方的に自分の言いたい事を言ってるだけだ。
現に織斑先生はうんざりしたような目でボーデヴィッヒを見てるし。
「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません。」
「ほう。」
そう言うボーデヴィッヒをつまらなそうに見る織斑先生。
「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません。」
「なぜだ？」
「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションか何かと勘違いしている。
そのような程度の低いもの達に教官が時間を割かれるなど――――」
ボーデヴィッヒがそこまで言ったとき、織斑先生の雰囲気が変わった。

「――――そこまでにしておけよ、小娘。」

「っ……！」

離れたところにいるのに思わず立ちすくんだくらいだ。
そのくらい、織斑先生の覇気は凄かった。

多分、間近で受けたボーデヴィッヒは、オレよりも体が強張っているんだろう。
言おうとした続きが言えず、口が開いたままだ。

「少し見ない間に偉くなったものだな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る。」

「わ、私は……。」

そこまで言って、覇気を引っ込めた織斑先生。
そして、普段の感じ・普段の口調で、

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ。」

「……。」

そう言った。
ボーデヴィッヒは、黙って俯いたまま早足にその場を立ち去った。

それを見た後、

「そこの男子。盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ」

織斑先生はそう言って、オレたちが居る角まで来た。
「いや、そう言う性癖無いですから！」
「そ、そうだぜ！な、何でそうなるんだよ！千冬ね――」
バシーン！バシーン！
「学校では織斑先生と呼べ。それと、目上の人間なんだから敬語を使え。」
「「は、はい……」」
一夏と二人揃って叩かれた。
相変わらず、容赦なしだからものすごく痛い。
「そら、走れ劣等生。このままじゃお前らは月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。
勤勉さを忘れるな。」
「は、はい。」
「わかってるって……。」
オレと一夏の答えを聞いた織斑先生はニヤリと笑みを見せた。
多分、一夏に向けて言ったのは姉として、なんだろう。
「……戻るぞ、一夏。」
「ん、ああ。じゃあ、教室に戻ります。」

「おう。急げよ。――ああ、お前ら。
廊下を走るな。……とは言わん。ばれないように走れ。」
そう言って颯爽と去っていく織斑先生。
この場は、走っていくことを認めてくれたみたいだ。
っと、ほんとに時間が無くなってきたな。
「一夏、走るぞ！」
「おう！」
短いやり取りをして、一夏と共に教室へと走った。
もちろん、さっき言われたとおりばれないように、だが。
そのおかげで、授業には遅れずに済んだ。
ＩＳの格闘技能に関する基礎知識と応用の授業だから、オレと一夏には死活問題になるしな。
―放課後―
「セシリア。」
「はい？　あら、深音さん。どうかいたしましたか？」
私は、放課後になってセシリアに話しかけた。

「時間があれば、これから特訓に付き合って欲しい。」
「特訓……、と言いますと月末のトーナメントに向けて、ですわね？」
「……うん。」
理由はセシリアが言った通り、月末のトーナメントに向けて少しでも実戦訓練をしたかったから。
勝ち抜いて、正式に北斗と付き合いたい。
そのための特訓だから。
「そうですか……。実は、わたくしもこれから特訓に向かおうと思っていたところですの。
よろしければ、一緒に行きましょう？」
「……うん。ありがと、セシリア。」
「えぇ。では、向かいましょうか。」
そう言って二人で教室を出た。
しばらく、無言で歩き続けて誰もいなくなった辺りで。
「そういえば、深音さんは北斗さんと一夏さんの事、どうおもっているんですの？」
セシリアがそんなことを聞いてきた。

「っ！？……う、うん。一夏も北斗も。お人よしで、変なところで敏感で、肝心なところで鈍感。
……だけど、私はそんな北斗が好き。」

今、顔真っ赤だろうな……。
……ちょっと仕返し、しようかな？

「そう言うセシリアは、一夏のこと、好き？」

「ふぇあ、わ、わたくしですか！？　そ、そうですわね……。
この気持ちが『好き』なのかどうかは分かりませんわ……。
彼のことはとても気になってますし、他の女子がいると何かイライラとしますし……」

私が聞き返すと、同じように顔を赤くしてセシリアが答える。

「……そう。あ、着いた。」

セシリアと話しながら、今日空いている第三アリーナに着いた。

扉が開いて中に入ると。

「「「あ。」」」

凰さんがいた。
まさか、知り合いがいるとも思ってなかったから、三人して間抜けな声を出しちゃった。
ちょっと、恥ずかしい……。

「奇遇ね。アタシはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特

訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ。」

「奇遇、だね。私も、特訓しに来た。」

何か、私達の間で火花が見える。

特に、凰さんとセシリア。

この二人は、一夏と付き合いたいのかな？

「丁度いい機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね。」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。

どちらのほうがより強くより優雅であるか、この場ではっきりさせましょうではありませんか。」

「じゃ、私審判でいい？」

「「お願いするわ（しますわ）」」

そう言って、私たちはＩＳを展開する。

私はライトグリーンのＩＳスーツに赤い装甲のヴァルハラ。

凰さんはピンクのＩＳスーツに明るい赤紫の装甲の甲龍。

セシリアは青いＩＳスーツに青い装甲のブルー・ティアーズ。

そして、二人がお互いにメインウェポンを呼び出したとき――

どこかから、超音速の弾丸が撃たれた。

それを咄嗟に回避した私達は、弾丸の飛んできた方を見る。

そこにいたのは、黒いＩＳ。

機体名称『シュヴァルツェア・レーゲン』

登録操縦者は……。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……。」

セシリアが苦々しげに呟いた。

「どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない。」

「……転校初日もそうだけど。ドイツでは、初対面の人に手を上げるのが礼儀？」

凰さんは連結した双天牙月を肩に預けて、衝撃砲を準戦闘状態に。

私はロングレンジビームカノンと両肩のミサイルポッドをいつでも撃てるようにする。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』、それとＵＮＫＮＯＵＮ……。

……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな。」

明らかな、挑発。

私は、むっとした表情をするだけで済んだけど、凰さんとセシリ

アは口元が引きつってる。
自分の祖国がバカにされたからだろうな……。
「何？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。
それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」
「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、
あまりいじめるのはかわいそうですわよ？犬だってまだワンと言いますのに。」
……セシリア、犬はワンって”言う”んじゃなくて”鳴く”んだよ。
あんまりに二人が怒ってるから逆に冷静になってきた。
そうじゃないと、何があるかわからないから。
「はっ……。二人がかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。
よほど人材不足と見える。数くらいしか能の無い国と、古いだけが取り得の国はな。」
とボーデヴィッヒさんが言ったとき。
ぶちっ、と音がした気がした。
その方向を見ると、セシリアと凰さんの額に青筋が浮かんでる。
しかも、武器の最終安全装置まで外してる。
でも、二人が怒るのは分かるかな。

自分が誇っているもの、それをバカにされ、貶されたんだから。

そう考えていたら、

「はっ、まとめてかかって来たらどうだ？所詮、１＋１は２にしかならん。

下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか。」

ボーデヴィッヒさんの最後に言った事で私もキレた。

流石に自分の友達、それも思い人の親友をバカにされたことは許せない。

「――今なんて言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。

その軽口、二度と叩けぬようここで叩いておきましょう。」

「そうだね……。全力で叩き潰そう……。ボーデヴィッヒ。

……さぁ、アナタの罪を数えろ！」

こんな状況で不謹慎かもしれないけど、この台詞は言ってみたかった。

そう思ったことをすぐに頭から消し、戦闘の思考に切り替える

「とっとと来い。」

「「上等！」」

「負けない！」

そう言って、私達がそれぞれ武器を構えた時だった。

「面白そうな事やってるね。ねぇ、わたしも混ぜてよ？」

アリーナの別の入り口の方から、声が聞こえた。
振り向くと、そこには赤紫のＩＳがそこにいた。

機体名称『サラスヴァーテイン』
登録操縦者……。

「シュテル・ビアズリー……？」

私は、彼女の雰囲気が以前会った時と全く違っているのに気付いた。

以前は、明るいけどちょっとおどおどしてるような感じで、どこか小動物みたいだった。

でも今は、それとは全く真逆。
獲物を見つけ、それを狙う猛禽のような目だった。

「そうだよ？　それより、１対３で模擬戦かぁ～。
なら、わたしがボーデヴィッヒさんの方でもいいかな？」

そう言いながらこちらに向かって飛んでくるビアズリーさん。

「ふん、好きにしなさいよ。まとめて相手してあげるわよ！」

「そうですわね。たとえ、謝っても許しはしませんわよ！」

既に、ゲージが振り切れて怒っているセシリアと凰さんは何も考えることなく了承する。

私は咄嗟に、プライベートチャネルで二人に、

『……二人とも。ビアズリーさんは私が抑える。だから、ボーデヴィッヒさんをお願い。』

『『わかったわ！／わかりましたわ！』』

と伝え二人もそれに頷いた。

そして。

「それじゃあ、始めましょう？」

ビアズリーさんの宣言と同時に。

模擬戦という名の、一方的な”暴虐”が始まった。

～ＳＩＤＥ　ラウラ～

「とっとと来い。」

「「上等！」」

「負けない！」

私がした挑発に、何も考えずに乗ってきた三人。
そいつらに対して攻撃を仕掛けようとしてきたとき。

「面白そうな事やってるね。ねぇ、わたしも混ぜてよ？」

という声が聞こえた。
そちらの方を見る。

そこには、赤紫のＩＳが立っていた。

「シュテル・ビアズリー……？」

と、黒髪の奴が呟く。

「そうだよ？　それより、１対３で模擬戦かぁ～。
なら、わたしがボーデヴィッヒさんの方でもいいかな？」

そう言いながら、こちらへ飛んでくるビアズリー。
中国とイギリスの候補生は私の挑発で血が上っているから考える事も無く許可した。
ただ、何のために乱入してきた？
それだけは、確かめなくてはな。
そう思った私は、プライベートチャネルを開く
『貴様、何が目的だ？』
『目的？　そうねぇ、貴女と同じかしら？』
それをを聞き、少し考える。
そして。
『同じ、とはどういうことだ？』
『貴女は、織斑一夏の存在を認めない。なぜなら、彼が織斑先生に汚点をつけたから。
わたしは、如月北斗のことを認めない。なぜなら、彼女が私だけを見てくれくなるから。
……どう、同じでしょう？』
『……ふん、好きにしろ。』
『えぇ、好きにするわ。』
というやり取りをし、回線を閉じる。

……まぁ、いい。
私に邪魔をするなら、こいつも叩き潰せばいい。
そう思い、向かってくる候補生二人にレールガンを向けた。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

オレと一夏、それとシャルルは放課後の特訓のためにアリーナに向かっていた。
「今日使えるアリーナは、えぇっと……。」
「第三アリーナだ。」
「「わぁっ！」」
「おうっ！？」
いきなり箒の声が聞こえたから驚く一夏とシャルル。
そして、二人の声に驚くオレ。
「……そんなに驚くほどのことか。失礼だろ」
「お、おう。すまん。」
「ごめんなさい。いきなりの事でびっくりしちゃって。」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……。」
そう言いながら頭を下げるシャルル。
その様子に気勢を削がれて、一夏を怒るに怒れない箒。
こういう時、シャルルの素直なところって強いよなぁ……。
「っていうか、箒。いつから横に？」
「……ついさっきだ。」
ばつが悪そうに目を逸らしながらオレの質問に答える箒。
「第三アリーナか……。そういや、放課後になってすぐ、深音がセシリアと一緒に出てったな。」
「なるほど。珍しく彼女と一緒に居ないと思ったらそう言うことだったんだ。」
そういえばと言ったオレにシャルルが答えた。
シャルルの正体を知ってから、シャルルはよくオレといるようになった。
それだけ、彼（彼女）にとって大きな事だったんだろうな……。
「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は仕様人数が少ないと聞いている。
空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう。」

そう言って歩き出す箒。

オレやシャルルもそうだけど、特に一夏は実戦経験の積める模擬戦はありがたいだろうな。

何せ、ＩＳの稼働時間はそのまま実力に正比例するんだから。

「……ん？」

「どうしたのだ、北斗？」

何か気になって眉をひそめたオレに、箒が聞いてくる。

「いやさ、この先にあるのって、第三アリーナだよな？」

「？　ああ、そうだ。」

「それはいいんだけど、何でこんなに人がいるんだ？」

「言われてみれば、確かにそうだな……。」

オレの言った事を確かめるように辺りを見渡す箒。

中には、オレたちの横を慌てて走っていく生徒もいる。

周りが騒がしいのに一夏とシャルルも気付いたのか、辺りを見渡している

「なんだ？」

「何かあったのかな？　こっちで先に様子を見ていく？」

そう言ってシャルルが観客席に向かう通路を指差す。
確かに、観客席ならピットから向かうよりも早く様子が確認できる。

「ああ、行こう！」

そう言って、オレは走り出した。

「お、おい！待てって、北斗！」

一夏がそう言って追いかけてくる。
そのさらに後ろをついてくる箒とシャルル。

何か、嫌な予感がする……。

そう思って、観客席に向けて走る。
そして、着いたそこでは模擬戦を行っていた。

組み合わせは、セシリア&凰さんｖｓボーデヴィッヒ。
そして、深音ｖｓビアズリーさん。

そして、一夏たちが入ってきたところで。

ドゴォォン！

とアリーナ内から爆音が響く。

幸い、観客席とアリーナ内は特殊なエネルギーシールドで区切ら

れているから、
こちらに爆風は来ない。
爆煙の中から凰さんとセシリアが飛び出し、爆発の中心部を苦い表情で睨む。
「鈴！　セシリア！」
隣では一夏が二人の状態を見て叫ぶ。
これは、模擬戦のはず。
だけど、それにしてはあまりに一方的すぎる。
セシリアも凰さんも機体の各所が損傷していて、ＩＳアーマーの一部は完全に無くなっている。
対するボーデヴィッヒは、全くと言っていいほど無傷。
深音の方は、両肩にあるスラスターが破壊され、機動力が著しく落ちている。
ビアズリーさんの方は、ボーデヴィッヒのように無傷。
セシリア、凰さん、ボーデヴィッヒ、ビアズリーさんの４人は代表候補生。
深音にも、それくらいの実力はあるはず。
だから、候補生同士での力量の差は、そこまで大きくないはず。
だとすれば、機体性能の相性か……？
「なにが、どうなってるんだ……？」

そう思っていると、セシリアと凰さんが目配せをしてボーデヴィッヒに突っ込んでいく。

凰さんの甲龍の龍咆が発射されるが、それがボーデヴィッヒに届く事は無く、
射出されたワイヤーブレードに脚を絡めとられる。

狙撃とビットで彼女を援護しようとしたセシリアの攻撃をレールカノンで相殺。
そして、ボーデヴィッヒが手をかざすと、ビットの動きがぴたりと止まる

さらに、動きの止まったセシリアにワイヤーブレードで捕まえた凰さんを投げつけ、
瞬時加速で接近し、両手首に着いたプラズマ刃を展開、ワイヤーブレードも射出し二人を嬲る。

セシリアが自爆覚悟で零距離でミサイルを発射するが、ボーデヴィッヒの機体には傷一つ無かった。

そこから、セシリアと凰さんはボーデヴィッヒに腕に、脚に、体に容赦ない拳と蹴りを入れていく。
二人の機体は、もうとっくに限界を迎えている。

そして、もう一方。

深音とビアズリーさんのほうを見る。

近距離格闘戦で、ビアズリーさんは両手にソードビットを持って、
深音はそれに対抗する為にカタールを呼び出し、お互いに斬り合っ

ている。

だが、基本的に中～遠距離戦向けの武装の深音のＩＳではほぼオールレンジで対応できる
ビアズリーさんのＩＳは相性が最悪だ。

そして、セシリアが零距離でミサイルを放ったのと同時に深音のカタールが破壊され、
ビアズリーさんの蹴りがもろに腹に入り、地面に叩きつけられる。

深音が衝撃で動けなくなったところでビアズリーさんがライフルビット４機を射出。
さらに右腕の装着式ハンドガンと左手にマシンガンを呼び出し、
それを深音に向けて構える。

それを武装が壊され、装甲もほぼ無くなって動けない深音に、向けてそれを放つ。

その瞬間。

「「おおぉぉぉっ！」」

一夏は白式を、オレは電童を起動。
同時に一夏は雪片弐型、オレはユニコーンとバイパーを呼び出し、

観客席のエネルギーシールドを零落白夜とドリルホーンによる一点突破で破壊。

そのまま飛び込み、一夏はボーデヴィッヒへ、オレはビアズリーさんへ瞬時加速で突っ込んでいく。

「その手を離せぇっ！」

「やめろおぉぉぉっ！」

だが、一夏はボーデヴィッヒが何かフィールドのようなものを発生させているのか、
斬りかかったが体ごと動きが止められていた。

オレは瞬時加速とバイパーウィップの特殊能力『イリュージョンフラッシュ』で
深音の前へ飛び込み、ユニコーンドリルの特殊能力『ファイアーウォール』で
放たれた銃撃を何とか防ぐ。

そして、防ぎきると同時に再びイリュージョンフラッシュを使って、
一夏の援護射撃をしているシャルルの元へ向かう。

シャルルの手から休まることなく銃弾がボーデヴィッヒに向けて放たれ続けている。
弾切れを起こした銃は、すぐさま別の銃と入れ替えている。

「一夏、北斗！　三人は無事！？」

シャルルにそう言われ、抱きかかえたセシリアと凰さんを見る一夏。

「う……。一夏……」

「無様な姿を……、お見せしましたわね……。」

「喋るな。……シャルル、大丈夫だ。二人とも意識はある。」

「よかった。」

どうやら、一夏が助けた二人は大丈夫みたいだ。
オレも、抱いている深音を見た。

「深音！　大丈夫か！？」

「……ぅぁ、ほ、くと……？」

「ああ。今は休んでろ。……シャルル、こっちも大丈夫だ。」

「わかった。」

こっちも、何とか意識はあった。
だが、あのビアズリーさんがこんな事をするとは思えない。

……一度、話をしてみるか？

「ファイルロード、ユニコーンドリル！　ドラゴンフレア！」

そう思ったオレは、すぐに2体のデータウェポンをロードし、ユ

ニコーンの背に深音を預ける。
「お前達、深音とセシリア、凰さんを連れて観客席の方に行け。絶対に、傷付けさせるなよ！
一夏、ユニコーンとドラゴンに背に二人を！」
「あ、あぁ！」
オレの呼び出した2体に驚いていた一夏だが、すぐに我に返って
オレの指示通りに
ユニコーンにセシリア、ドラゴンに凰さんを乗せる。
『ヒヒィィン！』
『グルルルル！』
そして、すぐにオレの指示通りに観客席の方へと向かって行くユニコーンとドラゴン。
その後、オレはビアズリーさんの方へと飛ぶ。
「あ、如月君だ。」
「なぜ、あんな事をした？」
オレが近づいても、ビアズリーさんは何事も無いように話しかけてきた。
そして、彼女にそう聞くと、
「あんな事？　あぁ、哀元さんをボロボロにしたこと？」

そう聞き返してくる。

「ああ。それに、今のお前はあの模擬戦の時とは雰囲気が全く違う。今のお前は、本当にシュテル・ビアズリーなのか？」

それを聞きたかった。

ここに来てから感じていたわずかな違和感。

その正体は、多分彼女にある。

「あらぁ、ばれちゃったかな？　まぁいいや。貴方の思ってる事で、多分正解。今の私は、ルゥレア。ルゥレア・ビアズリー。あんな事をしたのは、貴方が憎いからよ。」

「……どういうことだ？」

そして、彼女の答えから、違和感の正体は分かった。

彼女の人格が、シュテルさんではなくルゥレアに入れ替わっているから。

だが、それと同時にわからない事が在る。

彼女は、オレが憎いと言った。

オレは何か、彼女に憎まれるような事をしたのか？

オレのその雰囲気を察したのか、ルゥレアが話し出す。

「……貴方がいるから、彼女がわたしだけを見てくれない。だから、貴方が憎い。

だから、貴方の大切を壊して、最後に貴方を壊す。」

「……彼女？　それは、シュテルさんの事か？」

「そうよ？　理解できた？」

そう言ってニタァと笑うルゥレア。

多分、シュテルさんは彼女の中から見ているんだろう。

そして、悲しんでいるはずだ。そんな事はして欲しくないと。

だとすれば、オレが出来るのは、ルゥレアを止める事だ。

そう思い、バイパーウィップをインストールして構える。

ルゥレアも、ソードビットを両手持ちしいつでも飛び出せるようにしている。

そして、お互い飛び出そうとした瞬間。

ガギィィン！

と、別の方向から音が響いた。

振り向くと、一夏とボーデヴィッヒの間に織斑先生が割り込んでいた。

しかも、ＩＳスーツも身につけずにＩＳ用の１．７ｍ位ある太刀を振るって。

そして、一夏とボーデヴィッヒの二人に向けて一言二言何か言った後。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

そう言ってパン！と手を叩く織斑先生。

「あらら、これじゃ戦えないわね。仕方ない、学年別トーナメントまで大人しくしているわ。
バイバイ、如月君。学年別トーナメントを楽しみにしているわ。」

そう言ってアリーナの入り口に向かっていくルゥレア。
少し遅れてボーデヴィッヒも出て行く。

それからさらに後で、オレたちは怪我をした3人を保健室へ運んだ。

第12話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（中編）（後書き）

というわけで、中編でした。

後編は、保健室での一幕になる予定です。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などありましたら、いただけるとありがたいです。

では、また次回で。

第13話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（後編）（前書き）

どうも、フュージョニストです。

やっと、ブルー・デイズ／レッド・スイッチが終わります。

では、どうぞ。

第13話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（後編）

―保健室―

運びこんだセシリア、凰さん、深音の症状は、打撲と軽いヤケド程度。

そして、今は保健室のベッドで横になっている。

「……。」

「……。」

セシリアと凰さんはむっすーっとした顔であらぬ方向を向いている。

深音は深音で、器用に片手で文庫本を読んでいた。

「別に助けてくれなくてよかったのに。」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ。」

「……。（ペラリ）」

そう言って、助けたはずのこっちを責めてくる。

この二人、意外に似たもの同士か？

「お前らなぁ……。はぁ、でもまぁ、怪我が大した事なくて安心したぜ。」

「こんなの怪我の内に入らな――――、いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっている事自体無意味――――、つううっ！」

「全く、怪我してるのに無理に動こうとするからだ。」

そう言って、セシリアと凰さんを宥める。

なんか、一夏が「バカなのか？」的な表情をしたら、二人に気付かれて思い切り罵られてた。

と、そこへ

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ。」

「ん？」

「あ、シャルル。」

飲み物を買い終えて戻ってきたシャルルが保健室に入ってきた。

何か言ってた様な気がするんだが、オレは聞き取れなかった。

一夏も同じようだったけど、セシリア、凰さん、深音には聞こえたのか、

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！

ここここれだから欧州人（ヨーロッパ）って困るのよねぇっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！

そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「……。（ペラリ）」

顔を赤くしながら捲くし立てる凰さんとセシリア。

深音は気にしていないような感じだったけど、若干顔が赤くなっているから、同じなんだろう。

というか、シャルルは本当に何を言ったんだ？

シャルルは買ってきたウーロン茶、紅茶、緑茶をそれぞれ凰さん、セシリア、深音に渡す。

三人は受け取って、それを一気に飲み干す。

すると、地響きのようなものが聞こえてくる。

それは段々と近づいてきた。

そして。

ドカーン！

と保健室のドアが蹴破られ、数十人の女子生徒が雪崩れ込んできた。

……あれ、どうするんだろ？

「織斑君！」

「デュノア君！」

「如月君！」

そう言って手を伸ばしてくる女子達。

はっきり言おう、女子が鬼気迫った表情なんでかなり怖いです。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの……？ちょ、ちょっと落ち着いて！」

「い、一体、なんなんだよ！？」

「「「これ！」」」

いきなりの事に戸惑うオレたちに女子一同が出してきたのは、学内の緊急告知の書かれた申込書。

「こ、これがどうしたんだ……？」

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行う為、
三人一組での参加を必須とする。なお、三人一組が出来なかった者は、
抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――――」

「ああ、そこまでいいからっ！　とにかく！」

女子から紙を差し出され、俺が受け取り、一夏が横から覗き、シャルルがそれを読み上げる。

そして、シャルルが途中まで読んだところで、女子達が遮ってまた手を伸ばしてくる。

だから、怖いって！

「私達と組もう、織斑君！」

「私達と組んで、デュノア君！」

「お願い、如月君！」

そう言って迫ってくる女子達。

チラッと一夏とシャルルを見る。

シャルルは困った表情で少しだけこっちを見た後、に視線を逸らす。

多分、助けて欲しいと思ったけど迷惑になるって考えたのか……。

一夏とも視線が合う。

どうやら同じ事を考えていたらしく、頷きあう。

そして。

「悪いな、オレは一夏とシャルルの三人で出るから諦めてくれ！」

「そう言うことなんだ、すまない！」

そう女子達全員に向けて言うと、一瞬で静まる。

……この沈黙は、ちょっときついぞ。

しばらくして。

「まぁ、そういうことなら……。」
「他の女子と組まれるよりはいいし……。」
「男同士って言うのも絵になるし……、ごほんごほん。」
そう言って保健室から出て行く女子達。
っていうか、最後の女子の発言はちょっと危ないだろ……。
「ふうっ……。」
「はぁっ……。」
女子達が全員出た後で、オレと一夏が溜息を吐く。
そりゃあ、溜息も吐きたくなるよな……。
そう思っていると
「あ、あの、一夏、北斗――」
「一夏っ！」
「一夏さんっ！」
「……北斗っ！」
一夏とオレに話しかけようとしたシャルルを遮って、凰さんとセシリアは一夏の、
深音はオレの腕を掴んでくる。

そして、

「あ、あたしと組みなさいよ！　幼馴染でしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

「……お願い、北斗。私と組んで……！」

そう言ってくる三人。

さて、どうやってこの三人を説得するか――――

「ダメですよ。」

と考えていたら、声がしたので振り向くと。

保健室の入り口から山田先生が入ってきたところだった。

「三人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。

当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。

ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません。」

と説明する山田先生。

なんだろう、いつもクラスで見ているのと違って、今はちゃんと先生に見える。

そして、山田先生の説明を受けた三人は、理解はしたけど納得は

いかないみたいで、
トーナメントに出られない事でものすごく落ち込んでいた。
「わかってくれて、先生嬉しいです。
ＩＳに無理をさせるとそのツケはいつか自分が支払う事になりますからね。
肝心なところでチャンスを失うのはとても残念な事です。
あなたたちにはそうなってほしくありません。」
という山田先生。
いつにも増して真剣な表情で言うから、三人とも渋々頷いた。
ただ、一夏は何故だかわかっていない様だったから、シャルルから説明を受けていた。
それを聞いて、納得したみたいだが。
そして、とりあえず問題が解決したところで、一つ聞きたかったことがある。
それは一夏も同じようで、
「しかし、なんだってラウラとバトルする事になったんだ？」
とセシリアと凰さん、深音の三人に向けて言う。
「え、いや、それは……。」
凰さんはあわてて何か言おうとするけど、少し顔を赤くして黙る。
セシリアと深音の二人も、同じように黙っている。
やがて、

「ま、まあ、なんと言いますか……、女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「……あの時、あの場にいない二人まで馬鹿にしたから。」

言いにくそうにそう言うセシリアと深音の二人。

凰さんもそれを聞いてコクン、と頷いた。

それを見たシャルロットは何か閃いたのか。

「ああ、もしかして三人とも一夏か北斗のことを――――」

と言いかけて、

「あああっ！　デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！　全くです！　おほほほっ！」

「……いらない事まで、言わないでっ！」

セシリア、凰さん、深音の三人に口を押さえられ、取り押さえられた。

三人がかりで取り押さえられてるから、かなり苦しそうにもがいてる。

「三人とも、シャルルが苦しそうで困ってるから離してやれ！」

「お前ら、けが人のくせに体を動かしすぎだぞ。ホレ。」

オレが三人に呼びかけ、深音は渋々手を放したけど凰さんとセシリアはそれを聞かなかったから、
一夏が二人の肩に指で触れる。

触れられた二人はと言うと、

「「ぴぐっ！」」

と変なうめき声を上げてその場で固まった。
その隙にシャルルは脱出する。

そして、

「「……。」」

恨みがましい目で一夏を睨む二人。
あぁ、滅茶苦茶痛かったんだ……。

「あ……、すまん。そんなに痛いとは思わなかった、悪い。」

そう言って謝る一夏。

「い、いちかぁ……、あんたねぇ……。」

「あ、あと、で……、おぼえてらっしゃい……。」

この分だと、怪我が完治したら二人から鉄拳制裁でも飛んでいきそうだな。
それも、全力全開手加減無しで。

そんなこと思っていると。

「ん？　北斗、腰にあるそれって、ＩＳの待機状態だよね？
……なんか、画面みたいなのが光ってるよ？」

シャルルがそう言ってオレの腰のホルダーに入ったギアコマンダー（青）を指差して言う。

「え？　あ、ホントだ。」

それを取り出し、画面の周囲にあるギアを回して画面を切り替えていく。
その画面には、データウェポンのアイコンが表示されている。

ユニコーンドリル、バイパーウィップ、ドラゴンフレア。

今までだと、ここまででスクロールは止まってしまっていたが、今回は違った。
画面には、新たなデータウェポンのアイコンが表示されている。

その名前は、レオサークル、ガトリングボア、ブルホーン。

つまり。

――――ようやく、データウェポンが全て出揃った事になる。

そう考えていると。

「そういや、北斗。お前にも聞きたい事があったんだけどさ。」

と一夏が話しかけてくる。

「ん、なんだ？」

「今日アリーナでお前が呼び出したアレって何なんだ？」

そう言われて考える。

今日呼び出したアレ……？

ん～～～と。

あ、アレか！

「ドラゴンとユニコーンの事か？」

「そうそう、そんな事を言ってただろ？　アレは何なんだ？」

「あ、それあたしも気になる。」

オレと一夏の会話にようやく復活したのか、凰さんも入ってくる。

セシリア、深音、シャルル、山田先生も気になるのかこちらを見ている。

と言うより、まだ居たんですね、山田先生。

「あの動物を模してる武器、一体どんな性能なのよ？」

そう言って詰め寄ろうとして痛みに動きが止まる凰さん。

……そういえば、データウェポンの事知ってるのって、簪と本音だけだな。

まぁ、みんなになら話しても言いか。

「アレはデータウェポンって言って、電童専用の武器だよ。」

「「「「データウェポン？」」」」

オレが説明を始めると、一夏、セシリア、シャルル、凰さんが揃って首を傾げる。

見事なシンクロだ。

「そ。言うよりも見せるほうが早いか。データウェポン、ホログラムモード。」

ギアコマンダーを取り出し、銃の撃鉄を上げるような感じでボタンを押す。

すると、ギアコマンダーの中から手のひらサイズに小さくなったデータウェポンたちが出てきた。

今まで居たユニコーン、バイパー、ドラゴン。

そして、さっき開放された三体。

白いライオンのような外見で、鬣がサークルカッターになっているレオサークル。

緑のイノシシのような外見で、鼻の部分が４連ガトリングランチャーになっているガトリングボア。

橙の雄牛のような外見で、角が大きく曲がった刃になっているブ

ルホーン。

この六体が、宙に浮かんでいた。

「「「「「！！？」」」」」

いきなり目の前に現れた六体に驚く一夏、セシリア、凰さん、シャルル。

山田先生は多少驚いたみたいだけど、四人程ではなかった。

「あ、触っても平気だぞ？　こいつら、人懐っこいから。」

「ひ、人懐こいって……。も、もしかして、意思とかあるの？」

オレが言うと、聞き返してくるシャルル。

「ああ、あるぞ。まぁ、簡単に言えば、電童の武器は生きてるってことだな。」

そう言うと、また驚く四人。

ふと山田先生を見ると……。

「わぁ～、可愛いですねぇ～！」

そう言ってレオサークルを手に乗せて頬ずりしていた。

っっていうか、順応早っ！

「そろ～り……。」

『……グゥ？　ガウ！』

「わっ！」

そんな様子を見て大丈夫と思ったのか、凰さんが恐る恐るドラゴンに手を伸ばす。

ドラゴンはそれに気付くと、パタパタと飛んで凰さんの頭の上に乗っかった。

「あらあら、わたくしの膝の上でお休みですか？」

『ヒヒィイン。』

セシリアは膝の上にユニコーンドリルを乗せていた。

ユニコーンは脚をたたんでセシリアの膝の上に横たわって、気持ちよさげに休んでいる。

『ブルルッ！』

『ピギィッ！』

「ふふっ、楽しそうだね？」

シャルルの前では、ブルホーンとガトリングボアが追いかけっこをしている。

彼女はそれを見て微笑んでいる。

「……。（ペラリ）」

『シャァ……。』

深音は肩の上にバイパーウィップを乗せ、また黙々と本を読んでいた。
彼女に構って欲しいけど構ってもらえなくて、バイパーは寂しげに鳴いていた。

それから小一時間くらい話をした後、山田先生に帰るよう言われ、オレ、一夏、シャルルは寮に戻った。

帰る直前、深音とシャルルが二人だけで話をしてたけど、何を話してたんだ？

―校舎　屋上―

本来なら鍵が閉まっており、誰も居ないはずの校舎の屋上に、一人の女生徒が居た。

軍服のように改造された制服を身に纏い、輝くような銀髪の、眼帯をした小柄な女子。
ラウラボーデヴィッヒがそこに居た。

なぜ、彼女がここにいるかといえば、

「ごめんなさいね、待たせたかしら？」

そう言って空からＩＳを纏って降りてきた女子。
降りてきた女子は亜麻色の髪を靡かせながら着地する。

シュテルの意識は今は無い為、現在は、ルゥレア・ビアズリー。
彼女に呼び出されたからだ。
「ふん、一体何の用だ？」
「何、簡単な内容よ。月末のトーナメントが、三人一組になったわね？」
「ああ。それがどうした？」
興味が自分の獲物にしかないのか、腕を組んで目を閉じていたラウラが、
眼帯に覆われていない右目をわずかに開く。
「それに織斑一夏と如月北斗が出るのは知っているわね？」
「……ああ。それが？」
「じゃあ、二人が組んだ、というのは？」
「！！」
ルゥレアのもったいぶった説明に少しイライラしていたラウラが、
彼女の一言にわずかに驚いた表情を見せる。
「ほぅ、そうか。……それで？　まさか、この私と組むつもりではあるまい？」
「あら？　そのつもりだったのだけど、いけなかったかしら？」

ラウラが言った事を肯定するルゥレア。
しばらく沈黙と睨み合いが続く。
やがてラウラが口を開く。
「……ふん。まぁ、いい。私の邪魔さえしなければ、好きにしろ。織斑一夏は私の獲物だ。」
その言葉を待っていたらしく、ルゥレアも、
「それは、こっちも同じ事。如月北斗は、わたしが壊すんだもの。」
そう言った。
「なら、それで決まりね。織斑一夏は貴女が、如月北斗はわたしが。それ以外は、お互いに不干渉。」
「ふっ、いいだろう。」
お互いに自分の獲物以外は不干渉という条件となった事で、この小さな会談は終わったようだ。
ルゥレアは再びＩＳを起動し飛び去っていき、ラウラは屋上の入り口へと向かっていった。
「（織斑一夏……。貴様だけは……！）」
「（……如月北斗。絶対、壊す……！）」

二人の瞳には、トーナメントで待つ自分の獲物（ターゲット）だけを映していた。

第13話～ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（後編）（後書き）

というわけで、保健室での一幕でした。

次回から、戦闘パートです。

一体、何話掛かるだろ……。

ご意見・ご感想、誤字・脱字の指摘などお待ちしています。

では、また。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4670w/

IS〈インフィニット・ストラトス〉～GEARを使いし者～

2011年10月16日09時33分発行